
「立派な魔法使い」？なにそれおいしいの？

抹茶アイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「立派な魔法使い」？なにそれおいしいの？

【Nコード】

N2940L

【作者名】

抹茶アイス

【あらすじ】

ある日突然死んでしまった高校生、雅原がはら 真司しんじ。彼は死後に、ヒマを持って余っていた神様に偶然選ばれ、チートな能力を貰ってマンガの世界に送りこまれてしまった

無駄に最強な主人公がネギまの世界でどう過ごしていくのか

テンプレ系駄文小説です。それでもよければ見てください

注意事項です

この作品では他のマンガから能力や技、設定をもつてくることが多々ありますがストーリーはネギまがメインです。

オリ主は能力などがかなりチートです。基本的に負けません。

ハーレムはありませんが原作ブレイクは多分に行う予定です。

作者はSS初心者なのでかなり稚拙な文になると思われます。

更新は不定期です。また、更新速度はかなり遅いです。

ここまでで「大丈夫だぜ！」という方のみご閲覧下さい。また上に記した通り作者はSS初心者なので誤字・脱字や設定の間違いなど指摘してくださるとありがたいです。感想を教えてくださいと更にありがたいです。

0話 テンプレだと？そんなの知るか！ プロローグです（前書き）

自分でも驚くほど出来が悪いな……

0話 テンプレだと？そんなの知るか！ プロローグです

「好きな子のたてぶえを舐めるって例え話はよく聞くけど、実際や
つてる人って絶対いないよね。」

居たら居たで日本が変態の国みたいで嫌だし

「現実逃避はそこまでにしてもらえますか？こちら忙しい身です
ので。」

「や、神様さつき自分でヒマだからって言ってなかった？」

「ノリで言っただけですよ。フフ。」

随分とノリのいい神も居たもんだ。

そう、俺はいま神様（自称）と話している。

なぜこうなったかって？それはつい先程のことだ……

〜数分前〜

俺こと雅原真司（まはらまこと）はそのとき高校の定期テストの勉強に飽き、趣味の
散歩を楽しんでいた。

そして工事中の橋の下を通っていると、上の方から焦ったような声

が聞こえ、

(なんだ?)

とのけ反るように上を見上げ……

ズンツ

「ぐええツ!？」

痛え!？　なんだ？　何が起こった？　痛みで思わず潰れたカエル
みたいな声出しちゃったじゃねーか！

いきなり襲いかかってきた激痛。

見ると自分の左胸が太く大きい、先の尖った鉄パイプのようなモノ
に貫かれていた。

上から悲鳴や救急車を呼ぶ声が聞こえ、状況を理解する。

これ絶対死んだ……もう手遅れだろうな……心臓貫通してるもん。

確実に死ぬとわかってているからか不思議と冷静でいれる……わきや

あねーだろバアーカ！

ざっけんな！　俺まだ17よ？　ピチピチでムフフなお年こ……

ごめんなさい嘘つきましたムフフなのはディスプレイの中だけです。

肌もあんまピチピチじゃないです

でも画面の中だけでもいいじゃない！　幸せだから！

そう俺はなんだかんだで幸せなんだ、だからこんなところで終わって

たまるか……

うおおお！ 出てこい！ 俺の潜在能力的な何か！

ブシュツ！

ああああああ！！

力んだら血が吹き出た！ くそつ墓穴を掘ったわ
い、意識が朦朧としてきた……なんかかなりクリアに三途の川見え
てきた

ならせめて辞世の句を……

「我が生涯に一片の悔い無しツツ！！」

拳王の台詞を叫んだ

…なんか工事の人たちポカーン顔なんだけど……

てか死、死ぬっ……ああ、時が見えるわっ……おい、トキお前じ
やないお前はラオウとでも闘ってる

自分の行動に激しく後悔しながら意識を失った。

目が覚めたら真っ白い場所にいた。死後の世界なのかな？
床がないのか足は宙ぶらりんの状態で浮いている。

（なにこれゲームのバグ画面？）

などと考えながらキョロキョロしていると空から「歩く教会」のよ
うな服を着た人が降りてきた。膝まで伸ばした白髪と顔に浮かべた
微笑が印象的な人だった。

「親方あ！ 空から女の子が！」

「残念ながら私は男です」

「男の娘も……嫌いじゃないぜ？」

「私のマグナムは大口径ですがそれでもよろしいのなら……」

「ごめんなさい冗談です」

これでもかというくらい土下座しといた
普通におにゃのこと恋したいです

「ここは死後の世界ではありません。狭間に存在する何も無い空白
の空間です。」

俺が頭を地面にゴリゴリ押しつけていると、微笑を浮かべた青年（

?)が俺の心の疑問に答えてくれた。

「理解できないことが多くてお困りのようですから一つ一つ教えて差し上げましょう。まず貴方がここに居る理由は、我々が貴方にあるお願いがあつてそのため此処に呼んだからです。」

「え、えつとなんでそれが俺なの？俺にしかできないとか？ウホツ…ということはもしかして選ばれし勇者的な…」

「いえ、特に理由はありません。気まぐれに選んでいますから。それとお願ひについてですが……簡単に言うと漫画の世界に行つて欲しいんですよ。あつ、あと危険な所でも生きていけるよう貴方自身を強くできますからその点は安心して下さい。」

……ハイ？

「え……ええ？」

（現在）

つーか漫画の世界！？ 死後に異世界移動とかなんてテンプレ？

「我々神という存在は長きにわたる生涯で暇を持て余しているのです。ですので娯楽に飢えているのですよ。これもその一つです。な

「ぜ漫画の世界かというところの方が楽しいからですよ。現実世界はつまらないことばかりですしね。」

「知るか、暇ならとりあえず格ゲーやろうぜ格ゲー」

「……神という存在については疑わないのですね。」

「や、ここまでくると信じずにはいられないというかなんというか……とゆうか心読んだ？」

「神ですから。それとお願いを引き受けて下さるならサービスで行く漫画の世界の選択と五つまで願いを叶えて差し上げますよ？」

「答えになってねえ……しかしどの漫画がいいか……魔法は必須だよな」
「K、でもFateはドロドロしてちょっと怖いしリリカルは魔王とか怖いし……やっぱネギまかな？てゆうか神様が漫画とか読んでるのか？」

「決めた！行く世界はネギまにする。願いの一つ目は身体に関してで、真祖……ハイ・デイトウオーカーだっけ？まあそんな感じのにして歳は20歳、格好は高さ185？くらいで。身体能力はふつうの真祖の5倍、魔力と気もそれぞれこのかとラカンの5倍くらいにしてくれ。あっ、あと声は種のクオーゼみたいにしてくれ。」

「最後のかなり重要ね」

「了承しました。残り4つです。」

「知識だね。主に武器とか武道の基本的な型について。あとは固有結界で無限の剣製を発動出来るように。それと…ああ、そうだ。HUNTER×HUNTERの念能力みたいに気で能力を作れるようにしてくれ。因みに作れる数に制限はなしで。」

あとなんかあるかな……あ

「最後に、魔法の適性を全種類S+にしてくれ。」

危ない危ない。肝心なのを忘れるところだったよ。

「貴方の願いは全て受理されました。ではこれより貴方を異世界に送ります。場所はイギリス、時期はエヴァンジェリンが真祖になる100年ほど前です。せいぜい私を楽しませる程度には暴れて下さいね。」

いま本音っぽいの出たぞ？

そして神様が手を軽く掲げたかと思うと、俺の横の場所に亀裂が入り空間が割れた。

「せっかくなので定番のヤツにしておきましたよ。貴方もきつと気に入ってくれるでしょう。」

なんのことかわからんが嫌な予感しかしない……まあいいか
亀裂に体を向け異世界への旅立ちに胸を弾ませ……

「ねえ、これカタパルト発進でゲート入れな」早く行きなさい」ゲ

シッ ふおお！？」

蹴り落とされた

0話 テンプレだと？そんなの知るか！ プロローグです（後書き）

おまけ

死ぬ前に真司が見たもの

「ああっ、時が見えるわっ……………」

トキ「呼んだ？」

ラオウ「お前はこっちだ」ガシッ

トキ「あっ、ちょっと足に剣刺さないで アッ……………」

ケン「……………」

1話 やっぱ正義より悪の方がカッコイイよねJK

「…定番ってこれのことかよ。」

絶賛落下中である
顔に当たる風が痛いです。

てゆうか大丈夫なんかこれ！？ …大丈夫なんだろうな、なんとって普通の真祖の5倍の肉体だし。

ダァン！！

軽く地面にめりこんでしまった。幸先わるいぜ。
地面に激突する瞬間に気っぽいので体を覆ったとは言え無傷とは…
…流石のチートボデーWWW

「…で、ここはどこだ？」

言っただけで。

「1Jの声は！」

そう、種の某隊長の声になっていたのだ。かつちよいいぜ！ すぐ近くにあった湖で姿を確認すると、黒髪で日本とアメリカ人のハーフのような顔をした長身の俺がいた。

「おおつ…容姿変わってる。あの神様も地味に気が利くな。」

と、一通り満足したところで

「1Jは……………どこだ？」

クールに言い直してみた。やっぱりいいわこの声ww

気を取り直して辺りを見回してみると、近くには森と湖しかなく人の気配はなかった。
せっかくだから色々ためしてみるか

「しょおおーりゅうつけええーん！！」

ビビりました(汗)

いやね、気とか使わず全力で跳んだら15mくらいいっちゃったわけよ。

ヤバくね？絶対これ5倍とかってレベルじゃないと思うんだけど。

気を取り直して次は魔法、と思っただけど……

「魔法の知識もらうの忘れてた……」

魔力はあるのに魔法使えないとか宝の持ち腐れotz
気の使い方もイマイチわからんし……まあ肉体だけでも十分チートだからいいか。

「I am the bone of my sword .
体は剣で出来ている。」

Steel is my body, and fire is
my blood.

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand
blades.

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death.

ただの一度も敗走はなく、

Not known to Life.

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create
many weapons.

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet, those hands will never hold
anything.

故に、生涯に意味はなく。

So as I pray, unlimited blade
works.

その体は、きつと剣で出来ていた。

『無限の剣製<アンリミテッドブレイドワークス>』

唱え終わった瞬間、炎が走り世界を塗り替えていく。かの「正義の

味方」の心象風景に。
それと同時に俺の頭の中に様々な宝具の情報が流れてくる。

「お！マグダラの聖骸布発見。これで美女に縛られ…げふんげふん。これは英霊エミヤが解析できなかったモノまで取り入れてあるな、乖離剣に…：…宝石剣！？ 原作が終わったらまた別の世界にでも行かせる気なのか？あの神様は。」

固有結界の方は予想以上だったな…視力強化と解析の魔術もなんかできるようになってるし。

「トレス・オン
投影開始」

投影したのは太陽剣グラム。

（Aクラス以上の宝具の爆発は見たことないからねえ…一度試してみたかったんだよな）

太陽剣を力の限り遠くにぶん投げる。

……あつという間見えなくなっただけど気にしない。
呪文を唱える

「壊れた幻想くブローケン・ファンタズム」

ドオオオオオオオオオ!!!

(。*。;)

……やっしまったぜ……
まあ、あれだ。乖離剣には絶対に「壊れた幻想」やらないようにしよう。
うん、そうしよう。

その後、念能力について考えてうんうん言っていると人が来た気配がした。

振り返ってみるとローブを被って、いかにも魔法使いですよ〜という杖を持った数人と剣を持ち甲冑を身に纏った騎士が数人警戒しながら近づいてきた。

「貴様がさっきの魔法を放った者だな？」

「（外国語がわかる…神様GJだぜ）そうだが…別に良かろう？被害が出たわけでもなさそうだからな。」

「黙れ化け物が！！貴様が数十メートルの跳躍をしていたのを見ていた者もいるのだぞ！！」

見ると十歳くらいの子供が離れたところから俺をチラチラ見ながら、必死に大人の言葉に頷いている。

…あの子に見られていたのか……超恥ずかしくなってきた

「ふん、言い逃れ出来んようだな。魔法の射手、用意！」

あまりの恥ずかしさに子供から目を逸らしていたら、なんか大人達が臨戦体制に入っていた。

これは殺ってしまった方がいいのだろうか…まあ某仮面の人も「殺していいのは殺される覚悟のあるやつだけだ」って言ってるしいいよね。彼等も殺される覚悟があったってことで

「エルサ・デル・エリゴ「遅い」！？」

リーダー格の男の前に一瞬で間合いを詰め、詠唱キーを唱え終わる前に首に手刀をいれ男の首を撥ねた。

……ように他の男達には見えた

オウフwww人体って水饅頭みたいに軟らかいなwww魔法怖かったから詠唱止めようと咽にチョップしたら首まつぶたっ
なんだけどwww真祖パワー凄え

その後も俺の一方的な蹂躪が続いた。だつて魔法も気づけばいのガドしたら全然怖くないことに気付いたもん。

「無限の剣製」を使うまでもなく純粋な身体能力のみで殺し続け、あつという間に戦いは終わった。

罪悪感？ ねーよwww

いかついオツサン達に湧く情はねえ

しかし……これからどうする？

とりあえずエヴァに会うまでは力を身につけておきたいけど、そういうのじゃなくもつと未来の方針。

つまり将来像。最終的に麻帆良でまったり暮らす？ それがいいかな。でも俺って真祖だから平和とはかけ離れた生活になると思うんだよねえ

ま、しばらくはバイオレンスな生活を楽しむかな。将来のことはまだ考えなくてもいいか、疲れるし。

ふと見るとさっきの子供が腰をぬかして震えながらこっちを見ている。

殺すか？ でもさすがの俺でも子供殺すのはちょっとねえ……メリツトがない限りはできるだけ命を奪う真似したくないねえ
考えてみたら俺って元々悪？ まあいつか、自由奔放に生きたいし。それともエヴァの生き方でも見習うか？

「『誇りある悪』、か……」

ボソツ、と口にだして言うと子供はビクッ！と反応し、泣きはじめた。

「…安心しろ、子供は殺さんよ。私は『誇りある悪』だからな」

キマった、クールにな……

恥ずかしいセリフで内心赤面しながらも俺はその場を去っていった。

1話 やっぱ正義より悪の方がカッコイイよねJK（後書き）

オリ主が最後の方で一人称「私」になってるのは本人が声とイメ
ージを重ねようとしてるからです。

2話

なんか魔法使わなくても投影だけでも人形倒せる気がしてきた

あの後俺があてもない旅を始めて数か月。吸血鬼だから食事はたまに襲いかかってくる賞金狙いの奴らの血を少し飲むだけでよかったから楽だった。今はそれすら必要ないしね。

そうそう、なんか討伐しにきた輩を血祭りに上げてたらいつの間にか賞金首になってたんだよね。まだ賞金も低いし二つ名もないから『誇りある悪』を名乗るには程遠いけどな。

「しかし最近、襲撃者の数が妙に多いな……」

そうなのだ。しかも数が多いうえに高位の魔法使いまで増えてきたのだ。

相手が少ないときはネタ技で遊んだりするけど数が多いとウザったいんだよ

（身体能力だけでも倒せるには倒せるけど手傷負うのもなんだからそろそろ投影使ってみようかねえ）

などと考えるうちに近づいてくる人の気配。もう気配を探るのもお手の物である。

「いたぞ！者どもかかれ！！」

やかましいねえ

「ガハッ……なんだこの大量の剣は……」

「おい貴様、最近やたらと私をつけ狙う輩が多いのは何故だ？答えたらこの回復効果のある魔法薬をくれてやる。」

この前の襲撃者の遺品だけだな！

すると生き残りのその男は数秒迷ってから

「……ここら一带を治めている……古い魔法使いの一族がいる。彼らは……自分たちの土地に異物が……入り込んだのをよく思っていない。だから私たち……傭兵に依頼……したのだ」

「その一族の居場所は？」 チャキ

首筋に無名の剣をおき、言う。

「……ここから…東に11kmの城だ…」

「そうか」

そろそろ失血死しそうだったから魔法薬を投げて渡す
うん、ちゃんと約束を守る俺カツコいい！（キラッ）

……死にたくなってきた

「……」

数時間後、俺は例の一族の居城と思われる場所に来ていた。

「なんか畏とかありそうだけど……まあなんとかなるだろ。」

なんとかなりました

軽い捕縛結界とか何個があったっぽいけど『破戒すべき全ての符ルールブレイカーく』ブンブン振り回しながら走ってたら、たまにパリンパリン聞こえてたからたぶんあれが結界なんだろうな。

ホントに俺チートだなあ、と思いながら扉を開けるといきなり魔法の射手が飛んできたので横に跳び、壁に隠れてやり過ごす。

…つもりだったのだが壁を軽く貫通して魔法の射手が襲いかかってきて、何本か貰ってしまった。むむ、かなりの威力だな。すぐ回復するからいいけど

「…その回復力、例の真祖の吸血鬼じゃな？…使えん傭兵じゃ。」

声のした方を見てみると髭をもつさり蓄えた、貫禄のある老人が杖をこちらに向けていた。

老人の内包する魔力は今までの魔法使いとは一線を隔すものだった。

え？俺？いや、俺と比べたら相手がかわいそうだからwwwま

あ隠してはいるけどね

「さて、私に手を出したからには…わかっているな？」

「ふん…儂の土地に入ったこと、後悔させてくれるわ！『燃える天空』！」「ゴオッ！」

言い終わると同時に無動作で『燃える天空』を放ってきた。あらかじめ準備していたとはいえ上位魔法を無詠唱か…かなりの熟練者だな

「『熾天覆う七つの円環』ロー・アイアス<』」

それを大アイアスの最強の防御壁で防ぐ。
あっ、花卉一つ散った。

煙が晴れる

「…この程度か？」

「!?!?馬鹿な!?!」

相手が焦って呪文を唱え始めるが、遅い。俺の頭の中で既に設計図は出来上がっている。

「フリーズアウト停止解凍、ソードパレルフルオープン全投影連続層写！」

27本なんてのとは比べ物にならない数の、それなりの神秘を纏った剣や槍を高速で射出する。魔力は無駄に余ってるから出し惜しみはしない。

100を超える宝具を避けきれるはずもなく、必死の回避むなしく体を穿たれる。魔力障壁なんて宝具にかかれば紙同然だぜ！てゆーかオーバークイルするwww

魔法使いはそのまま絶命した

避難していた老人の家族を城から追い出し（強制的に）、城の探索をしていた。やっと見つけた魔法への手がかりだからね。このチャンスを逃したくはないよ。

しばらく地下フロアを歩いていると工房のような部屋を発見。魔法の本はもちろん、「別荘」のようなものまであったので現在狂喜乱舞している。しばらくは魔法の習得と修行に費やすかな……

2話

なんか魔法使わなくても投影だけで人形倒せる気がしてきた（後書き

今回は少しご都合主義が混じってしまいました、反省はしています。
これからも続くかもだけど。

3話 ナギみたいな才能の塊って理不尽だよな。修行編

「ちょｗｗ魔法簡単過ぎワロタｗｗ」

さすが魔法適性全種類S+。一週間で上位魔法の大半は使えるようになったぜ。本見ながらだけど。

(呪文の暗記ダリいな…でも『千の呪文の男』みたくあんちよこ使うのはカッコ悪いから一応全部覚えておくか)

～一ヶ月後～

「やっと終わったぜ！」

とりあえず上位魔法までの呪文と結界の知識を一通り暗記した。ホントは時の流れの遅い「別荘」でやりたかったけど、その中にい

るときに襲撃にあつて「別荘」が壊されたら何が起こるかわかんなくて怖かったからね。
まあなにせよ結界の知識は得たからこれで心置きなく「別荘」で修行ができる。ちなみに結界は城の半径2km以内に人が来たら自動で反応し、術者に侵入者の情報を伝えるモノだ。

「いねー」

別荘の中に入っていく。さあ、修行の始まりだ。

別荘内はエヴァのそれとは違い、中心位置には大きめの武家屋敷が鎮座しており、屋敷の半径200mは草原、そして草原の向こう側には森が広がっているだけの淋しい場所だった。

…いや、英国貴族がなにゆえ武家屋敷!? 緑茶飲んで「わびさび(笑)を感じマースwww」とか言ってたのか?

…脳内再生して吹いてしまったのは内緒だ

まあ…気にしたら負けなんだろうな、うん。

気を取り直して探索を再開、…緑茶がホントにあったけど気にしない

調べてみたところ、基本的な所は原作に出てきたモノと変わらなかった。違うのは、風景と、時間が外の1時間をこっちの12〜24時間に自由に変更できるところだ。なんて万能wwちなみにいつでも外に出れるよ！

「とりあえず修行のプランとしては朝から晩まで肉体と魔法の鍛練、夜は魔法関連の勉強か」

一人つぶやく。この世界に来てからまともな会話がなくて寂しいです(泣)。

↳修行「外の時間軸で」一日目↳

朝、起床後に武器の鍛練。投影で剣を創り、神様から貰った基礎の型の知識を基に剣を振るう。それが終わったら槍、次は刀……と無数の種類の武器を振る。まずは自分にあった武器を探さなきゃな。まあエヴァが真祖になるまであと99年。「別荘」のこともあるし時間はたくさんあるんだ。焦らずにいこう。

日が西に傾き、2時ごろかな？という時間に魔法の練習に移る。『魔法の射手』などの基本魔法から入り、『千の雷』のような上位魔法までを、出来るだけ術式にムラが無いように、魔力を無駄に使わないようにして魔法の密度を上げていく。

日が落ちかけ、6時頃と思われる時間に屋敷に戻る。
やっと居を構えることができたのだし、せっかくだからお祝いにと
外で捕ってきた食材を使い、この世界に来て初めての食事をとった
のだが、久しぶりすぎて箸が上手く使えず落ち込んだ。リハビリの
大切さと辛さが少しわかった。

夜、城から持ってきた大量の本から数冊を自分の部屋「仮」に持っ
ていき読みふける。
そして数時間後に床についた

シンジ は レベル が 1 あがった !
たいりよく が 1 あがった
まりよく が 1 あがった
ちから が 2 あがった
すばやさ が 1 あがった

かしこさが 2 あがった

……今、電波が走った気がしたけど気のせいだろう

（修行2週間目）

ようやく自分の得意な得物がわかってきた。ナイフだった。こらそこ！シヨボいとか言わない！小回りが利くし投擲もできて便利なんだから！

ハサンのダークを投影し、対人戦をイメージして鍛錬する。これからはナイフをメインに鍛錬するか。

ナイフ以外の武器の鍛錬の時間を少し削り、体術の習得を始める。

身につけるのは中国拳法。え？理由？同じ流派で人形を打ち負かすためだよwww

中国拳法の基本型を一通り確認した後、ほんしけん翻子拳の練習に入る。

説明しよう！翻子拳とは突きを主体とした、非常に多い手数が特徴の中国拳法である！（某格闘漫画より引用）

身体能力が異常だから1秒間に何発もたたきこめる。そのうち「拳の壁！」とかできそうだな。

魔法の方はあまり変化なし。こればかりは長い時間かけてやらな
いとどうしようもないからな。地道にいこう。

（修行二年目）

「久しぶりだな、レオン」

「クラ○ザー！」

ナイフの鍛練も兼ねてバ○オ4ごっこ中。今日も元気です。

たまに襲撃とかにあったりするけど実践経験が積めるので万々歳です。どんと来い！
そうそう、武術を極め始めてしばらく経ったら「気」の流れとか制御とかできるようになってきたんだよね。まだラカンみたいに気を放出しての攻撃はできないけど身体の強化とかはできるようになったよ！気の操作の練習も始めようかな……

く修行五年目く

「拳の壁！」 シュバババ！

成功した。一瞬の内に拳を前方に数十発打ち込み、相手の視界を拳で埋め尽くすトンデモ技だ。やられた方はトラウマになるだろうな

……………

〽修行十年後〽

「エターナル…ネギ・フィーバー！」

ドオオオオオオオン！！

気の放出とか確実にラカンより上だろこれ。魔法も英雄クラスを軽く超えてるし、自分に自信が持ててきた今日この頃。

〽修行三十年目〽

「青春してえ……」

できません。

く修行百年目く

「そつだ、街に行こう」

行くそつです。

主人公設定へネタバレ注意

名前:

シンリー・T・カーズヴェルト

(本名 雅原真司)

エヴァに聞かれて咄嗟に考えた名前。ミドルネームのTがなんの略かは現在意見を募集中。

二つ名は「絶対強者」、「千の武器の男」、「紅の破壊神」、「真祖皇帝」、「黒衣の殲滅者」などがある。
最終的に「絶対強者」で落ち着いた。

種族:

真祖の吸血鬼『ハイ・デイルイトウォーカー』

年齢:

700歳くらい(見た目は永遠の20歳)

外見:

顔立ちはイケメン予備軍。ハーフに見える。

髪は青が少し入った黒髪を少し短めになっている。

少し細目で瞳の色は黒に近いブラウン。吸血鬼なので紅い眼にすることも可能。

身長は190近くあり、細身に見えるが脱ぐと筋肉がすごい。

早い話ちょびっつのジーマを鋭くした感じ。わかんない人はFat eの黒髪なクー・フリーンで想像して下さい。

性格：

元の世界では格ゲーが趣味の厨二オタ。ネギまの世界に来てからはオープンな厨二オタ。つまり厨二オタ。

。クルーゼ声が好き。

けどボケるときは声変わりの魔法をよく使う。

日々をまったり過ごすのが好きだが、戦争以来、バトルジャンキーな一面も出てきた。強いヤツがいると「オラわくわくしてきたぞ！」状態になる。

ナギ達は好きだがネギ達はけっこうどうでもいい。というか直感タイプのカバと話が合う。自分もバカだから。

イベントが好き。

エヴァが好き。

エヴァが好き。

能力・技、その他：

『身体能力』元は真祖の五倍だったが、修行のおかげで生身で上位のドラゴンを倒せる。

『魔力・気』現在はそれぞれこのかとジャックの40倍くらい

『無限の剣製』言わずと知れたアレ。ただしランクダウンと真名解放の縛りがない。また、法具は魔力を籠めれば籠めるほど威力が上

がる。もれなくセットで解析と遠視の魔術が付いてきた。

『全魔法適性S+』全ての魔法において適性がある。

『ほんしけん翻子拳』中国拳法の流派の一つ。拳の高速の突きが特徴で、手数&速さ史上主義のシンリーとは相性がいい。

某最強の弟子に出てくる、頭に鳥かごを載せていた男が使っていたやつだ。

『ナイフスキル』修行の末にナイフを自由自在に操れるようになった。「GOLAN」の軍曹のように捌くもよし、メイド長のように投げるもよし、使い方は様々だ。

『常闇の外套』本格的な戦闘の時のみ着る。外見はサドラーの服の紺の部分を黒くした感じ。魔法で組んでいて、魔法、物理ダメージを極限まで軽減する。

『闇の魔法くマギア・エレベア』エヴァと共同開発した。普段はあんまし使わない。

『無限宝庫』王の財宝くゲート・オブ・バビロンへの改良版。生ものが腐らないなどの利点がある。

『炎皇爆域くえんおうばくいき』その気になれば周囲3立方kmを炭化させることができる範囲型殲滅技。

『獄炎の紅翼』見た目が紅き翼そのもの。推進力以外にも「月光蝶」の様に当てて攻撃も可能。むしろそっちが本命。全力でやると味方も巻き込むから抑えている。

『闘神』^{インドラ} 感謝の正拳突き修行の末に身に付けた技能。技は、百式観音のように手を張り手の形にして攻撃する『闘神・一ノ掌<いちのて>』や、握り拳の『闘神・一ノ拳<いちのけん>』などがある。二つとも単純に無数にある腕の一つで突きや叩きつけをするだけだが、攻撃の起点となる手を回し合わせる動作は神速、攻撃一つ一つが洗練されており、例え英雄クラスでも目視できない速さである。シャーマンファイトでガンダーラが使っているような見た目

『テイガ』魔法世界の裏ダンジョン的な洞窟で見つけ、倒して服従させた最上位のワイバーン。見た目は前脚と翼がくつついたミラボレアス。

4話 三流の悪役の台詞ってだいたい決まってるよね(前書き)

今回は超長いです。前の二倍ぐらいww

エヴァが一番好きなキャラなので力をいれたらこんなになってしまいました。

4話 三流の悪役の台詞ってだいたい決まってるよね

修行を終えて数年が経った。

本当はエヴァが真祖になったあとすぐ彼女を保護しようと思っていたのだが、修行に夢中で一年ほど出遅れてしまった。修行を終えて街に出てからも彼女の居る場所がわからず情報も無く、やって来るのは賞金狙いの討伐者くらいだった。

そうそう、街に出たときに知ったんだけど俺の賞金が500万ドルに上がったんだよね。二つ名も「千の武器の男<サウザントアームズ>」、「絶対強者」、「真祖皇帝」、「黒衣の殲滅者」、「ちよ、拳で前が見えないんだけど！」等、たくさん付けられていた。

「黒衣の殲滅者」についてだが、俺はいま、影と闇の魔法を合わせて創ったオリジナル魔法「常闇の外套」を戦闘時に身に纏っている。これは、カゲタロウや高音の「黒衣の夜想曲」の発展型で、影の特性で物理攻撃を緩衝し、闇の特性で魔法攻撃を一定量まで吸収という二段構えで構成されている究極の防護服である！ちなみに見た目はバ〇オ4の教祖みたいなカンジだ。なんか悪役って感じのオーラが出ていいよね。たまにこれで街にも出たりするえ？そんな格好で怪しまれないかって？その辺は認識阻害魔法でバツチシだけぜ！

しかし俺が名乗ってないからと言えど、名前も無いヤツに多額の賞金賭けて二つ名までつけるってなんかマヌケくさいなww
そもそも一つ目の名前がわからないヤツに二つ名つけるとかwww

…で、話を戻すと

「エヴァどこにいんだよ…」

見つからないのだ。

俺としては未熟で生き残るのに必死な時に保護して、独り立ちできるくらいになるまでは同行して鍛えてあげたいと思っている。できれば人の汚い部分を見て心が荒む前に。あと「この娘はワシが育てた」とか言いたいしね。

決して後者が本音ではないよ？

それから数週間後、ようやく出会えた。なんかピンチっぽいけど。

ボロボロの状態で地面に伏し、悔しそうに顔を歪めているエヴァ。

そしてそれを囲む数人の魔法使いたち。

そしてその様子を上から見ている俺。

原作で生きてるってことは、放っておいてもなんとか切り抜けるんだろうけど、ようやっと見つけたんだ。何より見ている気分が悪いからな。

ゆっくりと下に降りていく。まだ気づかれていないようだ。

そして魔法使いが不死殺しと思われる剣を振りかぶった瞬間に声をかける。

「そこまでだ。」

side エヴァンジェリン

最悪だ

今日は長旅で疲れていたから、なけなしのお金で宿を取り、部屋を
嚴重に閉め久々にまともな睡眠をとっていた。

仮にこの嚴重に閉めきった部屋に入れたとしても、扉を開けるため
の火力の高い魔法を放てば騒ぎになる。それ程の騒ぎを誤魔化す認
識障害魔法なんて奴らでは使えない。流石に奴らも町中で魔法を見
られるような行為はしないだろう、と思っていた。

だが……

「甘かったッ……！」

奴らはあらかじめこの町全体に、魔法に関することに対しての強力
な認識障害の結界を張っていたのだ。

私はいま脇腹を押さえながら、追ってくる魔法使い達から走ってに
げている。脇腹の傷は爆音で目が覚めてからの不意打ちで付けられ
たものだ。不死殺しの類のモノなのか、真祖の回復能力が機能して

いない。

おそらく住人たちは私たちのことを、追いかけて遊んでいる、程度にしか見ていないだろう。

しかし…何故この町にあらかじめ結界が張ってあったのだ？

可能性のある理由としては……考えたくはないが最初からこの町に誘導されていたのか…自分としてはただ必死に逃げただけだったんだがな。

そのまま町を出て、森の方へ逃げてゆく。森まで行けば、なんとか隠れてやり過ごすことができるだろう。そう思った瞬間、

「…ッ！！」

傷が急に痛み出し、堪らず手で傷を押さえそのまま地面に突っ伏してしまう。何故か傷口からは魔力と生気が漏れ出し、体に力が入らなくなってくる。

後ろから足音が聞こえてくる。今すぐ立って逃げなければいけない。だが激痛がその行為を妨害する。焼きごてを傷口にあてがったような痛みに唸っていると、既に魔法使い達に囲まれていた。気がついたら痛みは無くなっていた。

「貴様も無駄な足掻きをする…逃げ足の速いせいで無駄な魔力を使
つてしまったではないか！」

見るとその男は私に剣で不意打ちを仕掛けた奴だった。…さっきの
痛みはあの剣の効果によるものか。

「まあいい…これで終わりだ。」

男が剣を構える。

ああ、私はここで死ぬのか。

真祖になってから数年、散々な日々だった。十歳の誕生日の朝、起
きたときには既に人間では無くなっていた。気付けば周りの人を殺
して、何がなんだかわからない内に魔法使い達に襲われ、返り
討ちにしていた。常にナニカに追われていた。時に魔法使い、時に
は賞金ハンター。まともな睡眠すらとれやしない。そして今こんな
クソつたれな連中に殺されかけている。

本当に散々な人生だ。いや、もう人間ですらないから人生とすら言
えない。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという化け物はここで生
を終えるのか。

そう私が死を覚悟した瞬間

「そこまでだ。」

『彼は現れた。』

s i d e
o u t

ふっ…雅原真司、美幼女を助けるため、いまここに惨状！

誤字じゃないよ！

「な、なんだ貴様は！」

「ふん…この服を見てもその台詞が言えるかな？」

言っで、『常闇の外套』を展開する。

「なっ！き…貴様、『絶対強者』か！？いや、だとしても何故！！」

「いかにも、私が『絶対強者』だ。それと何故ここに居るかは、幼女が虐められている気配がしたからだ。」

自分で二つ名を名乗るのってなかなか恥ずかしいぞ、これ。…え？
恥ずかしかる所が違う？知るか！

「なにをふざけたことを！」

「ふざけてなんかないさ（前半は）。それと…私は面倒事が嫌いでね、手短かに死ね。」

言い終わった瞬間に男の顔に拳をいれ、頭部を吹き飛ばす。首から上の無くなった男を見て、ようやく残りの敵達が動き始めるが、それよりも早く、投影したダークを残りの敵八人の頭に投げ、殺した。その場に残ったのは俺九人の死体と不思議な物を見るような目でこちらを見ている美少女…もといエヴァのみだ。とりあえずこつちから声をかけてみるか

「君、大丈夫かい？どこか怪我はないかい？」

…くさっ！！我ながら胡散臭いことをよく言えたもんだ…

すると彼女はやっと気がついたのか、警戒するそぶりを見せながらも口を開いてくれた。

「これが大丈夫に見えるのか？もしそうだとしたらキサマの目は節穴だな。」

… Oh、God… 既に人の汚れに触れてしまったか……
ピュアなエヴァも見てみたかったけどいいか。Sのほう好きだし。

「怪我也だが、まず魔力がすっからかんだ。足一本まともに動かせん。」

「… 精液の交換によって魔力の回復ができると聞いたことが…」

「殺すぞ」

「サーセンww」

いや、事実なんだけどねえ

「はあ… ちつきまでの雰囲気はどうだったんだ… で、キサマの名前は？」

「さつき会話で出てこなかったか？ 『絶対強者』や『千の武器の男』と主に呼ばれているが。」

「そうではない。私が聞いているのはキサマの本名だ。… あるのだらう。」

ああ、そっちな。

「私の名前か？し……」

…待てよ？思ったけど今の段階で名前を知ってる人がいないってことは名前を変更可能ってことだよな？…ヤバい、なら今すぐカツコイイ名前を考えなければ。ハーフみたいな顔だから外国人と言っても通じるハズ。なら…どうする。まずい！エヴァに話かけられる前に言わなければ……！

「……？」

ああ！そんなに不思議そうな顔で首を傾けないで！可愛すぎる！！
ってこんなこと考えてるばあいじゃない。早く、早くハヤク……

「し……シンリー・T・カーズヴェルトだ」

誰だよシンリーって

つーかミドルネームがタカミチと被ってる！なんかもう最あk「シンリーか、いい名だな」え？いいのかこの名前？

「私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

知ってます

「…ま、どの道そんな状態では他の魔法使いに殺されるのがオチだろう？それに今の君では此処を乗り切ったとしても高位の魔法使いに遭遇したならばあつという間に殺されてしまうぞ。だから……私に着いて来ないかい？」

「…何故そこまでする。」

「なに、長い人生のせいで暇を持て余しているから話相手が欲しかったがけだよ。それが自分同様に永遠の命を持つ者ならば願ってもないことだ。」

「人生、か。シンリーも化け物のくせにそんな言葉を使うのだな。」

「私達は人間だよ。例え肉体が異形のモノになろうとも魂は変わらない、変えてはいけない。違うか？」

「……そうだな。そうだ……わかった。お前に着いて行くことにしてやる。だからまず治療を頼む。」

「心得た。」

俺はエヴァをお姫様抱っこで抱え、影のゲートを使って自分の居城

に帰って行った。

…エヴァの感触が良かったのと、抱えた時に頬が少し朱くなってるのを見て可愛いと思ったのはだまっておこう……

5話 やっぱり平和が一番だね(前書き)

日常会話を書くのムズかしいな…

5話 やっぱり平和が一番だね

あれから数年が経った

今ではエヴァ（キティと呼んだら殴られた）ともすっかり打ち解けて、日々をまったりと生きている。いや、修行はちゃんとつけているけどね。

余談だが、俺の名前は襲撃者をパイプにして正しく伝わっていた。わざわざ手加減して半殺しにした後に名前だけ言って去っていた甲斐があっただぜ。

今日も今日とて修行。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！氷の精霊54柱、集い来りて敵を射て！魔法の射手、氷の54矢！」

「詠唱が遅い！シス・シーグ・マ・ズエス・システス！闇の精霊54柱、集い来たりて敵を射て！魔法の射手、闇の54矢！」

「グッ……」

「手を休めるな！口も動かせ！ヒマがあったら術式の無駄を無くせるよう努力しろ！」

ややスパルタ気味に稽古をつける。や、嫌いとかじゃなくこれが俺の愛の鞭なわけですよ。

「エヴァもだいぶ強くなってきたな。そろそろ魔法だけじゃなく自分に合ったスタイルの戦術を決めたらどうだ？」

「はあ……はあ……自分に合った戦術？」

ぬ…この程度の鍛練で息切れとは、なっちゃいないぞエヴァ。

「ああ、エヴァは手先が器用だし操作系の魔法が得意だから人形遣いになって、前衛が人形、後衛がエヴァ、ってスタイルにしたらどうだ？」

「人形遣い（ドールマスター）か…考えておこう。」

チャチャゼロ誕生フラグですねわかります

「ああ、そうだ。最近やつと『闇の魔法<マジア・エレベア>』の開発の目処が立ったんだが、術式の構成が思いのほか難しくてな…手伝ってくれんか？」

「お安いご用だよ。」

ああ…人とまともに会話できるって素晴らしいね

「チャーハン作るよ！」

「はよ作れ」

俺はエヴァが来てからは毎日三食作って食べている。無論作るのは俺だが。

出来たチャーハンを皿に載せ、居間まで持って行って二人で食べる。料理を置いた瞬間から手を伸ばして口に頬張るエヴァはホント可愛い。でも挨拶はちゃんとしような。

「いただきます。」

一人空しく挨拶。エヴァはもうすでに三分の一を食べている。

「むぐ…昨日の夜に自動人形の第一号が完成したから夜に起動して動作テストをするぞ。付き合え。」

「りょーかい。」

ついにチャチャゼロ完成か

「しかし美味しいなこのチャーハン。なんの調味料を使っているんだ？」

「これこそが日本の誇るしょうゆだよ。」

詠春さまあwww貴様は二番煎じ（笑）と呼ばれるがいい。

「なにニヤニヤしてるんだ？」

「いや、なんでも。」

夜になったお

「始めるぞ。」

「ああ。」

いま目の前にあるのは魔法陣、そしてその上にチヨコンと座っている人形。

見た目からしてチャチャゼロである。

エヴァが呪文を唱えると、部屋に光が溢れる。それと同時に人形とエヴァとの間にパスが繋がり、人形の中に魔力が注がれてゆく。

そして光が収まった時には、その人形は<自動人形>となっていた。

「…成功か？」

「おそろくな。」

しばらく経つと自動人形が動き始め、若干ぎこちない動作でこちらに向き直り、言った。

「問おう、貴方が私のマスターか」

「コイツナニツテンダ？」

「その馬鹿は放っておけ。私がお前を作ったエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。ちなみにその馬鹿はシンリーだ。」

「ケケケ、ワカッタゼ。ヨロシクナ。ゴ主人、旦那。」

なんかスルーされたままお開きになりそうだったから無理矢理会話に入ってみる

「というかエヴァ、そいつの名前は決めてあるのか？」

「ん？…ああ、そういえばまだ決めていなかったな。ふむ…ではチヤチャゼロでどうだ？」

「ナカナカイインジャンナーノ？オレハソレデイイゼ。」

「…ああ、うん。…それでいいんじゃない？」

…俺が名付けようと思ったのにエヴァ即刻で閃いてるし…今回なんかオレ要らない子？泣くよ？

更に数十年が経った。

もうエヴァもチャチャゼロも力量は十分で、独り立ちできるくらいには成長した。『闇の魔法』も完成したしね。

そうそう、エヴァはもちろんだけど俺にも『闇の魔法』の適性があったんだよね。全魔法適性S+の効果がオリジナル魔法にまで出てくるとは…神様侮るべからず。

んで話を戻して簡単に今の状況を説明すると、

エヴァ強化完了 独り立ちできる でもオレ寂しい もっと一緒にいたい！ じゃあ二人でまつたり過ごそう

こんな感じである。なんか後半がラブコメっぽいけど気にしない。

「シンリ〜、お茶煎れて〜」

「ケケケ、タルンデンナ、ゴ主人」

現在は「別荘」内の縁側にてまったりお茶を飲んでいる。

俺ずつとこのままでもいいかも……

6話 好みのタイプはドSとシンデレレです。シンリーです。(前書き)

今回は試しにネタ無しの純愛を頑張って書いてみました。

「エヴァは俺の嫁だ!」という方は読まないほうがいいと思います。

6話 好みのタイプはDSとシンデレレです。シンリーです。

俺とエヴァは出会って100年目くらいに初めて「魔法世界」にやっってきた。もちろんチャチャゼロも一緒だ。城の書庫の中で魔法世界へのゲートについて記されている本をエヴァが発掘し、じゃあ旅行もかねて行ってみるか。ということになったのだ。

ちなみにゲートの検閲はスルーしました。不可視の結界とか張ってね。

結界って便利！

「おお！すごいぞこれは！ほら、シンリーこっちこっち！」

「わかったわかった。はしやぎすぎて転ぶなよ？」

「そっ…そんなことするわけないだろう！というかはしゃいでなどいない！」

今日のエヴァは見た目相応のおにゃのこなのでとても可愛いです。あんまし城の外に出たことがないし、魔法世界は初めてだから目新しい物が多くて嬉しいのかな？

そうそう、城のことなんだけど数年くらい前にさ、時空間系の魔法教えてるときにエヴァが俺の「別荘」のレプリカを創りだしてね。

完成したの見たときは驚いたよ。原作に出てくるエヴァの別荘そのものだったもん。

んで城は今はずっぱりエヴァの別荘の中に入っていて、俺とエヴァの別荘は『王の財宝<ゲート・オブ・バビロン>』の独自空間創造能力を解析、研究して創った俺専用の『無限宝庫』の中にある。ちなみに『無限宝庫』には別荘の時空間魔法も組み込んでいるから食べ物が腐らない。かなり便利だ。

「おい！あれはなんだ？」

…この時代でも魔法世界だとアイスクリーム売ってるんだな

「ん、あれはアイスクリームって言って、冷たいお菓子だ。食べるか？」

「食べるぞ！」

ああ、ホント可愛いねえ

俺の隣にはニコニコしながらアイスを頬張るエヴァ。
チャチャゼロは俺の左肩にチョコンと乗っている。

「シンリーは食べないのか？」モグモグ

「いや、食べたことあるからいいよ。仮面で口塞がってるしね。」

今では俺はもちろんのことエヴァにまで賞金が懸かっている。
二つ名こそまだ少ないものの賞金は300万ドル。これでも大物の
部類に入る。

だから俺はローブのフードを被り顔に仮面を着けて、エヴァは年齢
詐称薬で19歳の身体になっている。チャチャゼロも仮面だ。

「ナア、オレコノ仮面イヤナダガ…」

因みにチャチャゼロが着けている仮面はジェイソンのだ。理由？も
ちろんイメージが似てるからだ。
その後ジェイソンの話をしたらチャチャゼロはその仮面を気に入っ
たようだった。やっぱり似た者同士か。

しかしあれだな、19歳のエヴァを見てるところ…ドキドキします。
たいへん心臓に悪い。何気ない動作に反応してしまう自分がにくい

ね。

「ふう…」

賢者タイムじゃないよ！

「なんだこの程度で疲れたのか？全く、甲斐性のない奴だ。」
「
言っつて、隣に座ってくる。」

いや、散々買ひ物に付き合わせといてそれはないでしょ…
真祖だから体に疲れはないけど精神的にね…

ちなみに今は夜、町のホテルの一室でベッドに腰掛けている。他人の目はないので仮面とローブは外している。

しかし魔法世界か…今は平和なこの場所にも戦火が降りかかってくるんだよな。あんま想像できんけど。

戦死者たちには悪いが魔法大戦は正直楽しみにしてる。大量殺人しても最終的には英雄扱いなんだし、ナギやラカン達と会えるし。でもそれまであと数百年か…人間なら気が遠くなるくらいの年月だな…

「はあ……」

「…そんなに疲れたのか？」

見るとエヴァが申し訳なさそうにこちらを見ている

「ああ、いや、今は別のことを考えてただけだよ。」

ポンポンと頭を撫でてやる

エヴァは気持ち良さそうに目を細めながらも聞いてきた

「なにか悩みでもあるのか？」

「…今から約500年後に、この世界で少しやることがある。その時にエヴァとは別行動になるから少し寂しいな」と思ってね。」

「ほう、なんだ？私と離れるのがそんなに寂しいか？」

「かなりね。」

エヴァをまっすぐ見つめながら言う。案の定、一瞬呆けたあと、顔を赤くしてこちらを恨めしげに睨んできた。あいかわらず直球に弱いなあ。

「…油断していたぞ。まさかこんな直球で来るなんて…初めてじゃないか？」

「俺らは長い時間にかまけて気持ちを誤魔化してきたからね。そろそろハッキリさせようと思ってるさ。」

エヴァの肩を掴んで押し倒し、上に覆いかぶさるような体勢をとる。

「エヴァ。俺はお前が好きだよ。」

言い切った。恥ずかしい。

自分の顔はおそらく真っ赤だろう。

エヴァの顔も大分赤くなっている

顔を近づける

エヴァも恥ずそうにはしているが。受け入れるように目を閉じ、キスを待っている。

さらに顔を近づける

そういえば元の世界でもしたことがなかったから、これがファーストかな。
なんて思いながらゆっくりと顔を降ろしていく。

そして…

「モリアガツテルトコ、ワルインダケド酒トツテクンナイ？」

ピシッ…

空気が凍った

「……………」

「……………」

「……まあ、時間はまだたくさんあるんだ。これからゆっくり積み立てていけばいいぞ。」

「そ、そうだな。じゃあ……これからもよろしくな。」

「ああ……よろしくたのむ。」

お互いの気持ちを確認しあった、記念すべき日だった。

「ハッピーエンドジャーネエゾ……」

チャチャゼロは数時間後にちゃんと回収しました

〔西暦1900年〕

「もう行ってしまっのか…」

「まあ今生の別れじゃないんだ。そこは笑って見送ってくれよ。」

早くも500年経ち、今日は旅立ちの日。

あの日から今日まで、エヴァとイチャイチャできたしやることもや
ったから俺的には満足だ。

え？なにをやったかだって？そんなこと教えられるわけないだろうが
！

「まあ俺の見立てでは100年以内に終わる筈だからそれまで一人
で旅していてくれ。」

「オイオイ、マタオレノコトワスレテンジャーネーヨ。」

「だってチャチャゼロ影薄いんだもん。」

「……アンマリダゼ。」

いや、だって…ねえ？

「まあ、そこまですておけシンリー。チャチャゼロも。
」
渋々引き下がるチャチャゼロ

「シンリー。とりあえず理由を聞かないで屈め。」

…バレバレだよエヴァ

言われた通りに身を屈める

目をつむっていると、唇に柔らかいモノが触れた

「…ん。…しかしエヴァからこういふことするのも珍しいな。」

「長い間会えなくなるからな。餞別のようなものだ。」

さいですか

「ほら、あんまり長くいると別れが辛くなる。行くなら早く行け。」

「わかった。…いってきます。」

「ああ……いってらっしゃい。」

「ケケケ、セイゼイタッチャデナ。」

エヴァとチャチャゼロの言葉に後押しされるように、前に進む。

さあ。一人旅の再開だ。

最初に接触すべきはラカンかな？

新たな出会いに期待して、魔法世界へと足を運んだ。

7話 ジャック・ラカンって超覚えやすい名前だと思う(前書き)

今回話が長めです。

ジャックをできるだけアホっぽく書いてみました。上手く書けるか心配です。

7話 ジャック・ラカンって超覚えやすい名前だと思う

エヴァと別れて数十年。俺は今魔法世界の奴隷闘技場の観客席にいる。理由は未来の英雄、ジャック・ラカンの視察だ。

しかし奴隷剣闘制とは…人の醜い部分をダイレクトに見てる感じがしていやだねえ

いま現在進行形でラカンがフルボッコにされている。相手は優勝候補の一人だ。まだ十代のラカンには荷が重いだろう。

俺なら瞬殺できるけどなWWW

試合が終わった。結果はラカンの惨敗。地面に拳をたたき付け、悔し涙を流している。ドンマイ。

そのまま手に枷をつけられ、うなだれた表情で出口まで引っ張られていく。

…ありやあ完全にネガティブ入っちゃまってるな。とりあえず発破かけてみるか

闘技場の裏口にまわってみると、ボロ雑巾のようになって鎖に繋がれたラカンが車の荷台に乗り込み、牢屋に連れ戻されるところだった。

発車する前に声をかける

「君は…弱いな。」

この話し方何百年ぶりかな…

すると子供ラカンの肩がビクッ、と震える。そしてワナワナと震えながらこっちを見た。

「…黙れ。」

おおこわいこわい。めっちゃ睨んでるよ

「先程の試合を見ていたが…なんだ、あれは？相手に一撃すら入れてないではないか。そもそも…「黙れえええ！！」ブンッ おつと

」

ラカンが荷台から飛び出し襲い掛かってくる。

振るわれた拳を避ける。そんな状態での攻撃なんて一般ピープルでも避けれるぜ。

ガチャ「おい！てめえ、ガキ！」

車の運転席から剣闘奴隷の引率役の男が出てきて、警棒でラカンをシバきあげ、動かなくなつたところで担ぎ上げて荷台に投げ込む。

「てめえも煽るような真似してんじゃねえよ！！」

「ああ、すまんね。ほれ」

男の手に紙幣を何枚か握らせて黙らせる。

ちなみに投影した刀剣類を換金してお金を稼いでいるので、金銭的にはまず困らない。

男はチツ、と舌打ちした後、後に車に乗り込みエンジンをかける。そして俺は発車するタイミングを見計らって荷台に声を掛けた

「…だが君には素養がある。周りの暴力に負けず、群集の暴言に負けず、望みを忘れずに己の身を鍛えたなら、君は必ずその手に自由を掴むことが出来るだろう。」

そして車は去って行った

…ちょっと強く言い過ぎたかな？

s i d e ラカン

今日は最悪の日だ

まず今日の対戦相手。相手はこの大会の優勝候補であり、
まだまだひよつこの俺が敵う奴じゃなかった。

結果はボロ負け。

相手に触れることすら出来なかった。
会場の盛り上がり方も気に食わなかった。

そつかよ！お前ら俺が負けて満足かよ！

けどもうそんなのどうだっていい

一番ムカついたのは俺が落ち込んでる時に挑発してきた仮面の男だ。

挑発だとわかっていても、殴り掛からずにはいられなかった。

それぐらいムカついたし、なにより悔しかった。

だがそれもアツサリ避けられ、引率役に警棒でボコボコにされただけだった。

今すぐ殴り掛かりたいのに体が動かない。当然だ。こんなに消耗してるんだから。

そして車にエンジンがかかり、あの牢屋にまた戻るのか、と思った時に奴はこう言った。

「…だが君には素養がある。周りの暴力に負けず、群集の暴言に負けず、望みを忘れずに己の身を鍛えたなら、君は必ずその手に自由を掴むことが出来るだろう。」

…上等だ

だったら身を粉にして体を鍛えて一刻も早く「自由」をつかみ取ってやるよ。

んでもって俺を馬鹿にしたテメエの顔をぶん殴ってやるよ。

それが俺の「望み」だ。

せいぜいそのときになってから後悔しやがれ！

s i d e o u t

俺がラカンに発破をかけてから数年、ラカンは凄まじいスピードで強くなっていった。

どうやらあの挑発はいい方向にいったようだ。
少し安心した。

今やラカンは奴隷剣闘士の頂点にいますと言っても過言ではない。今年中には奴隷から解放される勢いだ。

俺の計画は

ラカン優勝 ラカン自由の身に 調子に乗っている オハナシ(肉体言語)
俺の強さに感服 シッショー(笑)!

こんなかんじ。

師匠っていつてもなんかの格闘技の型を教えるだけだしね。基礎体力は出来上がってるだろうし。

ラカンが優勝するまでは暇だから「完全なる世界<コスモ・エンデレケイア>」の戦力でも削っておくかねえ…

s i d e ラカン

やっと、やっとだ。

この振り上げた拳を打ち込めば、この大会に優勝し自由になれる。

仮面の男と会ってから数年間、俺はほとんどの時間を自己の鍛練に

費やした。

そのおかげで俺は今、自由をこの手に掴みかけている。あの時こそ怒っていたが、今は感謝している。

奴のお陰でここまで来れたと言っても過言じゃねえからな。

だが俺の「願い」は奴の顔面に一発入れること。これはケジメだからな、譲れねえ。

俺の拳が吸い込まれるように相手の腹に入っていく。

思考から帰ると、俺は優勝していた。

数週間後、俺は傭兵の仕事を始めようとしていた。

金は優勝賞金が残ってるから最低でも一年はもつが、だらけてると腕が鈍るしな。

それに仕事で各地を飛び回ることである仮面の男に会えるかもしれない。

そう思っていた矢先だった。

街で奴を偶然見つけたのは。

思わず口がにやける。無理もない、探している男を本当に運よく見つけてしまったのだから。

物陰に隠れながら奴を尾行する。フフ、さすが俺様、完璧な尾行だぜ！
ん？なんで溜め息ついてんだアイツ

奴は街を出て森の、開けた地形の場所で立ち止まった。

なんだ？ と思っていると、男が

「そろそろ出て来てはどうかね？」

…バれていたのか

地味にショックを受けながらも、顔に出さず毅然とした態度で出ていった。

「俺様の名前はジャック・ラカン。言わずと知れた解放奴隷剣闘士だ。テメエの名は？」

「…シンリー。シンリー・T・カーズヴェルトだ。」

な！？賞金1000万の賞金首の「絶対強者」だと！？

そんな大物が何故こんなところに…

いや…そんなことはこの際どうでもいい。ケジメは必ずつける

しかし改めて見るとこいつ…かなりの熟練者だ。隙が全くない。

「シンリー、お前、初めて会ったときのこと覚えてるか？」

憶えてねえとか言ったらぶっ飛ばしてやる

「ああ。私が君を弱いと言ったことか。」

「そうだ。俺様はテメエが憎かった。だからテメエの顔をぶん殴る、なんて「望み」を持って今まで頑張ってきた。まあ今では感謝してるがな。」

「だがそれとこれとは別のハナシだ。コイツは俺のケジメだからな…言いたいことはわかるよな？」

言って構えをとる。

いきなり殴り掛るうとも思ったがそんな簡単に倒せる相手でもなさそうだからやめておく。

…ん？なんか目的が変わってるけど、まあいいか

するとシンリーも仮面とローブを外し、左手をポケットに突っ込んだまま右手で構えをとる。

手配書通りの顔だな…しかし右腕だけだと？

「おいシンリーてめえ、ふざけてんのか。」

「君にはこれで十分だ。」

プチッとキタぜ……てめえは俺様を怒らせた！

「ハッ！調子こいてられんのも今の内だぜえ！？」

ボコボコにしてやんよ！

勝負が終わった。

結果は惨敗。それも例のあの日以上の。

今の俺ならばと思っていたが、とんでもない。奴は真正銘のバケモンだ。
なにせこっちの攻撃の手が全て右手の超高速の突きによって潰され、逸らされ、防がれる。

しかも手数が多すぎて腕がたくさんあるように錯覚してしまう。

「千の腕の男くサウザンドアームズ>」か…武器のことだけかと思つてたが、なかなか洒落た異名じゃねえか…

結果こそボロ負けだが…なかなか楽しかったな

今までは生きるために必死こいて戦つてて心に余裕がなかったからわからなかったが、決闘つてのは楽しいもんなんだな…よし、決めた！

何故か立ち去らず、その場に立ち止まっているシンリーに声をかける

「オイ！」

「…なんだ？」

「明日この時間にもう一度ここに来い！次こそ一撃いれてやる！」

そう言つとシンリーは考えるそぶりを見せてから、

「…わかった。それと突きを打つ時はもつと腰を回せ。腰の回転力を拳にのせるんだ。あとは……………だ。私はこの時間にはここに
いるから何回でもかかって来るといい。」

そう言っつて仮面とローブを身につけ、影に沈んで去っていった。

しかしなんで最後に俺に戦闘指南みてえなことしたんだ？アイツは
まあいいか考えるだけ無駄だし強くなれるなら願ってもないことだ
しな！いつか本当に後悔させてやるぜ。憶えてろよ！

s i d e o u t

s i d e シンリー（数十分前）

困った。

原因はいま後ろから俺のことをストーキングしてきている筋肉達磨だ。

わざと気付かれるように視界内に入って、ついて来させたとこまでは良かったのだが…

「普通について来れねーのかあの馬鹿は…」

思わず溜め息が出る。

バレていないつもりなのか、壁に隠れたり木箱に隠れたりしながらついて来る。

…その巨体で隠れきれぬ訳ないだろうが！つーか逆に人の目引いてんだろーが！！

若干呆れつつも予定通り、森の中のちょっとした広場に到着。人払いの結界はあらかじめ張ってある。

「そろそろ出て来てはどうかね？」

バれていることは流石にわかっていたのか、普通の表情で木の陰から出て来た。

「俺様の名前はジャック・ラカン。言わずと知れた元奴隷拳闘士だ。テメエの名は？」

「シンリー。シンリー・T・カーズヴェルトだ。」

プツ、アホ面してやんのWWW

まあ俺は最高クラスの賞金首だから驚くのも無理ないけどね

「シンリー、お前、初めて会ったときのこと覚えてるか？」

「ああ。私が君を弱いと言ったことか。」

「そうだ。俺様はテメエが憎かった。だからテメエの顔をぶん殴る、なんて「望み」を持って今まで頑張ってきた。まあ今では感謝してるがな。」

…はあ！？それが「望み」！？ああ言つとけばラカンのことだから
「世界最強になる」とか「自由になつたあと女に囲まれて過ごす」
とか単純なことを願うと思つてたのに…そんなにムカついたの？
感謝してくれてんのは嬉しいけど…

「だがそれとこれとは別のハナシだ。コイツは俺のケジメだからな
…言いたいことはわかるよな？」

ラカンが構える。

「しゃあねーな…まあボコすことは決定事項だつたし大して元の計画
とは変わらんか」

仮面とローブを外し、左手をポケットに突っ込んだまま右手で構え
をとる。今のラカンには右手だけで十分だろう。

「おいシンリーてめえ、ふざけてんのか。」

「君にはこれで十分だ。」

マジこの台詞厨ニくせえww自然とこんな台詞をだせる自分が恥ずかしいww

「ハッ！調子こいてられんのも今の内だぜえ!？」

お前がな

圧勝！

相手の攻撃ぜんぶ翻子拳で潰した上でフルボッコとかなんて鬼畜ww

なんて思ってたらボロ雑巾が声をかけてきた。頑丈だな。

「オイ！」

「…なんだ？」

「明日この時間にもう一度ここに来い！次こそ一撃いれてやる！」

…どうしようか。さっきまでの台詞から考えて、俺はちょっと嫌われてるっぽいから師匠役はムリそうだな。
それよりなら実践形式で教えていった方がいいか。

とりあえずダメだったところの指摘だけした後、影のゲートを使った転移魔法で帰っていく。

さてさて、どうなることやら……

8話 発音的にアルよりイマの方が呼びやすい？

「左がから空きだぞ！」ドゴオ！

「ぐぼお！？」

今日も元気にジャックと喧嘩（もとい稽古）している。

最近のスケジュールは午前、「完全なる世界」の拠点の調査&制圧。
午後、ジャックと喧嘩。

といった感じになっている。

ジャックと会って一年くらいの月日が経った。最初こそただ喧嘩して注意点だけ言って帰るだけだったが一ヶ月経ったところから次第に打ち解け始め、二ヶ月経つときには互いに酒を飲み交わす仲になっていた。

名前もその頃にジャックと呼び始めて、口調も素に戻した。

今では喧嘩の後の談笑がちよっとした楽しみになっている。

しかしそれもそろそろ終わりだ。

表面上はまだなにも起きてはいないが、帝国と連合の間に不穏な空気が流れている。水面下で「完全なる世界」が手を回しているのだ

ろう。

俺は「紅き翼くアラルブラ」に入って最終決戦以外は本格的に戦争に参加しようと思っている。

理由は二つ。一つはただ単純に大戦で本物の戦争の空気を感じてみたいから。そしてもう一つはナギ達「紅き翼」の一員としてオステイアを救い、「英雄」となって賞金首の肩書きを消すことだ。

俺の最終的な目的は最低限原作の流れを守ったうえで、エヴァと楽しく暮らすことだ。

だからできるだけ不安要素は消しておく。

だが俺がナギ達と行動するにあたって、賞金首という肩書きが邪魔になってくる。

得に詠春だが、一般に「悪」とされる賞金首を無条件で信用するわけがないのだ。「紅き翼」自体は傭兵のようなものだから規律とか建前的には大丈夫なのだろうが、普通に会いに行つて、仲間にいれてくれ、なんて言つても門前払いされて終わりだろう。

だから俺が「紅き翼」に入るには一策必要なのだ。

策と言つても、「紅き翼」ピンチ 俺参上！ 敵を撃退 ちよつとは信じてくれたかな？ くらいの小学生レヴェルの考えしかないのだが。

だが軍隊をも凌ぐ戦力をもつ未来の英雄たちがそうそうピンチになる筈もない。

だからまだ仲間が少なく、戦力が十分でないうちにナギ達をストーリーキングもとい尾行してチャンスを狙おうというのだ。

彼らを探す時間も考えて、行動を開始するのは今からでも遅くはな

いだろっ。

だからこの楽しい日々ともしばらくお別れだ。

「ハッハッハ！足を止めたら針ネズミだぞ！」

「ちょ！？投げナイフは駄目だつて！つーかそんな量のナイフどこに持ってんだよ！？物理的におかしいだろ！」

「そんなもん「魔法」の一言で説明できんだよ！あとデタラメ人間のお前に物理を説かれても全然説得力がないわあ！」

「ぎゃああ！？今ナイフに紛れて槍あつたぞ！？やっぱり普通にありえねえだろ！」

「黙って避ける、蜂の巣にするぞ。全投影連続層写！」
ソイドパレルフルオーバーン

「なんか色々きた！？これ当たったら死ぬって！絶対死ぬ！」

筋肉達磨が悲鳴を上げながら数々の武器を避けている。シユールだ…

時刻は夜、稽古が終わって今はジャックと酒を飲みながら会話している。

「シンリーよお、俺あそろそろ大会の優勝賞金が尽きてきたから、傭兵の仕事しようと思ってるんだ。けどそうするとお前との決闘ができなくなる。そこでだ、お前、俺と一緒に組んで仕事しねえか？」

突然、珍しく真剣な顔になったからなにかと思ったがそういうことか。

てゆうか「決闘ができなくなるから」とか、なんて理由だよｗｗ筋肉男のツンデレなんぞ気色悪いわｗｗむしろバカデレ？

「悪いな、気持ちは有り難いけど断るぜ。どっちにしろ俺もちょうど用事があつて、しばらく会えなくなるんだがな。」「そうか…」

「ま、安心しろ。傭兵として世界を旅するんなら俺とまた会う機会も回ってくるぞ。」「

「ガッハッハ！それもそうだな。俺様としたことが湿っぽくなっちゃったぜ。」「

二人して一気に酒を煽る。

「プハア！…しかし結局最後まで一撃も入れなかったのが心残りだぜ。」

「ハッ！生きた年月の桁が違っんだよ！むしろ700年近く生きてて20そこらのガキに負けたらシヨックで軽く死ねるぞ。」

「けど悔しいもんは悔しいんだよ！クツソ、俺様もあと600年くらい前に生まれてれば…」

「や、それ普通にもう死んでるから。」

やっぱりジャック馬鹿だわ

「じゃあまた会うことがあったら、そんなときはまた決闘だ！いいな？」

「ハ、決闘つつつても俺が一方的に勝つてるだけだけだな。そっちこそ怖じけづくなよ？」

「おうよ！約束だぜ？」

「ああ。じゃあ今日は二人の新たな旅立ちに！」

「乾杯っ！」「カンッ！」

その日は夜遅くまでジャックとバカ騒ぎしながら酒を飲んで、
そういえばこの世界に来てから初めての男友達だな、なんて思いな
がら眠りについた。

ジャックと別れて4ヶ月後、俺は今「紅き翼」の後ろを着けている。
といてもメンバーはナギ、アル、詠春の三人のみで、まだ「紅き
翼」とは名乗っていないようだ。
未来の「紅き翼」を見つけたのが一ヶ月前。この一ヶ月こいつらの
活動を見ていた感想は、

「こいつらがピンチってありえるの?」

そう。強すぎるのだ。

詠春が前衛で敵を刀でバツバツ切り伏せ、ナギが後衛で敵を雷系魔法で吹き飛ばし、アルが遊撃手で討ち漏らしを重力魔法で潰していく。

これなんて無理ゲー？

ああ、敵も段々と涙目に……なんかアルにやけてない？やっぱアイツSだろ

フーかあれだな、こいつら強すぎ。メンバーが少ないうちならとか考えてた俺がアホでした、ハイ。

しかしこれはマズイ、このままでは「紅き翼」に入れずBAD E NDになってしまう。

なにかいい策は……お、あの女剣士いい胸してるぜ。余談だが胸は手に少し余るくらいが丁度いいよね。そう思うだろ？

え？エヴァ？いやいや、女は体より心ですよ。まあ年齢詐称薬か幻影魔法使えばどっちもパーフェクトだけど。魔法バンザイ！

おっといかん思考が逸れていた。しかしあの女剣士なかなか強いな、複数で切り掛かるとはいえ詠春相手に持ちこたえてる。でもこのままじゃ負け……

……………。

キュピーン！ 閃いた！

ナギが『雷の暴風』を敵に放つ。それに合わせて指向性を持たせ射程を伸ばした改良型の『風遁・武装解除』を三人の死角から撃つ。女剣士は辛くも『雷の暴風』を避けたが、ほぼ同時に襲いかかった俺の魔法は避けきれずスッポンポンになった。福眼福眼。

これで三人には『雷の暴風』に巻き込まれて服が破けたように見えただろう。

そして案の定、詠春は目をつむって念仏を唱えてる間に裸女の右フックが綺麗に顎に決まり気絶した。どんだけ耐性ないんだよ。

ちなみに詠春を気絶させた裸女：もとい女剣士は右フックを放ったあと全力ダッシュで戦線離脱してた。顔真っ赤で可愛かったです。まる

気絶した詠春を護りながら戦うナギとアル。流石の二人でもこれはキツイのか顔に焦りがでてきた。

フフ…計画通り！

さて、記念すべき邂逅の日だ、いっちょ派手にいきますか。

「トレース・オン
投影開始」

投影するのはアーサー王の持つ最高クラスの宝具。派手さと華麗さから考えてこれが一番だろう。

「約束されたくエクス>…」

「勝利の剣<カリバー>!!」

圧倒的な威力と熱量を持った光の剣で敵を薙ぎ払う。

結果、たったの一振りで敵は全員蒸発した。ナギ達は呆然とその場に浮いている。フフ、いい気分だぜ。

「大丈夫か？」

その声にハツとしてから初めて俺の存在に気づき、アルが警戒してくる。

「あなた、何者です？」

「おいおい、そんなに警戒すんなよ。せっかく助けてやったのに。」

敢えてフランクな話し方にする。こっちの方が取っ付きやすいだろう。

「そのことに関して感謝はしています。しかしそれとこれとは話が別ですよ。そこまでの力を持った人物を簡単に信用するわけにもいかないですしね。」

ぬう、やり過ぎたか

「いいじゃんよーアル。助けくれたんだから味方だろ？それにそんな悪い奴にも見えないし。」

いいぞナギ、もっと言え！

「しかしですね…」

「それにさっきソイツが言ったとおり、わざわざ助けてもらったんだから。そんなことしちゃ失礼だろ？」

「…しかたありませんね。」

アルが警戒を解く。これでまともに話が出来そうだ。

「それで、貴方の名前は？」

「…シンリー・T・カーズヴェルト」

「なっ…!!」

「？」

アルが、無くなりかけていた警戒心をまた強める。ああもう！だからこの肩書きって嫌なんだよ！

とゆうかナギはわからないって顔すんなよ！それはそれで傷つくし。そもそもジャックですら知ってたのに…

「…わかりませんね。「真祖皇帝」と名高い貴方がなぜ我々を？」

「え！？真祖？こいつ吸血鬼なのか？」

やっぱりナギ少し黙れ

「別に意味なんかないよ。ただたった三人で大群を蹴散らす君らに興味を持ってね。それで助けたただだよ。」

「そうですか…それは失礼しました。そしてありがとうございます。では我々はこれにて。」

そう言つて転移魔法でそそくさと帰ろうとするアル。

え！？それで終わり？もつとこつ…他にないの？つか帰んなよ！待って、お願いだから！

「待てアル！」

魔法陣の輝きが強くなり転移魔法が発動しかけたとき、ナギがアルの魔法をやめさせた。どうでもいいけど今の台詞クーフエイみたいだな。

「ナギ、どうしたのです？」

「なあ…こいつ仲間にならないか？」

…！ナギ、GJだっ！

やっばお前最高だわ。さっきは心の中で黙れとか言っでごめんよ！

「ナギ！？」

「いーじゃんアル。実力はさっき見たとおりだし味方になれば怖いもんないだぜ？」

「ですが…」

「吸血鬼らしいけど悪いやつには見えないし…」

「しかし…」

「あーもう！じゃあリーダー命令で強制的に決定！っーことでオレはナギ・スプリングフィールド。よろしくなシンリー！」

「ああ、よろしくナギ。」

握手を交わす

「…ふう、まったくナギの気まぐれも困ったものです。もう慣れっ
こですが。」

「わりーな。」

「まあいいでしょう。…では改めまして、アルビレオ・イマです。
アルと呼んでくれて構いませんよ。」

「アルもよろしく。」

「よし。仲間も増えたことだし帰るか！」

「そうですね。」

再びアルが転移魔法を発動しようとする。

けど…

「あそこに倒れてるやつは放っておいていいのか？」

「あつ！」

その後詠春もちゃんと回収しました。

詠春が起きたとき俺のことでまた一悶着あったけどナギが説得してくれたことで事なきを得た。

なんだかんだでちゃんとリーダーできてるナギに驚いた俺だった。

9話 ゼクトって見た目が名前負けだよ。そして最近サブタイが全部名前につ
ゼクトとの出会いを妄想分100%で書いてみました。

あと「悠久の風」の設定とかかなり適当ですのであしからず。

9話 ゼクトって見た目が名前負けだよ。そして最近サブタイが全部名前につ

俺がナギ達と行動を共にしてから2ヶ月が経った。普段はアルと一緒にナギに魔法の基礎を教えたり、「悠久の風」から依頼が来たときだけ村を襲う族とか内戦地帯の鎮圧をしている。

一度ナギに本格的に魔法の師事をしてくれと頼まれたが、教えるのは苦手だ、と言って断った。いや、できるにはできるけどそうするとゼクトの立場がおかしくなっちゃうからねえ…あと、そのことでアルはどうなの？って聞いたなら「なんか怖いからやだ」って返ってきた。激しく同意だよ。

早くゼクト来ないかな…

暇なときは詠春かナギと組み手をしている。まだまだ向上の余地はあるからね。戦争が始まるまでは鍛えてやろうと思っている。それに結構楽しいしね。

アルも誘おうと思ってるんだけど毎回逃げられる。んで終わった後にいつの間にか近くにおいて「お疲れ様です」とか笑顔で言ってくるからムカつくんだよね。それで一度腹が立って殴ったときがあったけど何も言わずただニコニコして立ったままで怖かったから逃げ出しちゃったけど。いや、あれは仕方なかったと思う。ナギと詠春も顔引き攣ってたし。

その後アルの俺に対する態度がキツイものになった気がしたので街で「月刊ロリータ」を買っていつてアルと一日中ロリータについて語り合ったことで親交度を高め、事なきを得た。エヴァのことがあるのでロリーの素晴らしさについては知っているつもりだったが、色々と有意義な談議となった。ああ、久しぶりにエヴァに会いたいです。

ちなみにアルにエヴァのことを教えたら羨ましがれた。エヴァは渡さんぞ？

「くたばれ！『燃える天空』！」「ドオツ！

「おつ、やるなシンリー。よしオレも…えっと『百重千重と重なりて走れよ稲妻』、『千の雷』！」「バシユウ！

「ナギ、意気込みはいいですが、あんちよこを見ながらでは格好悪いですよ。」

「お前ら真面目に仕事しろ！」

今日はある小国で起きた反政府組織による大規模テロの鎮圧という指令が「悠久の風」からあったので現地で派手に暴れている。こういうのは圧倒的な力を見せた方が戦意を失う人が増えて被害が少なくなるからね。

頑張った甲斐あってか、数分後には組織のトップが投降しこの事件は終わった。

あとは被害者の救助と被害が出た土地の食糧援助か。

なんか俺フツーに善人に見えるなあ…一応泣く子も黙る賞金首なんだけど…

まあ正直他人の命なんてどうでもいいけど仕事だしね。と自己完結して、今はナギと組んで被害者を探し救助をしている。ナギ治癒魔法はまだ使えないしね。

歩いていると、戦火を浴びて焦土となった場所に、一人の子供がぽつり立っていた。

「人はより良い暮らしの為に国を為し、人々を掬い上げ、こぼれ落ちた者どもにより自らの足元を掬われる。全く、ままならんものじやな。」

…なんか小難しいこと言ってるよあの子供…もしかしてあれゼクトか？

見た目それっぽい話し方が…うん。あれはゼクトだな。あの容姿で「〜じやな」とか言うのは彼以外ないだろ。

「シンリー。たぶん被害者の子供だ。ちょっと行ってくる。」

さっきのセリフが聞こえてなかったのか、ナギがゼクトに駆け寄る。ゼクトもこっちに気付いたようだ。

「なんじゃ？おぬしら」

「（年寄り臭い喋り方すんなあこの子供）お前、家は？あと親とかいないのか？」

「（いきなり何を聞くんじやこの子供は？しかし家族か…何百年前か忘れたが懐かしいのう）家など元々持っておらん。それに親もとつくに死んでおる。」

「（元々戦争孤児だったのか？じゃあここに来たのは戦死者から金目の物を拾うためか）そつか…でも戦って死んだ人にだって誇りとかプライドがあるんだ。そういう事はよした方がいいぞ。」

「（さっきの独り言が聞こえておったのか…しかし戦う者の誇りか、確かに先程のは戦死者達に失礼じゃったな）ああ、そうじゃな。もう先程のようなことはしないと誓おう。」

「（先程の？俺達が来る前にも金品を漁っていたのか？まあ、やめるって言ったしもう安心だな）おう！これからは堂々と日の当たるところを歩けるようにするんだぞ！」

「（…不死となつてから常に人のことを避けて生きてきた自分にごまで言うとは。この子供について行けば面白いことになりそうじやな）…うむ。して少年よ、名をなんと言つ？わしはゼクトじゃ。」

あとわしには帰る場所もないのでな、主に着いて行ってもよいか？」

「（そつか。もう帰る場所も無いんだもんな）ああ！いいぜ。オレはナギってんだ。よろしくなゼクト。ついて来いよ、オレの仲間を紹介してやるよ。」

…なんか微妙に話があつてないような気が…まあ仲間になつたんだからいいか

その後ゼクトを連れて俺達の拠点に戻り、アルと詠春にゼクトを紹介した。やはりというか、ナギとゼクトの間に齟齬があつたようで一悶着あつた。

ナギがガキじゃないの？と聞きゼクトが怒ってそれを否定し、詠春がそれを宥め、アルはシヨタがどうのこうの言っていた。え？俺？ずっと傍観してましたよ。

ゼクトが数百年を生き魔法使いだつてことの証明としてかなり上位の魔法を放つたのには皆呆然としてたけどね。

まあ何だかんだでゼクトが仲間になりました。まる

自己紹介のとき俺のことで一騒動あつたのはまあお約束だね。

「決めた！」

場所は自分達の拠点。ゼクトがようやく皆に馴染んで来たところにナギが突然大声を出した。

「いきなりどうしたんだナギ？」

「どうせまた下らないこと思いついたんじゃない？」

「下らないことなんかじゃないぜ！かなり重要なことだ！」

はて…今は特に仕事が入ってるわけじゃないしなんか大切なことなんてあったか？

「重要なこと？なんかあったかのう？」

「考えてもみろよゼクト、たった五人とは言え軍隊レベルの制圧力を持つオレ達が名無しで無名のチームってのも格好つかないだろ？だからチーム名を決めようと思うんだ。」

なるほど…確かに重要だな

「一理あるのう。」

「だろ？つーことで皆で案を出し合おうぜ。」
「チーム名か…激強武装団、ってのはどうだ？」

詠春センス無さ過ぎだろ…つーかNGO団体所属でその名前って問題あるだろ

「では唯我天身心隊というのはどうじゃ？」

ゼクトさん渋いッス。いやどっちかと言うとヤンキーに近いか…というかこいつら漢字使えばいいってもんじゃねーぞ

「二人とも全然ダメだな。アルはなんかいい案ある」「チームロリータというのはどうでしょう。」「」

「」「」「」

ニコニコしているアル。なんかいつもより笑みが深い気がする。話し掛けづらい。

「し、シンリーはなんかないのか？」

詠春がなんとか俺に話を振ってこの空気をなんとかしようとする。

しかしチーム名が…

「皇帝シンリーとその下僕四天の…「却下」ですよね。」

いや、わかってて言ったからいいんだけどね。しかしあれか、ここまで撃沈つてことはやっぱあのチーム名ってナギが考えたもんだっただのか？

「じゃあナギ、お前が言い出しっぺなんだからなんか考えろよ。」

「へへ、オレの中ではもうとっくにきまつてるぜ！」

「ほう？なんじゃ？」

「紅き翼くアラルブラ>だ！カツコイイだろ？」

「確かにナギにしては良い考えです。理由を聞いてもいいですか？」

「チーム名の理由か？んなもん響きだよ響き。なんか強そーな感じするじゃん。」

「フィーリングかよ…まあらしいっちゃらしいが。」

「だな。小難しく考えるより感覚ってトコがナギっぽいね。まあ俺はそれでいいと思うよ？」

「私もそれで構いませんよ。」

「わしもじゃ。」

「じゃあ俺も。」

「おし！反対意見はなしだな。じゃあ決定！オレ達は今日から「紅き翼」だ！」

とゆうことでチーム名が原作通り「紅き翼」になった。次は誰が増えるんだっけ…あつジャックか。久しぶりだな、でもそんなことよりお鍋食べたい。

つーか早く戦争始まらんかな

10話 ナギってあんちょこじゃなくて分厚い魔導書みたいなカンペ持てば格好

「『固定、掌握』！魔力装填・『術式兵装』！」ゴゴゴ

「ふむ…これが『闇の魔法』ですか…すさまじいですね。」

「興味深いのう…」

今は山中にある拠点でアルとゼクトに『闇の魔法』を実演して見せている。

事の発端は、つい先日ナギがゼクトに魔法の師事を頼んだときだった。

「なあゼクト…たのむよ。」

「それは別に構わんのじゃが…シンリーでは駄目なのか？」

「や、できるっちゃできるけどメンドイし。」

「えー？シンリー前に苦手だからって言ってなかったか？」

おっとつい本音が、まいつか

「嘘ではないけどホントは面倒臭かっただけ。人にも教えるなんて柄じゃないしね。」

「そんな理由かよ！？クツソ、もう怒った！シンリー表に出ろ！オレが勝ったら師匠やらせるからな！」

「フフ、望むところだ。」

久しぶりに楽しいバトルができそうだぜ

「ナギは勝てるかのう？」

「たぶん無理だな。俺とナギはよくシンリーと組み手やってるけど魔法なしとはいえ一度も勝ったことはないぞ。」

「これは見物ですね。」

「うっせー！お前ら見てろよ！ぜってえ勝ってやるからな！」

場所を移してナギと対峙する。

「最初から飛ばしてくぜ！『雷の暴風』！」

「ふっ…『燃える天空』」

魔法がぶつかりあう。爆煙があがり視界が塞がったところで影分身である15人程のナギが突っ込んでくる。

それに対して俺は投影したダークを投げて迎え撃つ。影分身のナギはダークが刺さり全員消滅した。

それと同時にナギが突っ込んでくる。投げナイフで迎撃することもできたが敢えて接近を許した。

「オラア！」

「無駄ア！」

ナギの拳を弾く。ナギは体勢を崩すがそんなのお構いなしに翻子拳を叩きこむ。フルボッコにしてやんよ！

「ハハハハ！我が双拳の密なること雨の如しッ！脆快なること一掛鞭の如しイッ！！！」

意味はわからんけどな！

ナギがいい感じにボコボコになったあたりで握り拳を張り手にかえてフィニッシュを放つ。

「ハアアアアッ！ゴッドハンドスマッシュ！！！」

ドゴッ！　　ベシヤア！

ナギが地面に叩きつけられる。

あれ？なんかみんな青い顔してる。なんでだろ？

まあいいや、ここで決めゼリフ。

「貴様らに名乗る名前は「」なにをしとるんじゃおぬしは！」ゲハ
ア!？」

ゼクトから鉄拳が飛んできました。魔力籠めてるから普通に痛い
です。

その後アルが治療をして二日くらいでなんとかナギが持ち直した。
軽く骨折とかもあつたらしい。

「やりすぎちゃった。テへ」
こんな感じに謝ったらみんなに一発ずつ殴られたあと、ナギが完治
するまで食事禁止された。

いいもん、吸血鬼だからご飯いらないし。グスン。

「しかしおぬしは本当に最強じゃのう。「絶対強者」とはよく言っ
たものじゃ。どうしたらそこまでになれるんじゃ？」

「神様に頼んだらこうなった。」

「はあ？」

「詠春、ゼクト。いちいちシンリーの言うことを真に受けてたら阿
呆になってしまいますよ?。」

失礼な。ホントなのに

「しかしシンリーみたいな奴がこの世に一人もいるなんてゾツとしないな。」

「ん？どういうことだ詠春。」

「お前『闇の福音』と今まで行動してたんだろ？彼女も同じくらい強いんじゃないのか？」

「ああ、そういうことか。いや、エヴァは俺ほど強くはないよ。だいたいナギと同じくらいじゃないかな？『闇の魔法』を使えばどうなるかはわからんが。」

「『闇の魔法』、とは？」

アルが聞いてくる

「俺とエヴァが数百年前に共同開発した魔法だよ。簡単に説明すると、魔法を体に取り込んで自身の体を属性化したり取り込んだ魔法を解放することで敵に攻撃する。言わば自分より強い奴を倒すための違法薬物ドレピングみたいなもんだ。」

「じゃあそれつかえばオレもシンリーに勝てんのか！？」

今までベッドに寝ていたナギがいきなり食いついてきた

「無理だな。『闇の魔法』には適性があるものにしか使えん。ナギは心に闇なんて持ってなさそうだしな。」

「そうか…」

残念そうにベッドに戻っていくナギ。そのためだけに起きたのかよ。

「それはシンリーにも使えるのですか？」

「そーゆー風に設計したからな
嘘^{うそ}だけど

「じゃあ見せてもらってもいいかの？シンリーの創った魔法には興味があるでう。」

「ああ、いいぞ。」

「では私も」

「俺は遠慮しておく。夕飯の支度があるからな。」

「詠春も大変だよな。毎日五人分の食事つくってさ。」

「…四人分な」

「…なけるぜ」

そして今にいたる。

「『解放』、『燃える天空』！」

「ほづ…」

「そういう使い方もできるのですか…」

アルとゼクトがしきりに感心している。なんかテンションが上がってきた、ついでに新技いつとくか。

「アル、ゼクトよく見てるよ、いいもん見してやる。」

言っただけ少し離れたところまで移動する。そして

「『えんおうはくいき炎皇爆域』！」

俺を中心とした空間が爆ぜ、辺りに炎熱をまき散らす。熱が引いてから二人の所に戻った。

「なんですか今のは？」

アルが驚いた表情で聞いてくる。いい気味だぜ。

「名前は『炎皇爆域』。『闇の魔法』で6個の『燃える天空』を魔力充填・『術式兵装』する動作を一瞬で済ませ、それを自身を中心として6方向に同時に『解放』することで俺の周囲にあるものを焼き尽くす技だ。ちなみに出力を上げれば最大で半径1km圏内のも

のを消し炭に出来るぞ。」

ふふん、と得意げに説明したらゼクトが頭を抱えた。

「なんと…おぬしが味方でつくづく良かったわ。」

「まったくですね。」

褒められて調子によってゼクトの夕飯を強奪したら全員にボコられた。

外に放り出されて泣いてたとき無言でチャーハンを置いて行った詠春が格好良すぎでした。

これからは俺も料理手伝うよ…

「ねえねえ、今新しい魔法つくってるんだけど協力してくんない？」

「新しい魔法？まあおぬしの魔法は面白いものばかりじゃからな。いいじやろう。どんな魔法を創っておるのじゃ？」

「なんか「紅き翼」「つばい魔法。」

「「紅き翼」「つばい？」

「そう。まあこの術式見ればだいたい解ると思う。」

「ふむふむ……なるほどのう。確かにこれは「紅き翼」「つばいのう。まあ魔力コントロールの問題からおぬししか使えんじやろうがの。」

「俺さえ使えればいいんだよ。んでどう？完成できそう？」

「これだと魔力の消費が激しすぎるからここの術式を……」

「なるへそね。でもそれだと見映えが……」

「それはこっちの魔力運用を……」

……、

「できたお！」

「出来たのう。」

完成した

「なにができたんだ？師匠」

「魔法かなにかじゃないですか？」

俺とゼクトの声を聞き付けてナギとアルがやってくる。

因みにナギのセリフからわかるようにナギはゼクトに弟子入りしたとゆづかさせた。

「その通りじゃ。シンリーに頼まれて協力して開発していた魔法がやっと完成したんじゃ。」

「シンリーに頼まれて？」

「おうよ！「紅き翼」のシンボルの魔法が欲しいと思って創ったらなんかすごいことになったぜ！」

正直ネタとして創ったつもりだったけど意外と使えることに気がついたんだよね。

「おお！「紅き翼」のシンボルの魔法か！もちろんカツコイイのにしたよな？」

「モチのロン！」
ウィーズリー。

ロンが餅屋でも開いているのだろうか

ナギと互いにサムズアップする。ナギといいジャックといいノリがよくて困る。いや、困らないけど

「んでなんて名前なんだ？」

「『獄炎の紅翼』だ。効果は…まあ見た方が早いかな。」

みんなで外にでる。

最近フツーに厨二な名前が出てくる自分が恥ずかしい。死にたい

「いくぞ…『獄炎の紅翼』！」

俺の背中から二つの炎で出来た巨大な翼がでてくる。翼の大きさは比喩ものにならないけど気分は炎髪灼眼である。メロンパン食いてえ

「べつ、別に裕二の為にやったんじゃないんだからね！／＼」

「相変わらず意味不明じゃのう。」

「フフ…これで日本刀を持てば完璧ですね。」

アル…何故それを知っている

「ロリータだからです。」

「答えになってない。そして心を読むな。」

あと一応声変わりの魔法は掛けている。流石にクルーゼ声でこれはね…

「おおー！かつけ〜！」

唯一ナギだけまともに反応した。いい子に育ってお兄さん嬉しいです。

「それで攻撃とかできんのか？」

「ああ、翼自体が摂氏4000の超高温の炎で出来てるからね。推進力としてだけじゃなくこの状態で駆け回るだけで相手を殲滅できるぜ？」

まあ発動中は魔力を常時消費するから俺しかつかえんけどな！

そういえば魔力のことだけど最初はそれこそ木乃香の5倍だったんだろうけど、今じゃ30倍くらいあるんじゃない？修行って素晴らしい！

だから魔力垂れ流しでも全然平気なんだよね。

「いいな〜俺も使えたらな〜。」

「それよりまずはあんちよこを使う事を止めんか馬鹿弟子。」

「むづ…わかったたよお師匠。」

この後アルのリクエスト通りに『草薙剣』くさなぎのつるぎを投影して釘宮ボイスでいろいろやってたら詠春がいきなり厨房から駆け込んできて草薙剣についていろいろ聞いてきた。この刀マニアめ

そういえば『雷切』らいせきで『千の雷』って斬れたりとかするんだろうか…あとで試してみよう

しかし最近は「完全なる世界」潰してないなあ…まあナギ達がいるから暇はつぶせるからいいけどそろそろ連合、帝国間の空気がピリピリしてきたんだよね…どっちがしびれ切らすかはわかんないけどそろそろ戦争が始まるかな？

いやあ、楽しみだねえ

11話 鬼神兵つてあんま強そつに見えない。ただの的じゃね？(前書き)

でもレーザーとか出したらカッコイイ

11話 鬼神兵つてあんま強そうに見えない。ただの的じゃね？

あれから数ヶ月後、ついに戦争が勃発した。ナギが12か13の時であつた。

辺境の些細な争いでいざこざで不仲が始まり、そのようなことが繰り返されてそれは明らかかな敵意となり、やがて確たる意思を持つて帝国の侵攻は始まつた。

アルギユレー・シルチス亜大陸侵攻…

しかし彼らの真の目的は彼ら古き民の文明発祥の聖地「オスティア」の奪還であつた。

彼らヘラス帝国はメセンブリーナ連合からオスティアを奪還すべく大規模な部隊をオスティアへと送り、連合はそれに対してこちらもそれ相応の大部隊を配置し、迎え撃つつもりによつた。

そして我ら「紅き翼」はリーダーであるナギの決定に従いメセンブリーナ連合側にいるため、この「オスティア防衛戦」に参加するこゝとなつている。

今はオスティアの外壁の近く…つまり最前線で俺達は待機している。遠くで魔力光らしきものが見える。おそらくあと数分で接敵するだろつ。

「ぶつ…」

「解説お疲れ様です。シンリー。」

「アイツらさつきからなに言ってるんだ？」

「どうせ気にするだけ無駄じゃ。」

「お前ら少しは緊張感を持ってえ！」

上から俺、アル、ナギ、ゼクト、詠春である。

「お？なんだえーしゅん、緊張してんのか？」

「当たり前だろ…これだけ大きな作戦なんだ。緊張くらいするさ。」

「まあそれが普通じゃのう。シンリーはどうじゃ？」

「武者震いが止まんね、このピリピリした空気、迫り来る大群、屍に満ちた戦場。ククツ、想像しただけでゾクゾクする。」

久しく忘れていた戦場の空気だ。エヴァと傭兵たちを振り返りにしていた日々が蘇るね。

…俺ってこんなバトルジャンキーだったけ

口調もなんか戻ってるし…まあいいか

「そ、そうか。」

「昔は殲滅戦ばかりだったが、たまには護る戦いもいいかもしれんな……そうら敵が来るぞ。準備をしろ。」

言って『常闇の外套』を身に纏い、臨戦体勢に入る。

皆も体勢が整ったようで、ナギが皆を見渡して言う。
他の戦線ではもう始まっているようだ。

「おし、準備はできたな？「紅き翼」初めての大作戦だ、気合い入れていくぞ。」

「「紅き翼」……出動!！」

『獄炎の紅翼』を展開し敵の群れへ突っ込んでいく。

最初から飛ばしていくぜ!

「アーツハツハツハ！」

最高にハイってやつだぜ！

俺はいま『闇の魔法』で『燃える天空』を術式兵装し、背中には『獄炎の紅翼』、右手には『破壊の杖<レーヴァンティン>』を持ち、左手では時折『燃える天空』を放っている。

『破壊の杖<レーヴァンティン>』の原型は念じることで対象を破壊する杖だが、その形状や効果は地域の伝承によって異なる。日本では「煉獄の炎を纏った巨大な剣」と伝わっており、俺がいま投影して使っているものだ。

この剣の刃渡りは5mほど。それだけでも十分デカイが物足りないので魔力で炎の量と密度を上げてほしい15mくらいにしている。ちなみに『獄炎の紅翼』も出力を上げて全長80mくらい。

つまり炎一色の俺が戦場で大暴れしているってことだよ。

「墜ちろ蚊トンボ！ 『炎皇爆域』」

ドゴオオオン！

消し炭になった敵兵士が地面に力無く落ちていく。

「見る！人がゴミのようだ！ハッハッハ！！」

テンション上がり過ぎて大佐のセリフも余裕で言っちゃうWWWな
んか俺キャラ変わってね？

「シンリー！他の戦線から宮殿に敵が取り付いたようです。そつち
にはナギが先行しています但他的戦線が心配なので私達は一旦此処
を離れます。だから此処の敵の足止めを頼みます。大丈夫だと思
いますが、お気をつけて！」

足止め……だと……

そんなことを頼まれたらあのセリフを言っしかないじゃないか！

「ああ。時間を稼ぐのはいいが」

「？」

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

フフフ、言ってしまった。

今日は戦場でアドレナリン出まくってるからか俺の厨二脳がタミフルでマツハなんですwww

「…フフ、頼りにしていますよ。」

アルはそう言っつて転移魔法で消えた。

まあ期待には応えませんが。

「真・気功砲っ！」

足止めの定番っつていったらこれだよな。

あの時だけあのハゲにホレたもの。

殲滅してやんよ！

side
アル

今日は「オスティア防衛戦」が展開される日。
あと数分で敵はここまで来るでしょう。

流石に詠春やナギも緊張を隠せないでいますね。
まあ私も内心ドキドキしてますが。

しかし…シンリーは流石、と言うべきですね。全く焦りを見せない。
伊達に長く生きてはいませんね。

私が感心していると、ゼクトがシンリーに案配を聞きました。

「武者震いが止まらんね、このピリピリした空気、迫り来る大群、
屍に満ちた戦場。ククツ、想像しただけでゾクゾクする。」

そう言つて恍惚たる表情で身を震わせるシンリーに、皆が僅かに距離を置いたのに彼は気付いているのでしょうか？

「そ、そうか。」

詠春なんかドン引きです。

「昔は殲滅戦ばかりだったが、たまには護る戦いもいいかもしれんな……そうら敵が来るぞ。準備をしろ。」

そして皆が気を引き締める。
それと同時にナギが声をかける

「おし、準備はできたな？」「紅き翼」初めての大作戦だ、気合い入れていくぞ。」

フフ、かく言う私も戦争は初めてです。どこまでやれるかわかりませんが精一杯頑張りますよ。

「「紅き翼」…：出動！！」

私の目に映るのは圧倒的火力で敵を次々と屠るシンリーの姿。
私はその姿に半ば呆然としていました。

視界を覆うほどの爆炎、戦場を駆け抜ける朱雀のような翼。

そして何より嬉々とした表情で敵を焼き払うシンリー自身に私は恐怖を覚えた。

『炎皇爆域』で炭化した敵を「ゴミのようだ」と形容し歪んだ高笑いをあげる彼を見て、私は今まで彼が人間に非道な仕打ちや非難をされていたのだと理解した。

おそらく私が想像もつかないような拷問にかけられたこともあるのだろう。

彼は心の根幹では人を憎んでいる。だからこんなにも戦場では残酷になれる。

だがそれと同時に彼は人の優しさ、暖かさの部分も知っている。

普段の彼もまた、彼の本心なのでしょう。

平和に暮らしたいのに、周りがそれを許さない。私達のような心を許した人間と一緒に居たいのに、心の傷？<トラウマ>がそれを許さない。

以前彼は言った。

自分は『誇りある悪』だと。

それは彼が対極にある二つの心を上手く飼い馴らす為に生まれた、言わば「自身へのルール」。

『悪』として時には人間を嬉々として殺し、『誇り』を持つものとして時には人間に優しく接する。

私は思った。 彼は強いと。

同時に思った。 彼は脆いと。

だから私達が支えてあげなくてはいけない。

彼が心を許した人間として。

そしてなにより親友として。

……

まずいですね…他の戦線が突破されましたか。

宮殿内にはナギが向かっているようですがナギの分で空いた穴も埋めなくては。

しかし此処でシンリーを一人にするのもナンセンスですね。
流石にシンリーでもこの大量の敵を一人で相手するのは厳しいでしょう。

しかし他の戦線の戦力が足りていないのも事実…仕方ありませんね

「シンリー！他の戦線から宮殿内に敵が取り付いたようです。そこにはナギが先行していますが他の戦線が心配なので私達は一旦此処を離れます。だから此処の敵の足止めを頼みます。大丈夫だとは思いますが、お気をつけて！」

そう言うと彼はあろうことかこう言った

「ああ。時間を稼ぐのはいいが」

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう?」

自然と、私の顔は微笑を浮かべていた。

そうだ。彼は強い。身体も、精神も

彼のセリフは私のさっきまでの心配を全て吹き飛ばしてしまった。

私は何を考えていたのだろう。

そもそも彼は支えなど必要なかったのだ。彼は強いから。

まったく、そんなことに気が付かないとは、私は親友失格ですね。

だが私の気分は晴れていた。

目の前で不敵に笑っている『誇りある悪』があまりに頼もしかったから。

「…フフ、頼りにしていますよ」

懸念事項は無くなった。

さあ、私も自分の仕事を全うしなくてはシンリーに笑われてしまう。

私は気持ちを切り替え、戦場へと赴くのだった。

s i d e o u t

結果として、オスティア防衛作戦は成功した。

俺はアルと別れた後も敵を倒し続け、足止めどころか殲滅した。
鬼神兵たおすの楽しかったですw w w

だって鬼神兵が使徒っぽかったんだもん。ついシンジ君の真似しち
やったよ。まあ俺の本名もシンジだしねw w

とりあえずそんな感じで勝ったわけよ。

もう一度オスティア防衛戦が起こったんだけどこれも辛くも勝利し
た。

俺は楽勝だったけどね！

あとなんかアルの態度が以前より柔らかくなった気がする。
ロリ談議しすぎたか？

まあ得に害はないから放っておくことにする。

そしてもう一つ、あの姿で戦場を駆け回ったからか「紅の破壊神」という二つ名が増えた。

しょうがないじゃん、あれが一番殲滅力高いんだから。

最終的にどの二つ名で落ち着くんだろうか…

11話 鬼神兵つてあんま強そつに見えない。ただの的じゃね？（後書き）

アルが変な方向に勘違いするお話でした

設定としては、シンリーはバトルジャンキーで、かつ向かってくる敵には容赦しない性格。逃げるやつは追わない。こんな感じです。

12話 スキヤキに生卵と椎茸は必須だよね？（前書き）

魔法世界の通貨の相場がわからなかったので1ドラクマ 1ドルと設定しました。

そのへんは適当です。

12話 スキヤキに生卵と椎茸は必須だよね？

side ジャック

俺は今とある喫茶店で一人の男とテーブルを挟んで向かい合っている。

男は俺の傭兵の仕事をよく持ってくるお得意様で、もはや顔なじみのある依頼の仲介人だ。

男が懐から数枚の写真を取り出した

「今回のターゲットはこの三人の男、それに…」

「この少年と…この男だ。」

写真を見て、思わず口元が釣り上がる。

俺はただその最後の写真だけを見つめていた。

「子供と思って油断していると痛い目を見るぞ。得にこの男…君もわかるだろうが巷では「絶対強者」と呼ばれ騒がれている1000万ドラクマの賞金首だ。」

んなことあ知ってるよ。それにヤツ相手に油断なんかできるはずもねえ。

だがこんなカタチで約束が守られるとはな…あれか？これが運命ってやつなのか？

「君が望むなら部下もつけるが…」

「いらねーよ。」

久しぶりの喧嘩なんだ。邪魔なんか入ってたまるかっこの

「一人で充分だぜ。任せときな。」

精々首でも洗って待ってるよ！シンリー！

side out

オスティア防衛戦後、ヘラス帝国も一筋縄ではいかないと悟ったためか、両国の戦力が大幅に落ちたためかは分からないが最近は大きな戦はない。

あつたとしても精々小競り合いくらいだ。

そのため「紅き翼」に依頼が来ず、ちょっとした休暇のようなものになっている。

今はとある峡谷で鍋パーティを開くところだ。

「んっふっふっこいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ。じゃ、早速肉を〜」

「あつナギ！おまつ…！何先に肉を入れてるんだよ！？」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

トカゲという名のドラゴンですなわかります。てゆーかドラゴンって食ったらうまいのか？

「いいじゃねえか。旨いもんから先だよ、ホラホラ！」

ナギが詠春の声を無視し、次々と肉を鍋に入れていく。

「バツ、バカ！ 火の通る時間差というものがあってだな…まずは野菜を入れて…あーちよッ！」

「あーうっせ！ うっせーぞ、えーしゅん！」

「ナギの言う通りだぜ詠春。手順とか関係なく鍋はみんなで囲んで喧しく食べるもんだ。」

「さすがシンリー、話がわかるぜ！」

やっぱりナギとは気が合うねえ

「フフ…詠春、知っていますよ。日本では貴方のような者を「鍋將軍」と呼び習わすそうですね。」

「ナベ・シヨーグン!?!」

「っ…強そうじゃな」

「ならば俺は皇帝ナベレオンだ!」

「カツ」悪いな

「語呂がイマイチじゃ」

「ナンセンスですね」

ぐはっ! シンリーに1700の精神ダメージ!

くそっ、白夜叉が畏怖した存在を簡単に一蹴しよって! 鼻フックすんぞ!

「わかったよ…詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す。好きにするが良い」

「（鍋奉行じゃ……？）んー…嬉しくないなあー」

「結果、ナベ好きに出来るんだから良くね？」

そーいやこちら辺でジャックでてるんだっけ？

懐かしいなあ。アイツと久しぶりにバカ騒ぎしたくなってきたよ。
なんかジャックとナギとは波長合うんだよね

やっぱ俺って馬鹿サイドの人間なのか？
すごい嫌なんだが

「おお、何じゃこのソースうまいぞ？」

「ホントだ、うめえっ！？」

「これこそ日本の誇るしょうやーい二番煎じWWW」シンリーお

「前ちよつと黙れ。」ガツ

「アイアンクロー痛いです。」

「詠春地味に握力つよいのね。」

「…それに大根おろしですね。」

「これがしょうゆかスゲエうめえっ！」

「ナギ、お前は日本に来たとき寿司食ったろ。」

「いいから詠春、顔から手を離せ。椎茸が食えん。五秒以内に手を離さんと噛むぞ。」

「牙でチクツ、とやったら慌てて手を離した。」

「そういえばシンリーって吸血鬼だったんだな。すっかり忘れてたぞ。」

「まあ最近吸血鬼らしいことなんてしてないからなあ。血も吸う必要ないし、こーやってスキヤキ食べてるだけで充分幸せなんだよね。」

「マジ椎茸うめえ」

「確かに。姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな。」

「姫子ちゃ…？ ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

箸ちゃんと持ちなさいゼクト

「まあ…戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも……です。」

「その戦だが…やはりどうにも不思議に思えてならん。」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろつが鳥頭。あと肉ばっか食うな。」

ヒュン

ドゴオッ！

その時上方から一本の大剣が降ってきて鍋をひっくり返した。

いち早くそれを察知していた俺達は宙に舞うお肉を箸でキャッチするが、詠春は反応できずに鍋を頭から被っていた。間抜けめ！

「食事中失礼！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！ いった
よやるうぜー！」

崖の上のぐっついポニヨ登場！

青い海からやってきたのか？

「何じゃ？あのバカは？」

「帝国のってわけじゃなさそうだが…シンリー知ってるか？」

「知らん。そこらへんに住んでる山賊じゃね？」

あ、なんかずっこけてる。

崖っぷちでコケて落ちないとか器用だな

「なあ詠しゅ…むお！？」

「これが鍋將軍の戦闘形態か…」

「随分と間抜けな戦闘形態もあつたものですね。」

同感です。

「フ、フフフフ…食べ物で粗末にするやつは…」

「どーしたー？来ねえのかー！？だったらこっちから行っ…」

スパッ

「斬る」

「…おほ（。・。・）」

ガイン！ ギイイン！

「アイツ何者だ？詠春の攻撃凄いでるぜ。」

「あの大男やりますよ、見たことがあります。ちょっと前に南の方で話題になった剣闘士ですよ。しかし予想以上に強いですね。」

「ヤツはわしが育てた。」

「そうなのですか？」

や、つっても実戦形式でボコってたただけだけどね

あ、詠春やられた。しかし二度目なのに同じ手で気絶するとかお前はいつになったら免疫つくんだ。

あれか？二十過ぎてからもピュアピュアです（笑）みたいな

「へえ、シンリーが育てたヤツか。じゃあちよつと戦ってくるかな。

」

「いつてらっしや〜い。」

「じゃあわしらは鍋を再開するかの。」

「ですね。シンリー、新しい鍋を持ってきてくれますか？」

「りょうかい。」

鍋つつきながらまつたり観戦するとしますか。

side ナギ

「来たな。「赤毛の少年」、弱点、なし。特徴、無敵。」

「奇遇だなあ小僧。俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ。」

ヤツが声をかけてくる。それに俺は挑発で返した。

「仲間が世話になったな。借りは俺が返すぜ。」

「ハッ、じゃあやるか？」

「へっ、おっさんいいのかよ？ 剣なしで。」

「心配すんな。俺は素手のが強え。」

そう言っつて臨戦体勢をつくり、
どちらともなく飛び出した

そして互いに顔を殴り合う

ドゴオン！

…！？ オレが打ち負けただと？

…ハッ！ おもしれえ！

流石はシンリーが育てたつていった野郎だ。こんなに強いやつは
シンリー以外初めてだぜ！

影分身をつくつて攪乱しながら後方で呪文を唱える。

「うおっ！？ たくさん？ ニンジャかよっ！ うーんと…めんどくせ

えっ！」

ヤツが周囲に気を衝撃波のように放って影分身を消す。あのシンリ
ーが育てたんだからな。このくらいのデタラメ技は想定の内だ
ぜ。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻」

「！ 大呪文かッ！！」

ヤツが気付くが、もう遅いぜ！

「『千の雷』！」

「『気合い防御』！」

カッ！ バシユウウウウ！！

『千の雷』がヤツのいた辺りを徹底的なまでに蹂躪していく。

そして雷が引いた場所には、焦土となった地面の上にほぼ無傷のヤ
ツが立っていた。

「今のをほぼ無傷で済ますかよ…」

「こちとらそれ以上の攻撃食らってた期間があっただんでな」

「シンリーのことか？」

「…やっぱアイツ覚えてんじゃねーか。ああ、そーだよ。俺様にとって主菜はシンリーメインディッシュなんぞでな。せいぜい引き立て役頼むぜ？前菜オードブル」

「ハッ！ 余裕こいてられんのも今のうちだぜ！」

久しぶりにいい闘いができそうだぜ！

「ガハッ…マジかよ」

このオレが…負ける？

「ぐ…いや、てめえの勝ちだよ。こっちは5対1でかかってんだ。こんなにボロボロじゃな…： 依頼は失敗だな」

「どつちにしろオレ自身が負けたことにかわりはねえよ…： オイ、てめえ。ジャックとか言ったか。次会う時こそはオレが勝つからな… 覚えてろよお…：」

そこでオレは意識を失った

side out

「まさかナギが負けるとはのう…：」

「まああの筋肉達磨も大概チートだからねえ。」

「それを貴方が言いますか…：」

「え？なんか問題ある？」

「」「ありすぎ。」「」

そんなやり取りをしている内にいつの間にかジャックが近くまで来ていて、ハモっていた。なんか酷くね？

「おお、久しぶりジャック。つーか第一声がそれかよ。」

「オメーがボケるからだろ！…はあ、せっかくシンリーと久しぶりにバトれると思っただらこれかよ。もう気も残っちゃいねえ、俺様の負けだぜ。」

「たく…なにモンだ？あの餓鬼は」

「俺達「紅き翼」のリーダー、ナギ・スプリングフィールドだよ。ま、どうせ今後もちよつかいだしてくんだろ？そんな時はまた戦ってやってくれ。」

「実力も近いんだしいい好敵手ライバルになるだろ。」

「ライバルか！ガツハツハ！いい響きだなあソイツは。」

「じゃあその時まで精々鍛えておくよう伝えといてくれ。じゃあな！」

そう言っただジャックは去っていった。

最後までむさ苦しいヤツだったな。

その後、起きたナギにジャックの伝言を伝えると、ゼクトに修行の時間を増やしてもらい必死に自分を鍛えていた。

予想通りジャックはまちまち襲撃に来て、その度にナギと戦い、た

まに俺が出てボコボコにした。

んでいつの間にか仲間になってた。

いや、ホントに。

気付いたらなんか一緒に居たんだよね。

んでもって戦争がまた激化しそうな雰囲気出てるからこの日常ともオサラバっばい。

ジャックが なかま になっ た ！

13話 「禁煙する」って宣言する奴は大抵一週間以内に折れる

俺達がジャックとなんやかんやしてるうちに、帝国は大規模転移魔法の実戦投入による奇襲で連合の喉元に位置する巨大要塞「グレートブリッジ」を陥落させた。

かく言う俺達「紅き翼」も最近は敵のしつこい追撃にウンザリし、先日まではアルギュレーの辺境に隠れていた。

そんなとき連合上層部から「グレートブリッジ奪還作戦」に参加しろとの指令があり、正式に「紅き翼」は突撃部隊に組み込まれた。

そして今に至る

「おおー、スゲエ！あれ全部敵か？」

「ガハハ！相手にとって不足は無しだぜ！」

「血祭りに上げてやんよ！」

「このバカトリオは少しは静かにできんもんかのう…。」

バカトリオ……だと……

なんか紅き翼での俺の扱いがただのバカになってきた。
ナギ&ジャックとスキンシップ（肉体的な）とってたからかな？

どうでもいいけど「肉体的な」って付けるとエロいな。
そしてゼクトの戦闘服ローマ法王みたいでワラタWWW

「おし…そろそろ時間か。いくぜ野郎ども！」

シンリー、逝つきまーす！

敵の数もさることながら飛び交う砲撃がヤバい。さすが巨大要塞だ
ぜ！

マクロスみたいに變形しないのは残念だけど

っーかさっきから火線がこっちに集中してる気がする。なんで？

「当たらなければどうということはない！」

戦場って名ゼリフを違和感なく言えるから大好きです。

敵が近づいて来たので「燃える天空」を解放して撃墜。

「闇の魔法」で何個も魔法を体にストックしてるから解放するだけで敵が吹き飛ぶ。

これなんて人間爆弾？

腹減ったからそろそろケリつけるかな。

戦いが終わった。

メセンブリーナ連合の「グレートブリッジ奪還作戦」は成功し、連合側が勢いづく。

この戦いで「紅き翼」は有名になった。

ナギは味方には「千の呪文の男くサウザンドマスター」と讃えられ、敵には「赤毛の悪魔」と恐れられた。

そして俺は味方には「絶対強者」と恐れられ、敵には「紅の破壊神」

と恐れられた。

なんかヒドくね？ちゃんと味方は守りながら戦ってるのに…
敵はともかく味方にも畏怖されるとか俺そんな怖いかな？

アルに聞いたなら「シンリーは暴れすぎです」とか言われた。
後悔はしてないけど反省はしてる。でも自重はしない。

あと皆にファンクラブが出来ていた
ちゃんと俺の分もあったよ！

なんかクールな顔と猛々しい炎の翼がミスマッチしてていいらしい。
俺がクールとかwww

帝国と連合で互いに戦力が拮抗したため犠牲者が増え、紅き翼が（
バカトリオ以外）鬱モード発動中だったときにヒゲづらでくわえ煙
草のおっさんが仲間になった。

ガトウとタカミチだった。なんでも、もとは政府の犬だったが、こ
の戦争を裏で引き起こしている組織を調べるために自ら首輪を引き
ちぎって来たらしい。

「ってただの脱サラじゃんww」

「（脱サラ？）なにを言っているんだ？」

「黙れ近寄るな口を閉じる鼻も閉じてそのまま地面に伏して自分の
ようなゴミが貴重で清楚な大気を無意味に汚してしまったことを激
しく反省しながら窒息死して糞尿垂らしながらこの世の生を終える。
それが貴様にできる唯一の贖罪だ。」

「……………」

「し、師匠はいったい何をしてシンリーさんを怒らせているんですか？」

「……………わからん。」

「シンリーは煙草が大嫌いじゃからのう。服に臭いがついてるだけで怒るぞ。最悪、燃える天空で強制消毒されるから気をつけたほうがよいぞ。」

「そ、そうなんですか。」

タカミチはいい子だなあ。

将来このハードボイルド気取りのおっさんに毒されないように今から矯正しとこうか。

「タカミチ。別に無音拳に憧れるのはいいけど、そのシブメン気取りの恥ずかしいオジさんみたいにはならないように。あと煙草は成年になってもやっちゃ駄目だぞ？金と健康と人徳で損するだけだから。な？」

間違っただけとは言っていないはず。

なのに口を押さえて笑いを堪えるナギとジャック。

「ぜ、善処します。正直ボクも煙草はどうかと思ってました。」

「うむ。」ナデナデ

タカミチが素直な子だったので頭を撫でてやる。
「やっぱネギやヤクルトみたいな小利口な餓鬼より素直な子供の方が
100倍いいね。」

「おーい、お前ら。そろそろ食材が無くなりそうだから誰か買い出し
しに行ってきてくれないか？」

「えー、また？この前も行ったばっかじゃん。」

「お前とジャックが阿呆みたいに食うからだろうが！食費だって高
んでるんだぞ！」

ちなみに俺は少食だったりする。

「ちえーっ、しゃあねーな。シンリー行くぞ。」

「おーう。じゃあガトウ達は調査よろしく。」

俺とナギは部屋の隅でブツブツ呟いてorzポーズをとっているガ
トウに声をかけ、街へ買い出しに行った。

なんかガトウの背中からきのこが生えてた気がしたけど気のせいだ

ろつ。

「すべては 愛の ターメリック

ハラハラ ハラペーニョ

泣かれちゃだもん シナモン カルダモン」

「なに歌ってたんだ？」

現在カレーの唄を歌いながら帰宅中。荷物は「無限宝庫」にしまつてある。

「無限宝庫」のことをナギに教えたら、持ってきたお金ぜんぶ使つて食材を大量に買いやがった。まあ容量は無限だしいいんだけどね。

夕焼けに染まりつつある街を二人で歩く。周囲に人はいない。街は静かだった。

瞬間、俺とナギがいた位置に影の帯が突き刺さった。

「どーりで人がいないわけだぜ。人払いの結界か？」

「らしいねえ、つーかアイツ誰？」

瞬動でその場を離れていた俺とナギが敵の姿を目視する。

「あっ！アイツ確かこの前オレがぶっ飛ばしたヤツだ。」

「つーことは戦争関連で紅き翼に恨み持つてる連中か、まあ一人み
たいだが。」

俺達が暢気に会話していると、その男が話始めた。

「いかにも。我はボスプラス所属、カゲタロウ！貴様らよくもこの
前のたたか「飛鳥文化アタック！」ギョルルルドゴオン！ぐああ
あ！」

背中いてえ

セリフを遮って超高速スピリアタックでカゲタロウを吹っ飛ばす。つーか脇役とはいえ原作キャラにこんなところで会うとは……

「いきなりだなシンリー。てか今の技なんだ？」

「昔日本にいた、將軍と同じくらい偉い「聖徳太子」という人物の必殺技だ。魔力や気を使わずに寺を倒壊させたと言われている。」

魔力とかじゃなくあの人は何か違うものが体から溢れ出ているよね。カレー臭とか

「マジか！？ ショーゲンと同格…それに寺って詠春の実家みたいなどこだろ！？ あれを生身で破壊……シンリーはそんな技を使えるのか！ スゲエな！」

「グ…なんとデタラメな……」

さっきの話がデタラメだと気付かれただど！？

え？ 違う？ 俺のことだつて？ そんな今さらでしょ

というかカゲタロウって名前に実は日本出身だったりするののか？

「まあいいや、ナギ帰ろうぜ。カレーが俺を待っている。」

「まつ待て！」

「役者不足だよ、影男。私と戦いたかつたらもつと強くなるんだな。」

役不足って人物がスゴすぎて役の方が不足しているって意味なんだ
ぜ？みんな知ってた？

俺は中三の時テレビ見て初めて知ったよ。

その後倒れているカゲタロウを無視し、隠れ家に戻った。

「なあ詠春…日本ってホント凄いな。」

「（なんだ？いきなり…）ああ、日本の文化は凄いぞ。俺は日本に
生まれたことを誇りに思っているからな。でもなんでそんなことを
？」

「オレ…シンリーに「ショートクタイシ」のこと聞いて感激したよ。
オレはもつと努力する！そして「ショートクタイシ」みたいになる
んだ！」

「（おお！ナギが脱バカ宣言を！シンリーもたまにはいいことする
じゃないか！）」

そつか！俺も応援するから頑張れよ！」

「おう！そんなときには必ず詠春ん家を素手でぶっ壊してやるからな
！b（へー。）グッ」

「なんでだあああああ!!」

我関せずと冷蔵庫に食材つめてたら、いきなり詠春からチョップが飛んできた。

いてえなオイ

……

今日の夕食はカレーだった。
今はガトウ達も調査からもどり、一緒に食事をしている。

「ところで、此処に入るときに見たんですけどあのシールってなんですか？」

「禁煙シール。つまりこの建物の中では煙草吸っちゃダメってことだ。」

「……外だいいのか？」

「……服に臭いつかないんだったらな。」

「そこをなんとか」

このヤニ中毒者が！

外で吸うのは咸卦法と無音拳を教えてもらうことと引き換えに許可した。

修行一週間目で両方習得した。

「両手で合成するより体内に取り込む感じでやると上手くいくなあ。」

「……それ一応『究極技法』アルテマ・アートなんだがな……」

「どっやってこんな早くに……」

「伊達に長くは生きていないぜ？」

魔力と気のコントロールで俺に敵うヤツなんていないでしょ

「咸卦法って発動すると風がおきて超サイヤ人みたいになるんだよ

ね。なんか威嚇にちよいどいいかも。」

究極技法を威嚇に使うとか贅沢すぎww
次はどんな技覚えよっかなあ…

「おーい、みんなで記念写真撮るから集まれー!。」

詠春が呼びに来た。京都の写真ですわわかります。

「全員居るかの?」

「いますよ。」

「おっし、じゃあ撮るぞ。」

俺が遠隔操作でシャッターをきつたのでタカミチも入った。俺がナギの左で腕組みし、タカミチがガトウの前に立った。

「ジャックの顔が見切れていますね。」

「遠隔操作だから上手くいかないねえ。」

「うがぁー! 撮りなおせえー!!」

だってジャック背が高いんだもん。

その後ジャックが納得するまで撮りなおした。
エヴァも入れたかったな……

14話 美女に罵られたい。むしろ踏まれたい(前書き)

サブタイは割と本心だったりする

14話 美女に罵りたい。むしろ踏まれたい

「オレの故郷のある世界じゃ超強力な化学爆弾が開発されてこんな大戦はおこんねえそうだ。戦を始めたが最後、みんなまとめて滅んじやうからだつてよ。」

だがこつちの戦はいつ終わる？ 帝都ヘラスまで攻め滅ぼすつてか？ やる気になりやこの世界にも化学爆弾くらいの大魔法だつてある！ こんなこと続けても意味ねえぜつ！

これじゃ、まるで…」

「まるで誰かがこの世界を滅ぼしているかのような…ですか？」

「その推測もあながち間違つちやいないぞ。」

ガトウとタカミチが近づいてきた

「俺とタカミチ少年探偵団の成果がでたぞ。敵は「完全なる世界」… 帝国や連合中枢まで入りこんでいる秘密結社だ。」

渋い笑顔でキメるガトウ。けどな…

「チュツパチャ〇プスはどうかと思うぞ…」

「…なんかくわえてないと落ち着かないんだよ…」

↳数日後↳

「お前らに会わせたい人がいる。」

いま俺達は本国首都に來ている。

なんでも「完全なる世界」に抵抗するための、協力者がいるので是非会ってほしいそうだ。

ククク、ついにお姫様とご対面か。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。」

引っ込めジジイ！

「主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国・・・アリカ王

女。」

階段の方からロープを纏った美女がでてきた。
ウホッ…いい女……

お近づきになるうと思いい、話し掛けようとしたら、

「気安く話し掛けるな下衆が」

めっちゃ興奮した

「…？ なぜ前屈みになっておるのだ？」

「…いえ、どうかお気になさらず。」

アルがなんかニヤニヤしてる。腹立つなオイ

「ワハハハ！ありゃあ、いい女だぜ。一本芯の通ったな。」

「ああ？あれのどこがだよジャック。」

「照れんなよ。オメーずっとあの女のこと見てたじゃねえか。なあシンリー？」

「ああ、「気安く話し掛けるな下衆が」だって……ふ、ふふふ……」

「……」

へブン状態入ってた。

正気に戻ったらなんか二人にドン引きされてた。ん？俺なんかやっ
た？

「まさか…こんな…」

現在、隠れ家で俺とジャックはバカンス中、ナギはアリカ姫とデー
ト、他の皆は「完全なる世界」の調査、ガトウは残って情報整理を
していた。

バカトリオといえど俺は基本、頭はいい方なのでたまに調査にも混
じっていた。スーツ着たらタカミチに似合ってるっていわれた。

あとでジューズを奢ってやろう

んで話を戻すとさつきガトウがメガロメセンブリアのナンバー2ま
でもが「完全なる世界」であるとの情報を見つけ、「マジかよ…」
みたいな空気になってる。

「まあなんとかなんじゃね？」

「だな。」

「お前ら……」

その後ナギがアリカ姫を連れて「完全なる世界」の拠点を潰し、お
まけにメガロの執政官が「^{コンスル}完全なる世界」と繋がっている証拠品ま
で持ってきた。原作通りだな。

。数日後、俺、ナギ、ジャック、ガトウはナギの見つけてきた証拠を

持って、本国首都にいるマクギル元老院議員に会いに行った。あの爺さんが知り合いの法務官フラエトルに頼んで来てもらうことになっているからだ。ちなみにアリカ姫はヘラス帝国の第三皇女に会うため別行動をとっている。

もうすぐテオドラ&人形とご対面か。後者は正直いらんけど

「マクギル元老院議員、証拠をお持ちいたしました。」

「そうか、ご苦労だったね…」

「それより法務官は何処に…?」

「法務官は来られなくなつた…」

「!?!? なぜ…」

「ナギ。」

「ああ、シンリーもそう思うか。」

ナギが火属性の魔法を放つー前に俺があらかじめ装填しておいた「燃える天空」をマクギル（偽）に放った。

「うおっ!?!?」

「なっ!？」

「ちよっ…おま!」

ジャックとガトウが阿呆ヅラして驚いている。ジャックはともかくガトウのこの顔はレアだな。あれ?ナギも驚いてる

「落ち着け、見りゃわかる。偽物だ。」

「ああ。シンリーの言う通りだ」

「その通r…げほっごほっ!…その通りだよ「千の武器の男」。よくわかったね。」

焦げ付いた服で煙りに咳込みながらアーウェルンクスが登場した。カリスマもクソもねえwwざまあww

「見るナギ、お前のファンみたいだぞ。前髪の伸ばし方がお揃いだ。」

「…それによくわかったね千の呪文の男。こんな簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ。」

なんか普通にスルーされた

「本物のマクギル元老院議院は残念ながら 既にメガロ湾の底だよ」
「てめえっ！」

ナギがアーウエルンクスに近寄ろうとすると、ロンゲロングアゴー
な二人の男が出てきてナギの前に立ち塞がった。

「通しませんよ」

「くらえ」

「むさ苦しっ…」

「そんなこと言ってる場合か！」

結果、その場でのアーウエルンクス達の捕縛は失敗—（俺は手を抜
いた）に終わり、更に連合の裏切り者として扱われ追放されること
になった。

「タカミチ君たちは脱出できたかな…」

「ヌッフッフ 昨日までの英雄呼びわりが一転、反逆者か。いいね
え、人生は波乱万丈でなくっちゃな」

賞金首時代を思い出さず。今もだけど

↳数ヶ月後 「闇の迷宮」↳

「よお、来たぜ。姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

.....

↳タルシス大陸極西部オリンポス山、「紅き翼」隠れ家↳

「何だ、これが噂の「紅き翼」の秘密基地か！　どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者になに期待してんだこのジャリはよ。」

「角剥ぎ取っていにしえの秘薬でもつくってやるつか。」

テオつて名前、火山にいる古龍と被るよね

「なんだ貴様無礼であろう！」

え？俺？

「ただのゴミ係だ」

「意味わからんわ！貴様何者だ？」

「よくぞ聞いた！俺は、泣く子はウザいから燃やす賞金首、シンリーだっ！」

泣く子も黙る前に燃やす。ウザいから

いや、冗談だよ？

「!? 貴様が「紅の破壊神」だと? も、燃やされる〜!」

「ハツハツハ〜待て〜萌やすぞ〜。」

え、誤字だつて?どのへんが?

しかしこれ見た目、幼女を追いかける大人だよな。危なくない?
てゆーかさつきからアルの視線が突き刺さってくる。ふふ、羨まし
いだろう

お、アリカ姫がなんか言ってる。見に行くか。

テオに追いつき肩に乗せる。

「な、なにを……! / /」

「ほら、アリカ姫が何か言ってるから行くぞ。」

「…う、うむ、離すなよ! / /」

テオも大人しくなったので様子を見に行く。

「連合に帝国…そして我がオスティア。世界全てが我らの敵という
訳じゃな。」

じゃが…主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ?

世界全てが敵…良いではないか。

こちらの兵はたったの8人、だが最強の8人じゃ。

「ーならば我らが世界を救おう。」

我が騎士 ナギよ、我が盾となりー剣となれ」

「…へ、やれやれ。相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。」

ナギが服従の姿勢をとり、宣言した

「いいぜ オレの杖と翼、あんたに預けよう。」

山頂部から太陽が顔をだし、朝日が「紅き翼」の新たな始まりを祝福するように、皆を照らしていた。

それは、不覚にも見惚れてしまうほど幻想的で、綺麗だった。

そこから「紅き翼」の反撃が始まった。

俺、ガトウ、タカミチ、ゼクトで調査し、アリカ姫、テオ、アルで味方集め、そして戦えるヤツ全員で敵の拠点を潰していった。

敵の大半は武装マフィアや武器商人で、拠点を潰したあとコッソリお金を『無限宝庫』に入れたりしてた。皆には言っていない。アリカ姫に殴られそうだから。

何ヶ月か経つとアリカ姫やテオの人望のおかげか協力者がかなり増えた。

調査に割く人員も増え、確実に俺達は「完全なる世界」に近づいていった。

そして映画なら三部作、単行本なら14巻分くらいは行くであろう6ヶ月の死闘の後（ジャック談）…遂に奴らの本拠地を突き止めることに成功した！

さあ…終幕が見えてきたぜ？

14話 美女に罵りたい。むしろ踏まれたい(後書き)

少し急ぎ足で最終決戦まで進めてみた。

そしてシンリーにテオドラのフラグが立ちました

15話 最終決戦だよ！ 全員集合！（敵が）（前書き）

前回のサブタイと前書きを見返して自分で引いた。

中間テストで疲れてるみたいだ……

今回はガンダムネタを多分に含んでいます。ギャグ90%だけど

15話 最終決戦だよ！ 全員集合！（敵が）

世界最古の都 王都オスティア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」

「不気味なくらい静かだな、奴ら。」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ。」

「嵐の前の静けさってやつだよ。私達がこれから派手にやるからな、ククク。」

思えば長かったなあ…でも今日で遂に決着だ。

「ナギ殿！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

む、若かりしセラス登場。

ナギより年上のはずなのに幼く見えるな

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

「まあそつちにはシンリーもいるし大丈夫じゃろ。」

「しかし…ホントにお前外の援護でいいのか？」

ジャックが聞いてくる。

「ああ。実際、突入班は君らだけでもお釣りがくるだろう。私は精々部隊の死傷者を減らすことにするよ。」

それとも…自信がないのか？」

「ハッ！ 安心しろ。速攻で終わらして来てやるよ。それまでくたばんなよ。」

「誰にももの言っている。」

ナギと二人で笑い合う。
つと、そろそろ時間か

その後ナギがセラスにサインを求められていた。

俺は？

ガトウの説得むなしく、援軍は今のところ無し。既にタイムリミットだ。

「彼らはもう始めています…」「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今彼らの手にあるのです。」

「ああ。」

ナギが号令をかけようとするが、俺が手で制して止めた。

「最初に一発、開戦の狼煙のろしを上げようじゃないか。」

皆から距離をとり、右手に円柱形の剣を投影する。

「目覚めきろ、『乖離エイア剣』」

魔力を籠めていくと乖離剣がうつすら光り、円柱部分が回転し始める。そして俺の膨大な魔力を取り込んだ頃には、辺りは台風といっても過言でないほどの風に包まれていた。

「『天地乖離す開闢の星』エヌマ・エリシュ』！！！！」

キュイイイイ……………

ギユゴオオオオオオオン！！！！

召喚魔の群れに向けて放った台風は時空断層を生じながら敵を巻き込み、跡形も残さず切り裂いていく。障壁を展開して凌ごうとする奴らもいたが、世界を分断する一撃を防げる筈もなし、あっけなく消えた。

結論から言つと、

敵の半分以上が消滅しちゃったわけだ。

「……………」

…皆が「え？こいつ本当に人間？」みたいな目で見てくる。いや、吸血鬼だけだ。

流石にやり過ぎた。視線が痛いです。

「…っ、露払いは任された！さあ行け！」

「…よ、よおしっ、野郎ども！行くぜっ！」

ナギの声に合わせて「紅き翼」と混成部隊が一斉に飛び出してゆく。

俺も「紅の破壊神」の状態で戦場に出る。多重投影の設計図も頭にもう出来てある。

せっかくの最終決戦なんだ。出し惜しみはなしで行くぜ！

投影した剣群で貫き、レーヴァンティンで叩き斬り、「燃える天空」で吹き飛ばす。仕留めきれなかった敵は紅翼で蒸発させる。

相手は人間じゃないから容赦なく壊せるな、まあ人間でも手加減は

せんけど。

あらかた自動人形や悪魔を倒したとき、ふと宮殿をみるとナギがア
ーウエルンクスの首を掴み、宙吊りにしているところが見えた。
他の面々もそれぞれの敵を倒し終わったようだ。

けどまずくね？ここのシーンって確かナギが貫かれるんじゃない？

……見たからには放っておけないか。

高速で宮殿へと向かう途中、宮殿内で魔力の高まりを感じた。…ま
ずい！間に合わん！

紅翼の出力を上げ、全力でナギへと向かう

「ナギイッ！！」「ドンッ！」

バズッ！

ナギは突き飛ばしたが光線を避け切れず右胸を貫かれた。

「！？」

「シンリーー！！」

ゆらっ…

「！ 誰だ！？」

！
ライフメイカー
造物主か！まずい！

「いかんっ！ 『最強防護』！」

「グツ…… 『常闇の抱擁』！ 『熾天覆う七つの円環』！！」

ゼクトが防御障壁をはり、俺は闇と影の防護魔法で味方を覆い、右腕を前に突き出しアイアースの盾を展開した。

ドッ！

パキヤアアン！

次の瞬間には造物主の放った魔法が直撃し、俺とゼクトの防壁を全て破壊した。

俺はそのままの、ジャックは両腕を突き出した体勢で魔法を受け止めるがジャックは両腕を、俺は顔の右半分から右肩までを消し飛ばされ、なすすべもなく地面に転がった。

そして地面から目線を上げた時、奴を見た。

一見ただけで理解した。造物主の力量を。全力時ならわからないが、『天地乖離す開闢の星』を放ち、その後も全開で戦い魔力と気を消費した自分では確実に敵わないと。この負傷のことだつてある。

しかし…俺が感じたのはえもいわれぬ喜びだった。

この世界に来て、強大な力を持つてからは初めて会う上位的存在。もうそんな者は現れないだろう、と諦めていた存在がそこに居た。最強であり、負けることなどありえない筈の『絶対強者』が渴望してやまない、矛盾した願望が叶ったのだ。そして自らが『絶対強者』足りうるために、滅ぼす。

このときシンリーの頭は闘うことしか考えられなくなっていた。

造物主が去る。

「待てコラてめえっ!!」

「任せなジャック」

ナギが立ち上がる。

「い…いけませんナギ!その身体では!」

「アル、お前の残りの魔力全部でオレの傷を治せ。」

「し、しかしそんな無茶な治癒ではッ……」

「30分もては充分だ」「ですがッ……」

「ふふ、よかろう。わしもいくぞナギ、わしが一番傷も浅い。」

「ゼクト！ たった二人では無理です！」

「私もいくぞ。」

左腕だけで立ち上がり、言う

「！ シンリー！ 貴方身体が！？」

「安心しろ、真祖の肉体はこの程度では滅びんよ。それに魔力は一番残っている。早くナギの治癒をしてやれ。」

「シンリー待て！ 奴はマズイ奴は別物だ！ 死ぬぞッ！」

「らしくないなジャック。それに忘れたのか？ 私は『絶対強者』だぞ？」

「んでもって、オレは無敵の『千の呪文の男』だぜ？ オレは勝つ！ 任せとけ！」

「ナギイツ！ シンリイイツ！」

ジャックの声を無視し、宮殿に入っていく。

今になってやっと少し頭が冷えてきた。

これ以上行くと流石にヤバいんじゃないかね？とか俺死んじゃうんじゃないかね？とか考える余裕くらいは出てきた。

しかし造物主と闘いたいってのは紛れも無い本心だった。

だから俺は進んだ。ハイテンションのままです。

宮殿の中央と思われる場所に、奴はいた。

「勝てぬとわかって尚戦うか。」

「ハ！誰が勝てないって？」

「もはや言葉はいらぬ。かかって来るがいい！」

「ナギ、君は力を溜めて、止めを刺すんだ。私とゼクトで足止めとチャンスをつくる。」

「ああ、わかったぜ！」

「シンリー、わしは後方から援護する。前衛は任せたぞ。」

俺とゼクトは同時に飛び出し、造物主へと襲い掛かる。

造物主の周囲に魔法陣が現れ、俺の胸を貫いたあのレーザーが無数に射出される。

俺はなんとか避けていたがゼクトは、闇の波動のようなものをまともに受け、動けなくなった。ゼクトはここでリタイアか。

『獄炎の紅翼』を展開し、機動力を上げ造物主の攻撃を避ける。

顔のすぐ傍を通り過ぎていく攻撃、身体に何度も当たり、そのたびに俺を傷つけるレーザー。

俺はかつてなく興奮していた。

命を懸けた戦いなど初めてだからだ。

「ライフメイカー！　なんでこんな儀式を発動させようとする！？

これでは魔法世界の魔力が減衰し人が住めなくなってしまう！

世界に冬が来るぞ！」

逆シャアの天然パーマ大尉風に叫ぶ。

「魔法使いは所詮自分達のことしか考えていない。だから世界を無に帰すと宣言した！」

ちょｗｗｗｗアンタノリ良すぎｗｗｗｗあの神様が意識乗っ取ってるとかじゃねーよな

「人が人に罰を与えるなどと！」

「私、造物主ライフメイカーが肅清しようと言うのだ。」

「エゴだよ、それは！」

「魔法世界が持たんときが来ているのだ！」

レーザーをくぐり抜け造物主に接近し、殴り飛ばそうとするが造物主に腕でガードされる。

硬い！腕に強化を集中させているのか。

動きが止まったところでレーザーを撃たれ、左足と腹に直撃した。

「ぐぐっ！」

「消えるがいい！」

「まだまだ！まだ終わらんよ！」

波動を咄嗟に強化した障壁で防ぎ、両手にダークを投影し徹甲作用を使つて投擲する。

造物主は両腕で防ぐが、腕の上に弾かれる。ボディががら空きだぜ！

造物主の腹に手をあて、

「『左腕解放』！」

ドゴオオオン！！

造物主が天井を突き抜けて外へ吹き飛ばされる。

俺は追撃をかける。

「人は、人は暖かいんだ！貴様とてそれを知らんわけではあるまい！」

「そうだ…しかし、その暖かさをもつた人間が世界さえ破壊するんだ！それをわかるんだよシンリー！」

なに勝手に名前で呼んでんのコイツ？

「わかってるよ！だから！世界に人の心之光を見せなきゃならんんだろ！！」

無数の突きと宝具を放ち、造物主の腕を狙う。ボロボロの状態で翻子拳を打ち続けたからか左腕がちぎれかけている……早めに決着を着けなければいけない。

「それでもっ！」

ようやく造物主のガードが崩れる。それと同時に俺は造物主に組み付いた。

「守りたい世界があるんだああああっ！！」

『全身解放』、『炎皇爆域』！

俺を中心に大爆発が起こった。

残りの魔力全部使ったんだ、障壁である程度は防がれたが大ダメージは与えれただろう。

煙りが晴れるとそこには、節々が焼け焦げ、よろめきながらも立っている造物主の姿があった。

造物主を倒したあと、「世界を無に帰す儀式」が始まっていたり、リカードのメガロ艦隊とテオの帝国艦隊が参戦して大規模反転封印術式で儀式を阻止したり大変だった。

ちなみにゼクトは、ダークパワーを取り込んで頭がおかしくなっただけで死んだ。

ゼクトって闇属性だったんだな。

流石の俺もけっこう死にかけたから、治療のために帝国の戦艦に行ったらテオとタカミチにかなり心配させてしまった。

むしろタカミチは怖がってた。今の俺スプラッタ過ぎてゾンビにしか見えんからな。

テオは涙目になりながら救護班を大急ぎで呼んでくれた。心配かけてゴメンねえ。

10時間後に完治した。真祖バンザイ！

なんか俺が治療してるときにガトウが色々手を回して俺の首についてる賞金を無くしてくれたようだ。ついでに罪状も。

誠にありがトウ。なんちゃって

ガトウってあんまし役立ってなかったから正直下に見てたよ。

「シンリー、ちょっといいかのう。」

「ん〜？」

テオから戦争終結の式典に誘われた。

なんでも元が賞金首だから「立派な魔法使い」の称号は授与されな
いが、戦争終結の功績者として「英雄」扱いされるらしい。

「ふーん。楽しそうだし行ってみるかな。」

「よし、じゃあ肩車しながら行くのじゃー！」

「そこは立場とか考えようよ……」

結局テオを説得して普通にナギ達と式典に出た。残念そうにしてたけど社会的立場ってもんがあるんだよ、許せ

メダルはテオが背伸びしながら俺の首に掛けてくれた。

ちよつと萌えた。

15話 最終決戦だよ！ 全員集合！（敵が）（後書き）

内容は正直すまんかった

シンリーに名ゼリフを言わせたかっただけなんだ……

16話 ガトウ「ナギは大変なものを盗んでいきました、あなたの心です。」

アリカ姫「……はいつ！／＼／」

みたいな？

16話 ガトウ「ナギは大変なものを盗んでいきました、あなたの心です。」

あれから数時間後、オスティアの崩落が始まった。

「たかが石ころ一つ、ガンダムで押し出してやる!」
とかやりたかったけど魔力が使えず断念した。くそう

俺も避難誘導を手伝い、アリカ姫達の必死の救助もあって犠牲者は市民全体の3%を下回った。

アル曰く、状況から考えてこれは奇跡的な数字だそうだ。

俺達「紅き翼」はメガロメセンブリアに拘束される可能性が高かったので、クルトの言う通りしばらく身を潜めることとなった。

んで崩落から二ヶ月後、アリカ姫がタイーホされた。元老院の仕業らしい。

アリカ姫の二年後の処刑が決まり、彼女自身は「災厄の女王」と呼ばれ人々に蔑まれた。ムカつくなあ、人類滅ぼしてやるうか。

「いつしよに遊ぶのじゃ!」

「へいへい」

現在テオの城に居候中

俺はオステイア崩落後テオの所に行き、テオの客人として一緒に城で暮らしていた。

帝国の皇女の客人という立場なら、メガロメセンブリアの元老院も下手には干渉できないだろうと考えたからだ。

俺がアリカ姫の代わりに罪を被る、という手段もあったが、それはしなかった。

俺の大戦での目的は「英雄となり賞金を取り消すこと」。折角ガトウが頑張ってくれて目標を達成できたのに、振り出しに戻っては意味が無い。

なにより自分のことを第一に考えず、自身の願望を無視してまで他人を助ける、なんてのは「誇りある悪」にとってはタブーだ。自分の心を偽ってはいけない。

ちなみに何故俺だけなのかというと、本来ならテオが全員を匿ってくれるはずだった。けど紅き翼の皆は「立派な魔法使い」としての仕事がたくさん入っているらしかったから俺だけ残ったのだ。

タカミチも誘ったけど、ガトウについて行くって言ってた。くれぐれも煙草は吸うなよ。

今もテオの城に居るのは、出ていこうとしたらテオに「遊び相手がなくなるのは寂しい」と涙目で言われ、出るに出れなくなっただけだ。居心地はいいから嬉しいんだけどね

城の生活で最初のうちはメイドさんにサイン求められたり、メイドさんにビビられたり、メイドさんに萌えたりとなかなか溶け込めなかったが最近は大分落ち着いてきた。

「肩車するのじゃ〜」

「肩車好きだねえ、つーかジャックは？」

「…？　なんでそこでジャックの名前が出るのじゃ？」

あれ？原作だとジャック×テオじゃなかったっけ？

もしかしてミスってジャックのフラグ折っちゃった？

あの筋肉ダルマのことだから「紅き翼」で唯一結ばれないキャラになるかもしれん……矯正せねば。

え？アル？あれは別次元のものだから除外。

「なあなあ、肩車ならジャックとかどーなの？アイツ俺より背高いし。」

「…シンリーは妾を肩に乗せるのが嫌なのか？」ウルウル

ぐはあっ！

こ…これは上目遣い&涙目の禁断コンボ！
体力10割削られただど！？

「い、いや…」

「…妾が嫌いなのか？」

もうやめて！　シンリーのライフは0よ！

「…大丈夫、嫌いじゃない」

チクシヨー！ すまんジャック！

言って肩車をする。テオの機嫌は元に戻ったようだ。

「うむ！それでいいのじゃ！」

「しかしあれだな、テオがそこまで俺のこと気に入ってるなんて意外。」

「き、気に入ってなんかおらんわ！／＼／」

「ツンデレですねわかります。」

「違うと言っておろーがあ！」

テオが真っ赤になって否定してくる。

ウフフ、かわいいなあ

「（まったく、シンリーは妾の気持ちをわかっているのかのう）そんなことよりアリカのことじゃ！どつするつもりじゃ？」

「別にどうもしないよ？そーゆーのは王子様の役目でしょ、ナギの見せ場取っても悪いじゃん？」

「（妾にとつての王子様はシンリーじゃがな／＼）むう…それも
そうじゃな」

…？ 今の話で顔赤くする要素あったか？
まあ、いいか

そして処刑十日前、俺がナギ達「立派な魔法使い」の仕事を手伝っている最中にクルトから通信が入り、アリカ姫の処刑が十日後まで迫っていることを伝えられた。
今、クルトがナギと言い争っている。

「好きな女の一人も救えず何が英雄ですか！ 彼女を救いヤツらを
告発し真実を明らかにせねば！ …… ナギッ！」

「うっせーぞヤクルト。ナギにはナギなりの考えがある。そーだろ
？」

「……………」

「誰がヤクルトですか！ くっ…見損ないましたよナギッ！ あな
たの力と名声があればもっと大きく世界に…」ブツッ

乳酸菌小僧の通信を切る。アイツ頭堅すぎだし小生意気で腹立つんだよ。

「だけどクルト…今日また一人の命を救えたよ。」

ナギの声がむなしく響いた

〓十日後

今日はアリカ「女王」の処刑の日

俺は少し離れたところから遠視の魔術を使って処刑台のあたりを見ている。

アリカ姫が兵に背中を押されそうになる

「触れるな下郎」

あのセリフ俺にも言ってくれんかな…

.....

録画が終わった。

「よおーっし、こんなモンだろ」

ジャックが元老院の一人の頭を掴み、言う

「録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは「なかった」ことになる。わかるな？」

「きつ貴様は……」

「ぬんっ」「バガンツ

ジャックが鎧を砕いて姿を現す。なんで半裸？

「千の刃」ジャック・ラカン!？」

むしろジャック・裸漢じゃね？

「近衛詠春！ アルビレオ・イマ！ ガトウ！」

ガトウだけ苗字ねえwwwまあ長いからな

え？俺は行かないのかつて？

ガトウに止められてるからね。元老院皆殺しにしてえ、つて呟いた
だけなのに……

ちなみに俺は認識阻害魔法で周りの連中には石ころにしか見られて
ない。

変装とかナンセンスすぎwww鎧暑いし

アルは「そんな強力な認識阻害は貴方にしか使えませんよ……」とか
言ってたけど

なんか元老院の一人が「馬鹿め！ たった4人か！」みたいなことを
言ってる。自分で死亡フラグ立ててる時点で三流だよな。
そんなんで英雄に勝てるわけないじゃん

……………

精鋭部隊（笑）が蹂躪されたあたりでナギとアリカ姫がキスした。

石ころになってるから気づいてないんだろっけど俺の目の前でラブ
臭まき散らさないでくんない？

なんかムラムラしてきたんだけど

認識障害を解いてジト目で睨んでみる

「……………」ジー

「……………」／／／「」

二人の顔が真っ赤になる。レアだ。

「……………」フン、事後処理があるから行くぞ。「」

この時の俺の顔はかなり不機嫌に見えたらしい。

けどロマンチックだったな……………雰囲気壊さない方が良かったかな？

「着いたぞ。」

「けっこつ時間かったな。」

「けっ、だから空飛んで行けば良かったんだよ。」

「風景を見ながら行くのが旅行の醍醐味というものですよ、ジャック。」

「風情の理解できん馬鹿は放っておいて、早く案内せい。」

上から詠春、ナギ、ジャック、アル、アリカである。

いま俺達「紅き翼」とアリカ&アスナは京都に旅行に来ている。乳酸菌小僧はもちろんいない。

ナギが前に約束していた、「アリカに京都を案内する」ことを実行したわけだ。

「けど俺達も来てよかったの？ てっきり二人っきりでデートだと思ってた。」

「気にすんな、オレ達の仲だろ？ それに別行動で二人きりにもなるしな。」

ふーん、そんなもんか

つーかあれだな、コイツらイチャイチャしすぎ。

今も甘味処でアリカがナギの口に着いたあんこを取ってあげてる。
ああ妬ましい！

タカミチも苦笑いしてるよ、アスナはなんか羨ましがってるけど…

そんなことを思いながら団子をやけ食いしていると、

「……………ん？」

「え？」

……………あれ？なんか幻覚が

「ジャック、俺あの二人のオーラにあてられておかしくなってるみたいだ。一発殴ってくんない？」

「フン！」「ブンッ

ドンガラガッシャーン！

躊躇なしにだいぶ本気で殴られた。お前もストレス溜まってたんだね、わかるよ…

「シ、シンリー!?!」

幻覚じゃなかったみたい。駆け寄ってくる気配がする。

「おお、エヴァ久しぶり〜。」

「久しぶりなんてもんじゃない!寂しかったんだぞ!」

おおう、今日はデレモードですね。

軽く抱きしめてナデナデしてやったら落ち着いたようだ。

「…で、なんでお前が京都にいる?」

「仲間と一緒に旅行中なんだよ、エヴァこそなんで?」

「私はいま、京都の郊外に住んでるからな。」

そーなのかー

「シンリーさん、その綺麗な方は誰ですか？」

タカミチがエヴァをチラ見しながら頬を赤くしている。お前にはやらんぞ！

まあ幻術魔法使ってる19歳エヴァはアリカと同じくらい綺麗だからな。

「ああ、前に話したじゃん。俺のパートナー。」

「パートナーって…あの「闇の福音」の!?!？」

驚く詠春

「おう、んでエヴァ。こっちが仲間の「紅き翼」の面々だ。よろしくやってくれ。」

「ふむ…その名前だけは聞いてことがあるな。英雄のいるチームだったか。まあ、よろしく頼む。」

その後は「紅き翼」の皆もエヴァと打ち解けて、一緒に京都観光を楽しんだ。

詠春の実家に泊まってからは、幻術魔法を解いたエヴァのことで一騒動あった。

タカミチがショックを受け、俺がジャックに哀れみの目で見られ、ジャックが俺にボコられ、詠春が仲裁に入り、アルと握手した。

ガトウは空気だった。

そして次の日の夜

「あれなに？」

遠くに光の巨人が見える。
なにあれアダム？

「リョウメンスクナノカミだ。どうやら封印が解けたらしい。」

「ヒューー　でかいねえ。」

「久々に倒し甲斐ある敵だぜ。」

「そーかあ？見た目よか弱そうだけど。」

「このチート共は…」

詠春を無視し、現場に向かう。

「あり？ エヴァも来たの？」

「ああ、英雄の力も見ておきたいいな。」

紅き翼に加えて闇の福音とか過剰戦力にも程があるだろ…

……

「千の雷！」

「斬艦剣！」

「エクスカリバー！」

余裕でスクナ撃沈。弱すぎじゃね？

「んー、なんか物足りないなあ。」

「じゃあバトロウゼシンリー。俺はまだテメエに一撃入れてねえからな。」

「なんか懐かしいなソレ。」

完全に忘れてたわ

「おつ、喧嘩か？ オレも混ぜろよ！」

不完全燃焼だったから三人で喧嘩して遊んだ。
もちろん二人ともボコった。

「デタラメすぎる……」

「私はシンリーでもう慣れたよ。」

「しかしこのメンツだと案外、世界征服も可能やもしれませんね。」

「「「……………」」」

本当に出来そうで困る

その後ボロボロのナギを抱えて帰ったらアリカに殴られた。
ジャックが「俺の『願い』って…」とか言ってるなだれてた。ギヤ
グ補正って恐ろしい

やっぱりガトウは空気だった

17話「ごひ」「強いものが正義だ!」「というわけで修行します。修行編その二」

累計

PV:315,000アクセス

ユニーク:35,000人

現在こんな感じ。

これからもよろしくお願いします。

京都から帰る日、ナギが聞いてきた

「シンリーはこれからどうすんだ?」

「俺か? 俺はしばらくテオんとこに居候して修行するつもり。」

「修行? そんなん毎日してたじゃん。」

「そーゆーのじゃなく本格的なのだよ。あの戦いで自分の力不足を感じたからねえ…」

「シンリー、それ本気で言ってるのか?」

エヴァが胡散臭げに聞いてくる。

「ああ、敵に超強いヤツがいてな…ナギがいなけりゃ負けてた。」

「…はあ!? それ本当か?」

「事実ですよ。私も目を疑いましたけどね。」

「勝ったときも両腕と顔右半分が無くなってたからなあ。」

「…にわかには信じられん話だが……」

「まあそういうことであつちに修行しに行くよ。あとエヴアのこと
だけど賞金の取り消しの目処が立つたら連絡する。」

「わかった。今度は早く帰ってこいよ？」

「それじゃ修行の意味なくね？」

殴られた。なんで？

「ハハ…まあここでお別れといくか。」

「その前に記念写真撮ろうぜ！あのときよりいろいろ増えたからな。」

「それはいい案じゃな。」

……

「いい感じに撮れましたね。」

「どうする？ あの写真みたく隠れ家に飾っておくか？」

「それは駄目じゃね？ エヴァやアリカみたいなイケナイもんも写ってるし…」

「わいせつ物みたいな言い方するなあ！」

美女二人のダブルビント！ シンリーに大ダメージ！
なんか昨日から殴られてはっかな気がする……

「じゃあ今度こそお別れだな！」

「嫁と仲良くな、詠春。」

「ああ、お前らも元気だな。」

「「「「おかえりなさいませ、シンリー様。「「「「

テオの城に帰省。なんか最近ここが俺んちみたいになってきているのは気のせい？

「帰ってくるのが遅いぞシンリー！（寂しかったのじゃ）」

テオの部屋に行くと肩に飛び乗られた。

「テオ、いきなりで悪いけど地下室借りていい？ 何年か引き籠もるから」

ヒモ&引き籠もりとかwww

……なんか鬱になってきた。死のう。

「なんじゃいきなり？」

「修行するから安全な場所が欲しいんだよね、別荘使うから。」

「（そんなことをすればしばらく会えなくなってしまうでないか！）駄目じゃ！そもそもシンリーに修行なんて必要なかろう！」

「いやいや、もしまた造物主みたいなのが出てきたら守れるもんも守れないっしょ？」

エヴァとかね

「（守るじゃと！？まさか妾のことを！？）し…仕方ないのう／＼、城の者には言っておくから地下室は存分に使うがよい。じゃがその前に妾と遊ぶのじゃ。」

しばらくテオと遊んでいると

コンコン、ガチャ

「テオドラ様、シンリー様。夕食の準備が整いました。」

「わかった、少し経ったら食堂へ行くわ。」

「さがつてよいぞ。」

ペコリ、バタン

召使いは一礼して去って行った

「お前の切り替えウケるんだけどWWW」

「シンリーもな。」

なんだこのカリスマ（偽）

現在別荘内で修行中

カッコいい修行の定番、感謝の正拳突き一万本の最中である。理由は、

「やっべ、念能力のこと忘れてた。」

そう、最初に神様に貰った能力の一つである念能力のことをすっかり忘れていたのだ。

そして念能力の具体的な作り方がわからなかったので「とりあえず修行すればでるだろ。」ということまで今に至る。

全てに感謝、なんてのは「誇りある悪」の柄じゃないと思い、造物主との戦いを思い出し強い敵との出会いや戦争に参加できたことに感謝しながらひたすら拳を打った。

2時間で終わった。

「もともと音速超えてるからなあ、もつと増やすか。」

手を合わせ、打つ。これをただひたすらに繰り返した。

感謝の正拳突き回数は日に日に増えていき、手をまわし合わせる動作はもはや目視できぬ速さとなっていた。

正拳突きの回数が一日50万回に達したとき、異変は起きた。

「なあにこれえ？」

なんかでた。

百式観音かと思っただら違った。というか見た目が全然違う。

赤黒い色に修羅のような顔、体躯。そして百式観音よりも数は少ないが太く力強い無数の腕。下半身はなく、上半身だけが浮き出ている。

慈悲も神々しさもない。あるのは威圧感とかだけだ。

「どつしてこうなった…」

あれか？俺がバトルジャンキーだからか？それとも感謝する対象を間違っただからか？

…後者が可能性高いな

とりあえず『闘神』^{イन्द्रラ}と名付け、その後も正拳突きは続けた。

「久しぶりだな、ナギ。」

「ああ、シンリーもな。」

「フオッフオッフオ、お主らがあの元賞金首の二人かのう？」

「シンリー、このぬらりひよんは誰だ？」

「それは俺も聞きたい。ナギ？」

「この爺さんは近衛近衛門つつて詠春の義理父だ。んでここ、麻帆良の学園長であり、関東魔法協会の長だ。」

「言う順番が逆じゃないかのう……」

「細かいこと気にしてたらハゲるぜ？」

もうハゲてんだろ

「ごほん！ …で用件はエヴァンジェリン・A・K・「47!」…
マクダウエルの長期監視と奉仕による罪の取り消しじゃな？」

デフォルトでスルースキル所持だと！
麻帆良のぬらりひよんは化け物か！

ぬらりひよんの時点でどう考えても化け物ですね、本当に（ry

「ああ、それで合っている。」

エヴァにもスルーされた。みんな耐性がついてきたようでリアクシ
ョンが最近薄いよ…

「長期監視の期限は15年、奉仕の内容はここ麻帆良の警備、あと
一応魔力をある程度封印するがいいかの？」

「まあ妥当なところだな。いいだろう。」

「エヴァの見た目なら案外学生でも通じるんじゃないの？ ププッ。

「俺もエヴァの学生服姿見てみたい。」

「だれがそんなことするかあ！」

「逆にナギの方はだいぶ大人になったよな。頭は残念なままだけど。」

「魔法の方もだいぶ強くなったぜ？ いっちょやるか？」

「クク、では俺の修行の成果を見せてやろう。」

「麻帆良の外でやってくれんかのう…」

その後じじいがあらかじめ作っていたエヴァの家に行き、地下室にエヴァの別荘を置いてその中で戦った。

『闘神』で軽くボコつたらすぐ気絶した。
ふふ、みんな驚いてる。

「なんだそれは？」

「『闘神』って呼んでる。修行したらなんか出てきた。」

「…ナギがこんなあっさり…化け物じゃのう。」

真祖ですから

「まあこれでエヴァのことも解決したし、また魔法世界に戻って修行するよ。15年後くらいに戻ってくるから。」

「まだ強くなるつもりなのかお前は……」

「男が強くなるのに理由なんかいらぬのさ！　ってことでグッバイ！」

影の転移魔法を使って逃げた。

長くいるとそのままズルズル引きずるからね。

……

「「「「おかえりなさいませ、シンリー様。「「「「」

「帰ってくるのが遅いぞシンリー！（寂しかったのじゃ）」

「ねえ、これなんてデジャヴ？」

心の声まで再現されてるよ？

あれ？心の声ってなんだ？

「まあいいや、ただいま。」

「うむ、お帰りじゃ、シンリー。」

10年後

「そうか、わかったぞ！」

真実はいつも一つ！

「なにがわかったのじゃ？」

あの頃より大きくなったテオが聞いてくる。

最近テオの成長が著しい。特に胸とか。
この容姿で未だに肩車をせがんでくるから始末に負えない。主に俺の息子が。

「俺に足りないものがわかったんだ。」

「（妾は今のシンリーで充分すぎるがの）シンリーに足りんもの？」

首を傾げて疑問顔になる。テラカワユスwwwお持ち帰りしてえwww

「今の俺に足りないもの…ズバリそれは下僕だ！」

「（下僕？従者のことか！？まさか妾と仮契約を！？）だ、駄目じやシンリー！ 妾にも立場というものが…」

「一つことでドラゴン倒してくる！ 留守中はまかせた！」

「それにお互いの気持ちというものも…え？ ドラゴン？」

「りゅうのもんしょう持って待つてるよ神龍！ 動き出した俺の熱いパトスは誰にも止められないぜえー！」

なんか真っ赤になってブツブツ呟いてたテオを置き去りにして城を出た。

五ヶ月後

「ただいま」

「うわっ！ シンリー何じゃそれは！？」

テオの城にドラゴンに乗って帰還。

とても爽快だ。

「倒して従えた。聞き分けのいい子でよかったよ。」

「ってそれアルビレオのどこるか最上位のワイバーンではないか！」

倒すのわりと苦労したからねえ

ちなみにワイバーンって四本足で前足が翼と一体化してる奴のことをいうらしい

「名前はティガだ。」

絶対強者にちなんでみた。

色黒いし見た目は翼が腕とくっついてる以外はミラボレアスみたい

だけど

「そんなの聞いとらんわ！ どこにそんなん飼う気じゃ！」

「ああ、その点は大丈夫。ほら。」

ティガを無限宝庫に収納する。

中には食べ物もたくさん仕舞ってあるからしばらくは大丈夫だろ。

「どう？ なかなかのドラゴンだと思うんだけど」

「もうお主なんでもアリじゃな。」

そんなことないぜ？ ザ・ワールドとかは流石に出来んし。

あつ、でも空間を指定すれば可能かも。時空間魔法の応用で。

そんな感じで14年が過ぎた。

17話 ごひ「強いものが正義だー」というわけで修行します。修行編その二

テオが救われない件

18話 銀〇の作者ってスゲーよな（前書き）

長いタイトル毎週考えてるんだもん

あんま長くないタイトルだけど考えるのが面倒になってきたよ……

18話 銀○の作者ってスゲーよな

ガチャ

「ただいま。」

「どなたですか？」

「…どなたですか？」

「いえ、こちらが聞いているのですが…」

14年ぶりにエヴァの家に来たら知らない子が出迎えていた。

なにこの子？

「おお、シンリーか。」

「あ、エヴァ久しぶり。てゆうかこの子は？」

14年ぶりの再会を「久しぶり」で済ませるのが真祖クオリティー

「ん？ ああ、茶々丸のことか。ロボット工学の連中から貰った私の従者だ。」

「絡繰茶々丸です、よろしく願いします。」

ぺこりと礼をしてくる。なるほど彼女が茶々丸か。道理で機械音がしてるわけだ。

「ああ、よろしく。シンリー・T・カーズヴェルトだ。」

「マスターとはどういった関係で？」

「^{ラマン}恋人だ。」

「ちよっ…」

「恋人の方ですか、わかりました。」

「…ふん。何年も放っておいて何が恋人か。」

エヴァが拗ねたように言う。ここは真面目にフォローした方がいいか？

「悪かったって、これからはどこにも行かないからさ、一緒に住もうっ。」

「…ベッドは一つしかないからな、今日はソファで寝るよ。」

「え？ 一緒のベッドじゃないの？」

顔真っ赤のエヴァに殴られた。デリカシー無くてごめんなさい。

「まあいい、それでどうするつもりだ？」

「どつするって？」

「今日からのことだよ、何もせずニート生活するつもりか？」

「それも魅力的だけどねえ、ここの警備員やるうと思ってるよ。あと教師。」

「警備員はともかく教師？ お前がか？」

「近々この麻帆良にナギの息子が教師としてやってくる。そいつの近くにいれば色々楽しいことが起こると思わない？」

「…奴の息子ならありえるな、しかし確かまだ9才くらいではなかつたか？色々と問題が…」

「あのハツラツ爺さんがなんとかするでしょ。」

「それもそうか」

「んでさ、エヴァ。学生やらない？」

「…なんでそうなる?」

「や、エヴァってこういう経験ないでしょ? たまには正の道もい
いもんヨ? それにエヴァの学生服姿見たいし」

「最後が本音な気がするがまあいいだろう。しかし小等部は御免だ
ぞ?」

「今年からタカミチが担任の中等部の2-Aなんてどう?」

「なるほど、それがいいな。」

「じゃ、あのジジイに話つけてくる。タカミチとも会いたいしね。」

「いつてらっしゃいませ、シンリー様」

「ああ、気をつけていけよ。」

俺にそのセリフ言うか?

……

Bannon!

ドアを蹴り開け、部屋の中にいた男に水鉄砲を向けて叫ぶ

「騒ぐな！大人しくしろ！今すぐこのバッグにありったけのお菓子を詰める！」

「……………」

「……………」

「…何をしてるんですか？ シンリーさん」

「ハロウインの行事を銀行強盗風にやってみた。」

実際ハロウインの日に駄菓子屋でこれやったら面白いそうだな

「ハハ…………相変わらず無駄にエネルギーシユですね。」

「しかし…老けたなタカミチ。ガトウに似てきたぞ。」

「いろいろ苦勞事がありましたね…………ところで何の用件ですか？」

「え？ さっきのがやりたかったただけだよ？」

「……………」

「安心しろ、冗談だ。だからそんな目で見るな。」

男二人に見つめられてもね……

「ふう…で、用件は何じゃ？」

「喜べぬらりひょん。俺様がこの麻帆良で働いてやる。」

「ほほ、それは頼もしいの。して警備の仕事かの？」

「それと教師だ。」

「ほ？」

二人が「え？なに言ってるのこいつ？」みたいな目で見てくる

「あとエヴァも学生として入学するぞ。クラスは今年からタカミチが担任の2-Aが望ましい。俺もその副担任で。」

「ちよっ、ちよっと待って下さいシンリーさん。いったい何を企んでいるんです？」

「人聞きが悪いぜタカミチ。ジジイは大体わかってんでしょ？」

「ネギ君のことかの？」

「おっ。」

「…なるほどの、あいわかった。教師の方は数学あたりでいいかのう？」

「いいよ、ちなみにネギの方は英雄ってことはバラさない方向でいいからな。認識障害もかけてるから特に注意することは無いけど。」

「さすがに名前くらいは変えたほうがいいんじゃないですか？」

名前かあ…

「じゃあ…シンジ・T・ガハラで、愛称がシンリーでどうよ？」

まさかの真名登場。覚えてて良かった

「いいんじゃないですか？ 呼び方が変わらないのも魅力的ですし。」

「あ、あとタカミチ。さんは要らんぞ、敬語も。上司で見た目年上なタカミチに敬語使われたら変に思われるだろ。」

「そ、そうですか？ じゃあ……し、シンリー。」

「誰にタメ口きいてやがる。」

「ええ!？」

「嘘だ。よろしくねタカミチ。」

「あ、ああ…よろしくシンリー。」

握手する。

こいつ手の平ゴツゴツしてる。鍛練を怠らなかった証拠だな、いい子に育ってお兄さん嬉しいです。

「ところでタカミチ、そのポケットにあるものは？」

「く、薬タバコだよ！煙草は吸ってないから大丈夫！」

ふうん、ならいいけどね。

「教師の方は来月の新学期からやるとして警備員の方は今日顔合わせをしたほうがいいからの、夜9時に世界樹広場に来てもらうぞい。英雄の戦いも見せてやりたいしの。」

「久しぶりに稽古頼むよ、シンリー。」

「ハハ、いつちょ揉んでやるよ。」

タカミチとか、楽しみだねえ。

……

「えー、皆に集まってもらったのはほかでもない、新しい警備員の顔合わせのためじゃ。そしてその警備員の名は…驚くでないぞ？かの英雄、シンリー・T・カーズヴェルトじゃ。事情により表ではシンジ・T・ガハラと名乗っておるがの。」

他の警備員達が騒ぎ始める。

「出てきてよいぞ。」

奥のほうから姿を見せ、警備員達の前に立つ。

「よろしく〜」

初対面なので柔らかい態度で接する。
笑顔もバツチリだぜ！

「なお今からデモンストレーションとして彼にはタカミチ君と戦ってもらおう。…タカミチ君。」

「はい。」

タカミチが俺の前に立ち、周りの人達が退いていく。

「じゃあお手柔らかに頼むよ。」

「タカミチは全力で来いよ？ お前の力も見たいいな。」

タカミチが距離をとり、咸卦法を発動させ手をポケットに入れる。

俺とタカミチの間に緊張が走る。

先にタカミチが動く。豪殺・居合拳の連発だ。

なんか居合拳が当たった地面が軽くクレーターになってる。強くなつたねえ。

それらを紙一重で避けながら徐々に距離を詰めていく。

そして居合拳の使えぬ距離まで近づくとタカミチもポケットから手を出し応戦してきた。

それを翻子拳で潰していく。

「ホント強くなったねえ、タカミチ。」

「ハハ、でもまだまだだよ。これじゃ英雄の足元にも及ばない。」

「それでもだよ。魔法が使えず才能もない、そんな凡人が努力だけでここまで来たんだ。それは誇ってもいい。」

手を回し合わせ、祈りのポーズをとる。

「そんなお前にご褒美だ。見せてやろう、究極の武の一を。」

『闘神・一ノ掌』

手を突き出す。ただそれだけだが、それは何度となく繰り返し使われ、究極まで鍛練された突き。

周りから見れば虚空から見えない衝撃が生じたように見えただろうが、タカミチにはちゃんと見えただろうか？

タカミチが吹き飛ばされ試合終了。

その日は解散になり、明日から勤務となった。

エヴァと帰宅し現在ソファアでエヴァの隣に座り、茶々丸の煎れた紅茶を飲んで一息ついている。

「お、うめえ。」

「茶々丸は万能だからな。」

「ありがとうございます。」

「しかしいいねえ、この生活も。日々をまったり過ごせるって素敵だねえ。」

「むしろ今まではスパイスに欠ける感じもしたがな。まあシンリーも来たわけだしそれもいいか。」

「おお、クールにデレますねエヴァさん。」

「……………」

無言で肩に寄り掛かってくるエヴァ。こーゆーやり取りも久しぶりだな

ん？ エヴァがウトウトし始めたな

「眠いのか？」

「ん……………」

「なら寝てもいいぞ。後でベッドに運んでやるから。」

「ん…そうする……」

エヴァはそのまま寝てしまったのでベッドに運んでおいた。

フフフ、エヴァの寝顔かわいいなあ〜

「……………」

こっそりエヴァのベッドに入って一緒に寝た。
まあ前もこんなことあったし大丈夫だろ！

……………

朝、エヴァのビンタで起きた。

清々しい朝だなあ、ハハハ

「おはようござい……どうなさいましたか？ マスター。」

「な、なんでもないっ！／＼／＼（普通に言えば一緒に寝てやるのに

…）」

赤い顔で下に降りていくエヴァ

「シンリー様も、朝食が出来たので一階に降りてきて下さい。」

「ん、ああ」

朝食はトーストでした。イチゴジャムうめえ

「シンリーはこれからの予定とかあるのか？」

食後の紅茶を堪能中にエヴァが聞いてきた

「いんや、来月の教師の仕事始まるまでは家でくつろいでるよ。」

「そうか。しかし準備とかはしなくていいのか？」

「全部タカミチが揃えてくれるって。スーツくらいは自分で用意するけど。」

「スーツか、ふむ……ではスーツは私が仕立ててやるっ。」

「いいの？」

「人形の服を作るついでだ。そのくらいならすぐにはできるだろう。」

そんな感じで話していると

「ん？だれか来たみたいだぞ。」

「茶々丸」

「はい」

茶々丸が客を連れてきた。

髪を片結いにして肩に竹刀袋を持った子だ。あれ刹那か？昨日も見た気がする。

「あなたがシンリーさんですね？」

「え？」

「え？」

「……………」

「……………」
「……いつがシンリーだ。で、シンリーに何か用か？」

エヴァにほっぺ抓られた。痛い。

「あ、ああ、えっと…単刀直入に私を弟子にしてください！」

「単刀直入にいやです。」

「な、何故です!？」

「っーか君だれ？」

「こ、これは失礼を。桜咲刹那と申します。ここ麻帆良の警備員兼学生をしています。」

ホントに失礼だよ。てゅーかやっぱり刹那か

「それで、何故ダメなのですか？」

「めんどいから。以上。」

「そ、そんな…」

「まあそんなこと言わずに見てやったらどうだ？ 警備員として組んで行動した時もあったが、そいつはなかなか見込みがあるぞ？」

「他人事だと思って……というか何で刹那は俺を師匠にしようと思っただの？」

「先日の顔合わせの際、タカミチ教員との模擬戦でのあの洗練された動き。アレを見て師事を頼むのは貴方しかないと思いました。」

「ふーん、まあエヴァも言ってることだし稽古くらいはつけてやるよ。週二で火曜の朝と水曜の放課後でいい？場所はここに来ること。」

ジャックくん時みたいに実践形式でやるか、そっちのが楽し。

「あ…はい！　ありがとうございます！」

そう言って刹那は帰っていった。

一ヶ月後、エヴァの仕立てた黒のスーツを来て21Aに入った。

タカミチが紹介してくれたあと、朝倉にインタビューされたり刹那に問い詰められたり好きな娘を聞かれたり大変だった。

最後のはエヴァと即答してやった。

帰ったら真っ赤なエヴァに殴られた。

アスナ大きくなってたなあ……

18話 銀〇の作者ってスゲーよな（後書き）

全く関係ないけど、「続・ぶるらじ」が放送開始したよ！
かなり面白いで格ゲー知識ある人、そうでない人も、暇があったら是非見てみて下さい

自分は一期から見たりする

19話

やっと原作開始。俺的にくまパンは……ないわ

今日はネギ・スプリングフィールドが赴任してくる日。
今は学園長室で茶を飲んでいる。

「つーか十歳の子供が教師やるのを認める学園ってどうなの？」

「フオツフオツフオ、まあそんなん今さらじゃろ。」

「この糞爺は……しかしガンドルあたりが五月蠅かったんじゃないか？ 英雄の息子といえど十歳。油断も隙もあるから魔法がバレル可能性も高い」

「彼らは「正義の魔法使い」を盲信し過ぎじゃからのう、ナギの息子ともあれば不安より期待の方が大きいのじゃよ」

「そんなのは逆に重しにしなければならないもんだけどねえ……周りの期待に応えれず英雄の息子がプレッシャーに潰れたらアイツらはなんと思うんだろうね？ 自分の行為を悔い改めるのか、ただ、使えない奴だったと切り捨てるのか……まあカンケーないか」

「……お、どうやら来たようじゃ」

窓を覗くとアスナが一人の赤毛の子供に突っ掛かっていた。

「トラブルかのう？」

「まあタカミチも来たしなんとかなんだろ。」

バリーン！

「くまパンじゃの」

「くまパンだな」

見なかったことにした

………

数分後

「学園長先生！ このガキが担任ってどういうことですか！？」

アスナがやってきた。木乃香とネギ少年も一緒だ。まあ当然の疑問だな。

「あ、シンリー先生。おはようや〜。」

「おう、おはよう。」

木乃香が普通に挨拶してきた。

俺は基本、生徒からシンリー先生と呼ばれている。最初の自己紹介のときに、シンリーが愛称だ、と言ったら朝倉が校内に広めてくれたからだ。

今ではあだ名みたいになっている。

「ネギ先生には2ーAの担任をしてもらうことになっておる。シンリー先生は変わらず副担任じゃが、タカミチ君には担任をやめてもらうことになるの。」

「ええ!?!」

そんなにショックかアスナ。

つーか中学生でオジコンって……ガトウの面影でも見てるのだろうか……でもアスナって確かナギ派じゃなかった?

ガスッ

考え事してたらジジイがハンマーで叩かれてた。
血い出てるぞひどいなもつとやね。

「なおサポートは副担任のシンリー先生や指導教員のしずな先生を紹介しよう、しずな君。」

「はい。」ガチャ

デデーン！

巨乳教師、しずなたん登場！

少年の顔が胸に当たってる。アンタわざとやってんだろソレ。

……

「あ、あの、シンリー先生でしたよね？」

廊下を移動中に話し掛けられた。

「本名は違うけど皆はそう呼んでるね。」

「あ、じゃあ僕も……」

「ただしネギ坊主、テーマは駄目だ。」

「ええ!？」

「冗談だ。ほい、これクラス名簿。」

「あ、どうも。」

なんだかんだでしつかりしてるよねえ……
だって9歳だよ9歳?

俺のその歳って言ったら小学校の体育のバスケットで、ボールを下から籠に入れようとして、失敗して跳ね返ってきたボールが顔に直撃してガチ泣きしてた時代だよ?

皆もこんな経験あるよね? え?ないって?
そんな馬鹿な……

馬鹿は俺ですなサーセンwww

まあ俺が何を言いたいかっていうと、

学園長バカ?

ついでにタカミチも

まだ精神が安定してない子供に教師させるとか狂ってると思えないね

いや、むしろそのための2-Aなのか?

龍宮や楓みたいな精神的にも力量的にも歳不相応に完成してる生徒がいるわけだし……タカミチはともかくあのジジイは何考えてるかサッパリだな

まあ俺にはどの道関係ないこと……でもないか
副担任の仕事増えなきゃいいなあ……

教室前に着いた。

「ど、ドキドキして来ました……」

「（うざっ）まあクラス名簿の方にタカミチが色々書き込んでたから参考になさい。俺からも一つだけ書いておいたから。」

「（いま最初に何か聞こえたけどなんだろう……）あ、ありがとう……
ざいます。」

名簿を見ながらドアに手をかける。が、手を止めて振り返って聞いてきた

「エヴァンジェリンさんの所に書いてある『俺の嫁』ってなんですか？」

「深く考えたら負けだ、少年」

.....

ネギの自己紹介も終わり、オジコンvsシヨタコンも鎮圧したところで授業が終わった。

現在タカミチと散歩中

「で、君から見てどうだったんだい？ ネギ君は」

「期待してたのとは真逆だな。あれじゃ内に溜め込むタイプの小賢しいただの餓鬼じゃないか」

まあ原作見たから知ってたけどね

「ハハハ、確かにね。彼はナギさんやシンリーとは真逆で物事を深く考えすぎるタイプの人間だからね」

「それは俺が単細胞バカってか？ ハハッ、燃やすぞ？」

「ち、違っ…僕が言いたいの思考タイプか直感タイプかってことだよ！」

「そっ？ ならいいけど。」

タカミチに向けていた右手を下げる

「しっかしあの馬鹿ナギとアリカの子でなんであんな性格になったんだろ。」

「それを言ったら学園長と木乃香ちゃんのことだって不可思議じゃないか。」

「あのジジイは人間かどうかがまず怪しいよ。」

あいつの頭蓋骨ヤバくね？ 病院の寝て体の断面図撮るヤツに頭入んないよね絶対

ウーーン……ガッ、ガッ、みたいな

「む、あれはネギ君に……アスナ君か？」

見ると二人が森の方に入っていくところだった。これってあのシーンだろ？ 色々まずくね？

「なにかあったのかな、見にいこうか。」

「ああ、何かあったら大変だからな」キリッ

決して俺は変態ではない。と信じたい

「おい、その二人。何やってるん……」

「あ……」

心のフィルムに焼き付けておこう。

いや、姫子ちゃんの成長記録としてだよ？

変態じゃないよ？

その日麻帆良に一人の女生徒の悲鳴が響き渡ったそうなの。

……

「シンリー、今すぐ教室に来て。」

エヴァからお誘いがきた

「夕日で茜色に染まった教室でイチャイチャか、いいシチュエーションじゃないか。」

「阿呆、いいからちゃんと来い。クラスの連中がぼーやの歓迎会をするそうだ。」

「なんだ告白じゃないのか。まあたらふく五月の肉まん食えるならいいか。」

五月の料理ってガチうまなんだよね、茶々丸のとはまた違った魅力があるというか。

.....

「」「」「よづこそ！ ネギ先生ーッ！」「」「」

パンパンパーン！
パンパーン

「うるせえ……」

「このクラスのテンションはいつも異常だな。」

同感です。毎日がフィーバー状態だよ。嫌いじゃないけどエヴァ、茶々丸と一緒に端っこに座って肉まん食ってる俺。むむ、超のものなかなか。そんな感じで飲み食いしてたら龍宮がコップ片手にやって来た。

「やあ、楽しんでるかい？」

「そこそこにな、さっきから舌鼓しか打ってないけど。にしても騒がしくなってきたな……新田が怒りに来てもおかしくないレベルだぞ、これ。」

「フフ、私もクラスの熱気から逃げて来たところだよ。シンリー先生、隣いいかい？ あとその肉まんも。」

「聞くまえに座っちゃダメじゃないか。」

「体が勝手に。」

「食べちゃダメじゃないか。」

「手が勝手に。」

なにこれ？ 親しまれてんのか嘗められてんのかわかんない。

「そうそう、そういえばクーフェイと楓が闘いたがっていたよ。なんでも刹那だけ闘っててズルい、だそうだ。」

「んなこと知らんがな。全くあの戦闘狂どもは……」

「それをお前が言うのか?」

「ほう? 先生は戦闘狂なのかい?」

「ちよつとエヴァ、マナたんに変な知識与えないだよ」

「マナたんはやめてくれないかい先生」

「じゃあタツツ」

「……ポ○モン?」

「ウパーかわいいよウパー」

「何を言ってるんだい先生。一番かわいいのはメタモンに決まっているだろう?」

「マスター、シンリー様と龍宮さんは何を言っているんですか?」

「お前は毒されてくれるなよ茶々丸……」

失礼な どくどく戦法はけっこう強いんだぞ

「ちなみにエヴァさんは何派なんだい？」

「……メノクラゲ」

「マジ！？」「」

……

「ところでタカミチ、アスナさんのことどう思ってる？」

なにやら読心の魔法を使ってる野菜少年。

それ違法だよ？

「っ！か頭に手を当てるとかタカミチに魔法バレバレだろ。そしてタカミチもいい加減アスナの気持ちに気付けよ！鈍感すぎだ！」

なんだこのカオスな教室

ネギとアスナが教室から出ていったあと、ようやく熱が収まってきた。後片付けになった。

「…ねえ朝倉。」

「どうかした？ シンリー先生」

「俺の時はこんなパーティー無かったよね？」

シン……………

エターナルフォースブリザード！ 空気は死ぬ

っ！かなんで空気凍ってんの？そんな怖い声出してないでしょ。

「あ…えつと……………」

「ねえ、なんで？地味に不愉快だよ？」

なんか言いづらそうにする朝倉、少し楽しくなってきたので追撃をかける俺、静まるクラスメート達。

なんで静まるか理解できないしていると、宮崎が小声で話しかけてきた。

「あのっ、シンリー先生！」

「(なに?)」

「(このパーティーを企画したのって……雪広さんなんです……)」

……なるほど理解した。この肉まんの費用とかも含めて諸々理解できた。

「雪広がネギ小僧追いかけて出て行ったから言うけどさあ……何であいつを委員長にしたの?」

私情多すぎじゃない?

21Aでその問いに答えられる者はいなかったという

……

歓迎会も終わり、現在自宅にて食事中。

俺とエヴァは座って食事をし、茶々丸は傍で控えている。

「まったく、騒がしい日だったな。」

「あの野菜小僧も期待ハズレだったな。ま、実際そこまで期待はしちゃいなかっただけだね。」

「だが見たかんじではサウザンドマスター譲りの馬鹿みたいが多い魔力はあつたようだがな。」

「俺と比べりゃ米粒みたいなもんだけどなwww」

「それはお前の魔力がありえんくらいでかいからだろうが！ 比較対象が間違っているわ！」

「ハハハ。んでどう？ じじいが言ってた野菜小僧の試練。手伝う気にはなつた？」

「私が悪役として一芝居打つヤツか？ まああれ程の才能を腐らせしておくのも勿体ないしな。いいだろう、なかなか面白くなりそうじゃないか。ククク。」

「悪っぽい笑い方だなあオイ。」

「クク、だつて私達は「誇りある悪」だろう？」

「フフ…」

「ククク…」

「「アーツハツハツハ！」」

「食べないなら食器をお下げしますが。」

「「「めんなさい。」」」

エヴァ家の食卓は平和であった

19話

やっと原作開始。俺的にくまパンは……ないわ（後書き）

俺「文才くれ」

神龍「ヤダ」

20話

サボタージュってイタリア料理にありそうな名前じゃね？（前書き

現在

PV:560,000アクセス

ユニーク:66,000人

あんまし改善できなかった

結論

本文を再構成してみたらプロローグ以外では逆に改悪になったので
変えませんでした。

これが生身の抹茶アイスの限界というわけか……otz

無駄に時間と労力だけ消費した気がする……

20話

サボタージュってイタリア料理にありそうな名前じゃね？

休み時間中、廊下で偶然刹那とエンカウントし一緒に歩いていると
犯罪現場を目撃した。

「なにあれ強姦？」

「私は2 - Aがそんな集団ではないと信じています……」

あんま信じる価値なくね？ つーか中学生でこの単語ってわかるも
んなの？

現在進行形で野菜小僧が脱がされ中。

302

「行動力が無駄にあるからいつかやるとは思っていたが、ついに2
- Aから犯罪者が出たか……」

「まだ未遂なので大丈夫かと、あとこれはホレ薬の効力と思われま
す。」

「ホレ薬とか……逆に野菜小僧が犯罪者だった訳か。つーか刹那さ
あ、なんで今日はそんなドライなわけ？」

「……………お嬢様が。」スッ

刹那が指をさした先には魔法薬の効果を受け、他の女子と一緒に野菜小僧を脱がしている木乃香がいた。

「これはどうするべきなのでしょう…」

「まあ放っとけばそのうち戻んだろ。」

渋る刹那を引きずって教室に戻っていった。

「シンリー殿。」

屋上でエヴァと茶々丸とで優雅にサボタージュしてたら楓がいきなり現れた。

いや、サボタージュしてたのはエヴァだよ？

じじいに俺を中等部二年生の数学のみ担当にさせたから時間は余る程あるのですよ。

「楓か、なんか用？」

「ネギ坊主の体育の授業で高等部ウルスラとトラブルが起こったでござる。シンリー殿は行かないでござるか？」

「行かない。あの餓鬼の担当ならあいつ自身がなんとかするっしょ。だから俺は優雅に紅茶を楽しむとするよ。フフフ。」

足を組んでカリスマっぱいを出してみる。

……死にたくなってきた

「とうかなんで屋上にテーブルとチェアがあるでござるか……」

「学園長に用意させた。ちなみに一般人不可侵の結界も張ってあるぞ。サボタージュの設備は万全だ。」

「働く気ゼロでござるな。」

「働きたくないでゴザル！ニンニンｗｗｗｗ」

ヒュン！

「うおっ！危ねっ！」

俺の頭目掛けてクナイが飛んできた。

「躊躇無しに得物投げないでくれる？ 普通なら死んでるよ？ ねえ？」

「シンリー殿なら避けれると信じていたでござるよ。」

ニコニコしながら言うんじゃない、胡散臭さMAXだぞオイ

「シンリー様、コートの方で2ーAとウルスラの方達がドッジボールで競っているようです。」

「ん？ あ、ホントだ。」

屋上からコートを覗くと、なんかウチのクラス連中がギヤースカ言ってるのが見えた。

「なぜだか知らんがぼーやも混じってるじゃないか。」

「大丈夫でござろうか？」

次の瞬間、ネギが魔法を使ってボールを飛ばし、ウルスラの女生徒の服を少林サッカーよろしく吹き飛ばした

む！黒のアダルティな下着だと！？

「ウホッ！ いいじゃないの！」

「口に出てます、シンリー様。」

「フン！」ズビシッ

「ぎゃあああ！ 眼が、眼があああ！」コロコロ

エヴァの目潰し！

こうかはばつぐんだ！

「授業中とは性格が全く違うでござるなあ。」

「マスター、嫉妬もそこまでに。」

「茶々丸、お前一度メンテに出てみるか？」

なんか三人が話してたけど痛くてそれどころじゃなかった。マジ痛い！

地面をのたうちまわってたら次第に痛みは引いてきた。

「ゆ、指が第二関節まで入った……」

「むしろなんでそれで生きてるのか不思議でござるな……」

「ん？ そういえば貴様には言ってなかったか。私達は吸血鬼でな、

生命力は人間より高いんだ。」

「吸血鬼……魔法のことは龍宮から聞いていたでござるが、そんな存在もいるのでござるか……ますますシンリー殿と闘ってみたくなつたでござる。」

「嫌でゴザル。やっと眼球が再生したとこだよ、なんかもう闘いつて気分じゃないし。」

「それは残念、では気が向いたら闘つてござる。」

「スパムのCM並にしつこいなお前。…あぁもうわかったよ。じゃあ気が向いたら2ーAの四天王まとめて相手してやるから。」

「ほう？ 四人同時に、とは随分と余裕でござるな。」

「余裕だもの。」

実際のいまの俺ならゼクト、ガトウを含めた全盛期の「紅き翼」相手でも『闘神』使えば勝てる気がする。
あくまで予想だけだ

「ふふ、ではその時を楽しみにしているでござるよ。」

にんにん、と呟いて楓は去っていった

「よかったのか？ あんな安請け合いして。」

「大丈夫でしょ。万が一にも負ける、なんてのはありえんし。」

「くく、それもそうか。」

紅茶を飲んで一息つく

「ふう……まあいっちょ揉んでやるぞ。」

「…本当に揉むなよ？」

「読心術……だと……」

「…フン！」シュッ

「甘い！」

ピュッ

「申し訳ありません、シンリー様」バシュッ

「何ッ…ひぎい！？」

「ナイスだ茶々丸。」

エヴァの目潰しを避けたら茶々丸からロケット目潰しが文字通り飛

「おはようシンリー、いい朝だね。」

「おう、おはようタカミチ。」

「うむ、おはよ。」いや、お前はいい「……冷たいのう……」

「眠いところ呼び出しやがって、なんの用？ 早く帰って寝たいんだけど。」

「今日はおぬし授業があるはずなんじゃがのう。」

「早く終わらして寝る。」

「ハハハ……そういえば目が半開きだね今日は。」

「いや、それは眼球痛めただけだ、んでなに？ 早く帰りたい。」

「（眼球を？というかサラッと酷いこと言うのう）まあそんなことより最近ネギ先生の調子はどうかの？」

「（シンリーの眼が充血してるのはなんでだろう……）彼がちゃんと先生できてるか心配でね、様子を聞きたいのさ。」

二人ともなんで俺の目を見るの？

正直キモいんだけど

「んー、まあちゃんと出来てんじゃない？ 生徒から嘗められてる

節はあるけど親しくはしてるし。」

「そうかい、それは良かった。」

「むしろ魔法使いとしてどうなのアイツ。赴任一日目でアスナに魔法バレルし、ホレ薬とか読心魔法とかの違法行為しまくりだし。一度お灸据えてやったほうがいいんじゃない？」

甘やかすとつけあがるよ？ あの餓鬼は

「フオフオフオ、その辺は見逃してやってくれんかのう？」

「……俺はお前にも怒ってるんだけどねえ。」

ちょっと殺気を飛ばして脅す

みるみる顔を青くするジジイ。いいざまだ

「シンリー、殺気まで飛ばすのはちょっと……」

「タカミチ、お前も甘やかしすぎだ。あの餓鬼には人や世界の汚れた部分を見せるべきだ。でないと絡め手で攻められたとき、容易く落ちる。」

「」「」

「それにあのアスナにだって魔法がバレちゃった。お前の甘さのせいでガトウの意思が無駄になりつつあるんだぞ？」

「いや……それについては、運命だと思ってるんだ。このまま彼女が魔法も知らずに生活していても、彼女の命を狙う輩は何時か出てくる。それよりだったら、あのナギさんの息子に託してみるのもいいかと思ってるね。」

……相変わらず甘い考えだなあ、タカミチ

殺気を霧散させる

「やつぱ甘いねえ、タカミチは。まあそういう考えも嫌いじゃないけどね。」

「とりあえずはこれで納得してくれるとありがたいんだけどね。」

「別にいいよ？ どの道俺にはカンケーないし。」

「（いざという時は協力してくれると信じているよ、シンリー）そうかい、ありがとう。」

「どっちにしろ甘やかしはいけないってことだよ、お前ら過保護すぎね。」

「ハハハ……」

「そのためにエヴァやお主に試練の依頼をしたのじゃからな。」

ホントにわかってんのかこいつら？

俺も試験に参加して野菜小僧怖がらせてやるのかな、楽しそうだし

「そうそう、完全に用件を忘れとったわい。期末試験のことじゃが
の、直接的には手を出さないで欲しいんじゃ。」

「例の課題とやらか？」

「フオフオフオ、話が早くて助かるの。」

普通に考えて「立派な魔法使い」の試験に教師とかバカバカしいよ
な、全然関係ないじゃん。
俺なら試験無視して独学で頑張るね。

「わかった。じゃあ授業あるし行くわ。」

その日は授業を早めに終わらして帰って寝た。

「今日のHRは勉強会にしたいと思います。次の期末テストはすぐそこまで来ています！」

その…実はうちのクラスが最下位脱出できないと大変なことになるので、みなさん頑張って勉強していきましょ〜！」

次の日のHRでネギ先生がこんなことを言い出した。

HRって副担任は別に出なくてもいいんだけど今日は色々あるからね。

フフ、原作を知っている俺にはわかるのですよ！

「はい！ 提案提案。」

「はい！ 桜子さん。」

「では！ お題は『英単語野球拳』がいいと思いまーす！！！」

おお〜！

クラスが盛り上がる。しかし俺のテンションはもっと上がっているのだよ！

「じゃあそれで行きましょう。」

今日だけは無知なこの子供先生に感謝だよ

「ちょっと、ネギあんた野球拳って何か知ってるの？ それに今日は何故かシンリー先生までいるし……」

「ほら、アスナもこっちこっち。」

アスナが桜子に引きずられていく。
そのデカイ英単語帳どっから出した？

熱気立つクラス、脱がされるバカレンジャー、カメラを構える俺。

くくく、俺のデジカメが火を噴くぜ！

しかし楓はノリノリだな。ポーズまでとってる。ちょっと注文してみるか

「楓、もつちよい腰を横に突き出してくんない？」

「じつでじつるか？」「クイツ

「いいよその調子！」「パシヤッ

「なんか今日のシンリー先生はおっさんに見えるです。」

「はにゃあああ！？ シンリー先生写真撮らないでよう！！！」

佐々木も顔赤くして可愛いねえ。

お兄さん興奮しちゃうよ？

「ってなんでシンリーさんが普通に写真撮ってんのよ！」

「アイヤー、あのカメラは破壊しなきゃいけないアルね。」

バレたか、クーフェイにカメラを壊されたくないのて退散だ

「ふはは！ 途中で気づかないバカが悪い！ ということてサラバだッ」バツ

盗んだバイクで走り出す！ 徒歩だけど！

「茶々丸、アレを使うネ。」

「はい、……範囲、固定。波長、周波数、設定完了。マイクロウエーブ照射。」

ポボンッ！

なん……だと……

教室から出ようとした時俺のデジカメが煙を立てて壊れた。何故！？
つーか今破壊音が二つあったような……

「フッフ、茶々丸の覗き・痴漢対策兵器は完璧ネ。」

「超、貴様……」

「申し訳ありません、シンリー様。」

「範囲と電化製品の種類を指定して壊すマイクロウエーブヨ、恐れ
いった力？ というわけで女の子を汚らわしい目で見ると先生にはお
仕置kガシッ」フ……フッフ「あ……朝倉？ どうしたネ？」

「よくも私のカメラを……！」

半泣きの朝倉と超が揉めてる間に戦線離脱。

くそっ……なかなかいいアングルの写真が撮れてたのに！

そのまま涙目で家まで走って帰る俺

その後帰ってきたエヴァにゴミを見るような目で見られた

快感だったので結果オーライとした

ガラツ「みんな席つけー。SHR始めるぞ〜。」

「シンリー先生！ ネギ先生とバカレンジャーが行方不明というのは本当ですよ!？」

朝っぱらから五月蠅いねえ

「もちつけ雪広。」

「これが落ち着いていられますかッ！」バン！

雪広ってこんな性格だっけ？

コイツはあの野菜小僧が関わるとキャラが変わるな

「安心しろ、ネギ先生とその他六名は学園長の計らいで別の場所で特別補習中だ。合宿も兼ねてるから期末テストの日までは帰ってこないけど気にすんな。」

「しかし！」

「あと今回の期末試験で21Aが最下位脱出できないとネギ先生が強制的にクビになるってのは事実だから。だからネギ先生が心配ならバカレンジャー達の成績を心配するより自分の勉強をすること。いい？」

正直どうでもいいけどね

雪広もその言葉で一応納得したのか、渋々席に座り、SHRが終わった。

「シンリーさん。」

「今度はお前か、刹那……」

「話しかけるなりそんな顔しないでくださいよ……」

「もうシヨタコンで充分疲れたもの。正直ウンザリしてる。」

「ウンザリしないでください！ ……それでお嬢様のことですが大丈夫でしょうか？」

「じゃあ見に行けばいいじゃない。」

「しかし……」

「その「お嬢様」の近くにいなくて失敗しちゃったのは刹那のせいでしょ？ 本来はお前の役目だったものを俺に押し付ける気？」

「！？ いえ……そんなつもりは」

「でもお前がやってるのはそういうことだよ？ 何があつたか知らんけどずっと傍にいて護衛してやればいいじゃん。」

ホントは知ってるけどな！

「……それでも私には、陰から護ることしか赦されないんです。」

おお！ なんと不器用な愛か！

「ふーん、そ。じゃあ今回は俺が見守ってやるから刹那は勉強し

るよ？ ポストバカレンジャーなんだから。あの野菜小僧に迷惑か
けたくないでしょ？」

「うっ……一応、努力はします。」

「じゃあ今回のテストでバカレンジャーの誰か一人にでも成績が劣
ってたら、放課後の模擬戦キツくするから。」

稽古と称したイジメが楽しくなってきた今日この頃
だって涙目で逃げ回る刹那が可愛いんだもん

「さ、更にあれが厳しくなるんですか!？」

「うむ、次はインフェルノブレイザー連射なんてどう?」

ぶるああああ！ みたいな

手加減はするよ？

「…べ、勉強頑張ります。」

「そう? じゃ頑張ってね。」

青い顔をして去る刹那を見送ってから考える

これからどうしょ？

刹那に木乃香のこと頼まれたけどジジイがいるから大丈夫だろうし……そういや麻帆良に来てからアイツにまだ会ってなかったな。

確か図書館島にいるはずだし丁度いい、久々に話でもしてくるか。ついでに新技の開発も手伝ってもらおう。

ケータイを取り出して電話する

「もしもし、ジジイいるか？」

『シンリー君かの？ そっちから電話をかけてくるなんて珍しいのう。』

「今から用件を言うからよく聞けよ。」

『わかったぞい。』

「俺はこれから図書館島に行く、んで旧友に会いに行く。」

『…どこでそれを知ったのかのう？』

「んなの魔力と気を探れば一発だ。んで新しい技の開発とかでそっちに泊まるかもしれない。」

『ふむふむ』

「その間の授業とHRはサボるから代理の先生よろしく。んじゃ！」

『ちよ、待…』ブツッ

担任がいなくて仕事増えててダルかったから丁度いいや。とりあえず帰ろ。

あ、エヴァにも連絡せんとな、いきなり消えると怒るだろうし。メールを茶々丸に送信。つーか茶々丸がケータイ持ってんの見たことないけどこのアドレスってどこの？ 茶々丸本体か？ あの耳のやつアンテナっぽいし

などと考えるうちに家到着。
開発に使いそうなものだけ『無限宝庫』に入れて図書館島に向かった。

20話

サボタージユってイタリア料理にありそうな名前じゃね？（後書き

友達のi-phoneのスカウター機能使って遊んだとき

俺「俺の戦闘力ナンボ？」

友達「えっと、4万！俺43万だから俺のかちー！」（数値うる覚え）

俺「ふっ……真の力を解放するときが来たようだな」スッ（メガネを外す俺）

i-phone「ピピッ！>戦闘力538万<」

俺&友達「……………」

コンタクトにするべきなのか……………？

21話 司書って仕事楽そう。準二一トじゃね？(前書き)

シンリーのミドルネームの意見が思った以上に集まらない……

面倒だからTのままでもいいかな？

21話

司書って仕事楽そう。準リーパーじゃね？

グルルルル……

「……ティガ」

グオオオオオオ！

……グルウ

「……何をしています？」

「いや、ワイバーン同士仲良くさせようと思って」

「というか何ですかその馬鹿げた魔力のワイバーンは？　ウチのが
怯えていますよ」

「俺のペットなんだからこん位じゃないとね。んでもって久しぶり、
アル」

「ええ、二十年ぶりです、シンリー」

学園地下、図書館島深部にて俺はかつての親友との再会を果たしていた。

「このドラゴンはどこで？」

「テオン所に居たとき、魔法世界にあるデカイ洞穴みたいなのにいたから倒して従えた。名前はティガだ」

「…このワイバーン、古龍・龍樹を超える力を持っていますね。これはジャックでも倒せませんよ。まったく貴方というチートは……」

「マジで？ そんなに強いのか？ どーりで手こずったわけだ」

苦戦はしなかったけど、やたらとタフで倒すのに時間かかったんだよね

「まあ久々に会ってお互い積もる話もあることですし、中に入りましょう。紅茶もお茶請けもありますよ」

「そうするか。よし、ティガ、お前は此処でソイツと遊んでる。いいね？」

グルウ

「よしよし、いい子だ」「ナデナデ」

ドラゴンが可愛く見える俺は末期なのだろうか

……

「広っ、これホントに地下？ 学園の地盤って大丈夫なの？」

「フッフ、そのへんは反重力魔法でバッチリですよ」

「なにそれこわい」

実際スゴイよコレ、なんかアトランティスって感じ。意味知らんけど

「シンリーはミルクティー派でしたね？」

「おう、さんきゅ。ズズズうまっ」

「茶葉も最高のものを取り寄せていますからね」

「いいなあ、最高のニート生活じゃない？ これ」

「失礼ですね、私だって仕事くらいはしていますよ?」

「どんな?」

「普段は魔法とは無関係な生徒が図書館島の奥に来ないように罫を仕掛けたりしています。地下3階からは魔法の本も少なからずありますからね」

「今明かされた衝撃の事実!」

「あれってコイツがやってたの?」

「確かトラップの中に刃物とかもあつた気がするんだが」

「死なないようにはしていますから大丈夫ですよ」

「死ぬ前まではいくんかい……てかむしろ罫のせいで探険部みたいに興味津々な生徒が増えてると思うのは俺だけ?」

「私は退屈しなくて満足ですがね、フフ」

「結局お前のお遊びじゃん……」

「まあ結論から言うと私はニートですね。否定のしようがありません。

これから私のことはクウネルとお呼びください。食って寝るの生活を繰り返す私にはお似合いの名前でしょう?」

「それ以前にお前が気に入ってるだけだろ？ 自虐的なこと言うなんてアルじゃないよ」

「バレましたか……まあその通りですので是非ともクウネルと呼んでください」

「じゃあイマ」

「……予想の斜め上を行かれましたね」

「二文字のほうがいやすいもの」

「……もう好きに呼んでください。本題に入りますが、今日来たのはネギ・スプリングフィールドと生徒達のことですね？」

「違うけど？」

「おや、そうなのですか？」

「それもあるっちゃあるけど本題は親友に久々に会いたかっただけ。あと新技の開発手伝って貰おうと思って」

「嬉しいことを言ってくれますね。それと新技ですか、シンリーのオリジナル技は派手なのが多いですから楽しみですね」

「ここって広いから試し撃ちくらいはしていいよね？」

「それなら下にいい場所がありますよ。移動しましょう。けど力は抑えてくださいね？ 貴方が全力でやれば大変なことになりますから」

失礼な、人を化け物みたいに

あつ俺吸血鬼だったわWWW

.....

ピシユン！

ゴオオオオオオオ！！

「こんな感じ。」

「なるほど。」

どんな感じ？ とか思ってる読者達に説明だ！

シンリーは今、目からビームを出して十字架型の爆発を起こしたのだ。俺の嫁と同じ名前のアニメでよくでてくるあれだ。

「しかし見たところほとんど完全品に見えましたが、なにか問題でも？」

「今は無理矢理カタチだけ整えて撃つただけだよ。気しか使っていないし。」

「つまり見た目だけで中身がスカスカというわけですか？」

「そつゆつこと」

「ふむ…あのカタチでなくては駄目なのですか？」

「そこは君ィ、ロマンだよ。」

そこは妥協したら負けじゃない？

「しかしそれだと完成までに少し時間がかかりますが……」

「安心しろ、お泊りセットは持ってきている。」グッ

「なるほど、それは安心……ではなくて、ここに泊まるつもりですか？」

「駄目か？」

「いえ、一応部屋もあることですし大丈夫でしょう。では案内しますよ。」

……

「〜で、最後にコチラが寝室となります。」

「なあアル、一つ聞いていいか？」

「……」

「……クウネル。」

「なんですか？」

「（こいつ面倒くせう……）一つ聞いていい？」

「はい、なんででしょう。」

「ここ本当に図書館？」

なんで風呂とかあるわけ？

「…………永遠の謎です」

「迷宮入りですか」

謎なのだった

数日後

「なぜ出来ないんだ……………」

「食事中くらいは開発のことは忘れてくださいよ」

現在昼食中。アル…もといクウネルの作ったスパゲティを二人でつく。

うむ、やはりカルボナーラは最高だな

「けどクウネルがこんな料理できたなんて驚き。なんで詠春手伝んなかったの？」

「料理ができるようになったのは地下に入ってからですから。今ではちよつとした趣味です。お味はいかがですか？」

「超美味い」

五月には及ばんけどな！

「それはよかった。それと貴方の寝室が少々散らかっていたので掃除しておきましたよ」

「やだ…なにこの子、嫁に欲しい」

「フフフ……ではドラゴン達が子供ですか？」

こいつの腹からどうやってあの巨大な龍が生まれるのというのか

「そついやお前のワイバーンに名前つてあるの？ 俺知らないけど」

「クウネル・サンダーズにちなんでフライドポテトと名付けました。私はポテトと呼んでいます」

「……………」

強く生きるよ……………ポテト

「いいんじゃない？ お前のネーミングセンス、ナメクジのぬめりのような輝きがあるよ」

「そんな輝きいりません…………と、そういえばこの前ポテトとティガがじゃれあっているのを見たとき、ティガが口から光線みたいなの出してたんですが…………」

「ああ、最初俺と戦った時もそんなん出した気がするなあ。んでそれがどした？」

「あれを調べてみれば良いのでは？」

……………

「ぬかったわあ！」ガバツ

それだ！　なんか久しぶりすぎて完全に忘れてた！　ティガの破壊光線の発射の仕組みを調べて応用すれば…………

「こうしちゃ居れん！ 先に行ってるぞクウネル！」

「待ってください！ せめて完食してから…… ああ、もう行ってしまいましたか」

一人で食器を片付けるアルはどこか家庭的だった

……

ピシュン！

ヒュウウウウウ……

カッ！

シュゴオオオオオオオ……！

ティウンティウンティウン

「なんだ、やれるじゃないか！ ハッハッハ……」

「……最後に変な効果音が聞こえたような」

「気のせいじゃね？」

あの後ティガの破壊光線を調べたら、発射するとき口内から射出方向に向けてのノズルを特殊な練り方をした気で作っていることが判明した。

なぜ気で作っているのかは、魔力と気の相反作用を用いて魔力で出来た破壊光線をノズル外に漏らさず、口内を傷つけないことと、反発力を上手く使い方向を正確に決めれるという利点のためだった。

俺とアルは、魔力・気の「箱」を様々な方法で作り、中に相反する力を入れてもそれが漏れないか、相反作用が外に現れないかを研究・改善していき、ついに魔力で編んだ「外殻」と「薬莢」を創りあげた。

この「外殻」は光粒子のように創りあげたので、レーザー状に打ち出すことができる。

超圧縮した俺の気をこの「薬莢」に籠め、それを「外殻」で覆い、ビームで打ち出す。

着弾後「外殻」が外れ、円柱形の底面と横に二つ穴がついたような形の「薬莢」から圧縮された気が解放され、十字架型の炎ができる。完璧だ。

「ヤベー、テンションめっちゃ上がってきたわ。」

「徹夜で作業するからです。しかしこれ、実用できる位にまで気を圧縮できるのが貴方がジャックしかいませんから、またしても専用技になってしまいましたね。」

「大戦の時にみんなでこれやりたかったなあ。」

「敵にとっては地獄絵図でしょうね……」

燃える戦場、消滅する鬼神兵、無数に立つ十字架。

やべえwwwマジ面白そうwww

「名前はどうしよっかな」

「見た目は不夜城レッドみたいですけどね」

「待て、何故それをお前が知っている」

「ロリータだからです」

「なにコイツこわい」

「ではブラッディクロスで」

「ケンシロウ、貴様では俺に勝つことは……って違う!」

「サザンクロス」

「ケンシロウ、貴様では……って同じじゃん」

「アインって素敵ですよ。彼はロリコンの鏡ですよ」

「ねえこれなんの話だっけ?」

結局技名は「目からビーム!」になった。

……

「あーサツパリした」

でも図書館に何故風呂があるのかは依然謎だ

「しかしこれ程の技を二日で作り出すとは、バカトリオの呼称を考
え直さなくてはいけませんね」

「ハハツ、懐かしいなソレ」

あんま心配はしてないけどナギは無事だろうか……

「技も出来たことだし俺は帰るよ。世話になったな」

「その前に……一度ナギの息子を見て行きませんか？ 直接見るの
は初めてですので」

「なんだアイツら、まだ図書館島にいたのか。じゃあついでだし見
ていくか。地底図書館ってどっち？」

「こちらです。ついて来てください」

……

「キヤーー！ ネギ君助けてーっ！」

「フオフオフオ！」

現在佐々木が絶賛捕われ中
俺達は陰から遠目に見ている

「なんとという愉快犯、あのジジイ捕まらんかな」

「ハッキリ言ってセクハラですよねこれ」

アルと話してたら野菜小僧が杖を手に取った

「くられ魔法の矢！ 『魔法の射手』！」

シーン……

「プツ
WWW
WWW
WWW」

どうみても痛い子です。本当にありがとうございました。

ゴーレム（学園長）含む全員が呆然としてる。
マジウケるんですけどWWW
WWW

その後色々あってネギ達は無事脱出できたのだった！

最後の螺旋階段で学園長ゴーレムが落ちる時にアルと一緒に重力魔法で加速させた。

あれって操縦者と肉体もある程度リンクしてるから、あの妖怪ジジイは大怪我したことだろう。ざまあWWW

「んでお前から見てどうだった？ ナギの息子は？」

「ふむ……まだ成長段階ですからなんとも言えませんねえ。むしろ彼以上に周りの子達が凄かったですよ」

たしかに楓とクーは抜きん出て優秀だからなあ、楓なんて魔法先生と大して実力変わらないんじゃない？

「まあ色々と面白いものが見れましたので私は満足です。シンリーはこのまま帰るのでしょうか？ ポテトも寂しがっていることですし、また来て下さいね」

「おう、そんなときもちゃんとティガ連れてきてやるよ。じゃあな」

なんかいつの間にかワイバーン達の仲が良くなってた件

.....

試験当日

野菜小僧一行が遅れて到着

テスト開始

みんな眠い

ネギ癒しの魔法を使う（不正行為です）

いやもう、この糞餓鬼はホントに社会嘗めてるとしか思えないね。
今月で違法行為何回やってんの？

マギステル・マギ（笑）だね。周りの魔法先生もなんで注意しないのか……

「ガハラ先生、そっちは終わりましたか？」

「ええ。新田先生、お疲れ様です。」

一般人にはちゃんとそれなりの態度をとるよ？俺は

そんなことを考えてると頭に包帯を巻いた妖怪が出てきた。

「おや、学園長どうしたんです？ その怪我は」

「ちょっと階段で転んだのう。」

螺旋階段だけどな！

なんかジジイが睨んでくる

こっちみんな

.....

結果、21Aは成績トップだった。

ネギ・スプリングフィールドも正式な教員となり、今は終了式も終

わり、クラスでパーティーをしている。

例によってエヴァ、茶々丸、龍宮、刹那と人だからから離れて肉まんをパクついていると、野菜小僧がバニーの格好をした長谷川をムリヤリ連れてきた。

嫌がる女子をムリヤリ連行とか……

ムカついたので肉まんを糞餓鬼の顔に投げつけてやった

五月にめっちゃ怒られた。それも凄い形相で。普段怒らない人が爆発すると超怖いね。周りの皆もビビってたよ

そのまま土下座で延々と食べ物の大切さとありがたみについて教え込まれ、いつの間にかパーティー終わってた。

くそっ……ちうたんの裸見逃した……

そろそろ試練が近い、やっぱあの餓鬼ムカつくから俺も参加して虐めてやるのかなあ……

21話 司書って仕事楽そう。準二トトじゃね？(後書き)

スマDXで俺がファルコン、友人Aがピーチ、Bがリンク、Cがクツパを使った時(もちろん全員男)

他三人が上において、抜ける床の下からジャンプ上Aで執拗に剣で突き刺してくるリンク

ファルコン(俺)「ちょ、リンクうざ」

リンク(B)「ジョインジョインリンクウ」

ピーチ(A)「あっ／／／やんっ／／／ 下から突いちやらめえ！
／／／」

リアル大乱闘勃発、友人Aフルボッコ

俺がファルコンキックと称して電気あんまをかけたのは言つまでもない

俺「ファルコンキック！ ファルコンキック！」ガツガツガツ

友人A「らめえっ！／／／」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2940/>

「立派な魔法使い」？なにそれおいしいの？

2010年10月9日11時10分発行